

國稅法改正案

明治十九年十二月七日

西 師 意

第一章

茲ニ魚ヲ沼中ニ漁スルヲ以テ其業トスルモノアリ。其ノ年々ノ漁スル所之ヲ其沼年々ノ産スル所ニ比例シテ苟クモ能ク其適度ヲ過ラザルトキハ、則チ蓋シ其ノ之ヲ漁スルニ際シテ彼レ敢テ大ニ苦心勞力ヲ費スコトナク、以テ能ク多數ノ漁獲ヲ見ルヲ見ベシト雖ドモ、而カモ若シ夫レ或ハ今年其漁數ノ寧ロ其産數ニ超過スル甚ダ多キガ如キノ事アリトセン乎、則チ明年必ラズ其産魚ノ割合ニ於テ一朝大ナル減少ヲ致シ、爲メニ漁人ハ自ラ以テ百尾ノ魚ヲ獲ルニ足ルベキノ勞力ヲ費ヤスアルモ、而カモ或ハ却テ二三十尾ノ魚ヲ漁スルコト能ハザル等ノ不幸ヲ免カレ

ザルナルベシ。顧フニ稅ヲ國內ニ徵スルハ亦恰モ魚ヲ沼中ニ漁スルニ異ナラズ。去レバ凡ソ國內ノ稅源ニシテ苟クモ能ク滋滿スルノ狀アルトキハ、則チ政府ハ唯少許ノ手數ヲ以テ能ク多數ノ稅金ヲ徵收スルニ足ルベシト雖モ、而カモ若シ夫レ或ハ稅源乾涸スルトキハ則チ政府ハ寧ロ非常ノ苦心ト非常ノ盡力トヲ費シ、以テ僅カニ少許ノ稅金ヲ徵收シ得ルニ過ギザルベシ。師意是ヲ以テカ則チ知ル「民富メバ則チ朕富ム矣」ノ聖言實ニ無量ノ旨味アリト。

之ヲ要スルニ凡ソ國能ク豊富ナルトキハ則チ稅法敢テ大ニ煩ハシキヲ要セズシテ而シテ猶能ク立ドコロニ數千萬金ヲ國庫ニ收納シ得ベキノ道アラント雖モ、而カモ若シ夫レ國遂ニ貧弱ニ陥ルトキハ則チ從テ甲點ニ向テ徵稅ノ源ヲ開カバ、茲ニ其事忽チ生氣ヲ失ヒ、或ヒハ乙點ニ向テ徵稅ノ率ヲ求メバ茲ニ其業忽チ以テ萎縮ノ狀ヲ呈シ、即チ新タニ諸種ノ稅法ヲ定ムルハ唯徒ラニ收稅官吏ノ増員ヲ要スルノミニテ、而シテ却テ國稅ノ上ニハ蓋シ殆ンド毫モ純實ナル增收ヲ致スコト能ハズト云フガ如キノ弊アルヲ免カレザルナリ。是故ニ凡ソ國稅ハ宜シク民力ト相適當スルヲ度トシテ、以テ之レガ稅額ヲ定ムベシ。然ラザレバ則チ徒ラニ多ク徵稅ノ手數ヲ増スアルモ、而カモ却テ種々ノ事情ノ爲メ遂ニ不幸ニシテ亦敢テ民力ヲ超過スル甚ダ多キ金額ヲ國庫ニ收納シ得ルコト決シテ之レアラザルベキヲ以テナリ。譬ヘバ茲ニ一政府アリ、蓋シ其國稅ノ既ニ殆ンド民力ニ相當スルニモ拘ハラズ、或ハ猶一層多額ノ稅金ヲ徵收センコトヲ欲シ、

即チ例ヘバ酒造ニ向テ幾何ノ増稅ヲ賦課スルコトアリト想像セヨ。此時ニ當リテヤ蓋シ酒造ノ増加ト共ニ酒價モ亦大ニ騰貴シテ或ハ貧民ノ如キハ往々忍ンデ其飲用ノ酒量ヲ減ズル等ノ事アルニ至ラン。是ニ於テ乎世ノ酒類小賣商ノ如キ素ヨリ些少ノ利益ヲ得テ以テ僅カニ其糊口ノ道ヲ得ルモノナレバ、往々或ハ純酒ニ混スルニ清水ヲ以テシ、即チ純酒ナラバ一升二十七八錢許モ價スベキ處ヲ、此混合物ヲバ每升十七八錢ノ廉價ニテ賣捌キ、即チ特ニ以テ自ラ賣買酒量ノ多キヲ致シ、以テ容易ク貧困ナル飲酒家ノ需求ニ應ジ得ベキノ策ヲ講ズルモノアルニ至ラン。吁嗟人ノ飲酒ヲ好ムモノ誰レカ亦純酒ヲ喜バザルモノアラン。誰レカ亦水酒ノ混合物ヲ欲スルモノアラン。然リ而シテ凡ソ貧民等ガ往々純酒ノ高價ナルヲ避ケテ而シテ混合物ノ廉價ナルヲ求ムルモノハ、是レ必竟其人既日々ノ酒量ニ定度アリテ、而カモ其資力以テ彼ノ高價ナル純酒ヲ買フニ足ラザルガ爲メ、遂ニ止ムヲ得ズシテ或ハ水酒混合物ヲ以テ僅カニ其酒飲欲ノ渴ヲ醫スルニ外ナラザルナリ。顧フニ酒稅少額ナルトキハ則チ從テ酒價低廉ナリ、酒價低廉ナルトキハ則チ凡ソ酒ノ市ニ鬻カルルモノ曾テ亦水酒混合ノモノヲ見ルコト甚ダ稀レナリ。故ニ茲ニ酒稅少額ナルニ際シテハ則チ凡ソ酒店ノ賣捌ク所一升ハ必ラズ一升ノ稅ヲ出スナルベシト雖モ、若シ夫レ酒稅多額ナルニ際シテハ即チ或ハ酒店ニ列スル所ノモノ、一升ハ常ニ一升ノ稅ヲ拂ハズシテ往々七八合若クハ五六合ノ稅ヲ拂フノミト云フガ如キノ現象アルヲ免カレズ。其故何ト

ナレバ凡ソ混合物ニ在テハ一升中ノ七八合若クハ五六合ナル純酒ノ外、其二三合若クハ四五合ナル清水ニ至テハ曾テ亦毫モ租稅ヲ負擔スルコト之レアラザルベキヲ以テナリ。師意故ニ曰ク民力ニ適當セザル多額ノ國稅ハ、到底亦巧ミニ之ヲ徵收スルノ方法アラザルナリト。

第二章

(此章總テ假定ヲ以テ說ヲ立ツ是レ他ナシ師意ノ如キ貧書生ハ何分此事ニ關スル精確ナル統計表ヲ得ルニ難ケレバナリ)

日本ノ國稅ハ六千四百有餘萬圓ナリ。今之ヲ三千八百有餘萬圓ノ人民ニ割付クレバ、即チ一人ニ付僅カニ一圓七十錢許リナリ。一年一圓七十錢許ノ租稅ハ今遽カニ之ヲ視レバ敢テ苛重ノモノニアラザルベシト思惟セラルルナリ。然リト雖トモ世人試ミニ思ヘ、日本ニ於テハ凡ソ人ノ職業ニ從事スルモノ、或ハ之ヲ彼ノ歐米諸國ノ人々ニ比シテ其勞働年月蓋シ甚ダ多カラザルニ似タリ。即チ日本ニ於テ尋常ノ家ニ在リテハ大抵二十一二歳ノ頃ヨリ漸ク一人前ノ働手トナリ、而シテ五十歳前後ニ至リテ往々樂隱居ヲナスヲ常トス。是故ニ人ノ一生ニハ素ヨリ長短相異ナルモノアリト雖モ、而カモ今茲ニ假リニ九十歳ヲ以テ其最高齡ト見做シ、且ツ十歳以下ノモノハ其數全國人口ノ百分ノ二十。二十歳以下十歳以上ノモノハ同百分ノ十八。三十歳以下二

十歳以上ハ同百分ノ十六。四十歳以下三十歳以上ハ同百分ノ十四。五十歳以下ハ百分ノ十二。六十歳以下ハ百分ノ八。七十歳以下ハ百分ノ六。八十歳以下ハ百分ノ四。九十歳以下ハ百分ノ二ノ割合ト假定セヨ。然ルトキハ則チ全國內二十歳以上五十歳以下ナル強壯ノ男女ハ其數殆ント千六百萬人(凡ソ男女各々八百萬人)トナリ、而シテ十歳以上二十歳以下ノ少年男女ト、及ヒ五十歳以上六十歳以下ノ老年男女トハ、即チ之ヲ併セテ殆ント千萬人(男女各々五百萬人)トナル。願フニ強壯男子八百萬人ノ内官吏、補官僧侶兵卒學者論客巡査獄丁等、凡ソ其勞働ニ或ヒハ直接ニ農工商事業ニ關セザルモノヲ其數假リニ百萬人ト見做シ、猶ホ不具者、疾病者、役者、醫者、講談家、滑稽家、圍碁家、將碁家、畫家、無賴者、徒食富豪家ノモノヲ假リニ二百萬人アリト見做ストキハ、則チ日本國內専ラ農工商ノ實業ニ從事スル所ノ強壯男子ハ其數殆ント五百萬人ニ過ギズ。而シテ女子ノ如キハ八百萬人ノ内蓋シ五分ノ四以上ハ往々遊惰ヲ以テ其日ヲ送ルモノナルベケレバ、蓋シ其内多クモ二百萬人ノ勞働者ハアラザルコトナラン。次ニ又五百萬ノ老少男子ノ中ニハ假リニ二百萬ノ勞働者アリトシ、同數ノ老少女子ノ中ニハ假リニ一百萬ノ勞働者アリトスルニ於テハ、蓋シ其計算ノ或ハ多キニ過グルアルモ決シテ其ノ少キニ失セザルベキコト是レ師意ノ深ク信ジテ疑ハザル所ナリ。

次ニ日本ニ於テハ維新以來或ハ大陽大陰兩曆ヲ混用スルニ至リタルヨリ、凡ソ人ノ祝日、祭日等ノ爲メニ其職業ヲ怠ルコト蓋シ往々其多キヲ加フルニ至リタルガ如キモノアリ。去レバ今ヤ平均一年ノ内凡ソ其一割ノ日數ヲ休業スルモノトシテ、茲ニ一人一年間ノ職業日數ハ即チ三百二十有餘日トナル。而シテ強壯男子五百萬人ハ各々一日ニ平均二十錢宛ノ勞働ヲナスモノトシ又二百萬人ノ強壯女子ハ一日平均十五錢宛ト見做シ、老少男子ノ二百萬人ハ同平均十錢宛ノ老少女子ノ一百萬人ハ同平均八錢宛ト見做ストキハ則チ日本全國總數人民中凡ソ一ヶ年勞働ノ總價值ハ殆ンド四億有餘萬圓(日本現在ノ總物料ノ價值ニハアラズ宜シク混同スベカラズ)ニ過ギザルベシ。然ルニ茲ニ又國稅ノ外地方稅協議費學校費其他公事ニ關スル諸種ノ費用ハ凡ソ八千有餘萬圓ト假定シ、日本ニ於テ年々人民ヨリ公事ノ爲メニ支出スル所ノ總金額ハ即チ凡ソ一億五千有餘萬圓ナリト見做スコトヲ得ベシ。吁嗟四億有餘萬圓ノ勞働價值ニ對スル一億五千有餘萬圓ノ公費ハ果シテ之ヲ少額ナリト云フヲ得ベキ乎。師意素ヨリ政府有司ノ夙ニ能ク此事狀ヲ明知シ居ラルルナルベキヲ信ズルナリ。

第三章

(此章稅名ニ不可ナルモノアルガ如クンバ乞フ讀者教示ニ吝ナラザラン
コトヲ)

説ヲ爲スモノアリ曰ク、日本ニ於テハ六千四百有餘萬圓ノ内、國稅ノ内其六割六七分即チ四千三百有餘萬圓ハ是レ所謂地租ナルモノニシテ、而シテ其他僅カニ三割三四分ハ即チ酒造稅、煙草稅、醬油稅等凡ソ十六七種ノ租稅ノ總計ナリ。故ニ今此稅率ニ依レバ則チ是レ或ハ獨リ地租ニノミ偏重ニシテ、而シテ却テ大ニ他ニ偏輕ナルノ情アラザルベキ乎。即チ方今日本國稅ノ賦課法ハ果シテ獨リ農夫ニノミ苛酷ニシテ、而シテ他ノ商人工夫等ニ寬恕ナリト云フガ如キノ狀ニアラザルベキ乎ト。此言蓋シ殆ンド不可ナリ。何トナレバ凡ソ人ノ職業ニ從事スルモノハ或ハ農ニマレ工ニマレ或ハ商ニマレ、誰レカ能ク幾何カ土地ノ力ヲ借ラズシテ以テ充分ニ其職ヲ行ヒ得ルモノアラシヤ。即チ土地資本勞働ノ三者ハ是レ人々ノ其業ヲ務ムルニ當リテ、曾テ一日ダモ其一ヲ缺ク能ハザル所以ノモノナルニアラズヤ。即チ土地ハ獨リ農夫ノミ之ヲ用フルモノニアラズ、工夫モ商人モ亦皆其住屋商店製造所等ノ爲メニ必ラズ各々若干ノ土地ヲ用ヒザルベカラズ。故ニ今特ニ「田畑ニ賦課スルノ稅」トハ謂ハズシテ廣ク「土地ニ賦課スルノ稅」ト謂ヒタル以上ハ、素ヨリ農工商ノ區別ナク、各々其用フル所ノ土地ノ割合ニ應ジテ皆公平ニ其稅金ヲ負擔スル譯ニアラズヤ。顧フニ國立銀行稅等ハ勿論、酒造稅、醬油製造稅等ノ如キ、蓋シ稍々「物ノ資本即チ全員又ハ物品ニ賦課スルノ稅」トテモ謂フベク、而シテ船稅車稅等ハ蓋シ稍々「人ノ勞働即チ手足ノ働キニ賦課スルノ稅」トテモ謂フベキガ如キノ情アリ。然リ而

シテ所謂煙草稅賣藥稅菓子稅米商會所稅等ノ如キニ至テハ、則チ蓋シ「半ハ物品ニ關シ半ハ商業取引上即チ勞働ニ關スルノ稅」トデモ謂フベキ乎。夫レ然リ、今ヤ物品稅即チ間稅ト及ビ其他諸種ノ資本稅ハ蓋シ亦或ハ單ニ資本稅ト云ヘル意味廣濶ナル名稱ヲ以テ、普ク百種萬般ノ資本ニ向テ公平ニ之ヲ賦課スルモノナルニ於テハ、則チイザ知ラズ、苟クモ唯何々稅某稅ト稱シテ一物一業ニ付キ特ニ一二種類ノ資本ニ向テノミ之ヲ賦課スルアルガ如クンバ、則チ或ハ能ク如何ナル良法、如何ナル巧術ヲ以テスルモ、而カモ猶多少偏輕偏重等ノ患アルヲ免カレザルナリ。次ニ勞働稅ノ如キモ亦然リ。之ヲ萬般ノ勞働ニ賦課スルハ其事蓋シ甚ダ行ハレ難キガ如ク、去リトテ或ハ甲ノ勞働ニ向テハ獨リ之ヲ課スルモ、而カモ乙ノ勞働ニ向テハ曾テ之ヲ課セズト云フガ如キコトアルニ於テハ、則チ其課稅上亦稍々遺憾ノ情ナキ能ハザルナリ。是故ニ凡ソ稅ノ公平ナルハ即チ地稅是レナリ。稅ノ公平ナル能ハザルハ即チ資本稅ト勞働稅ト是レナリ。是ヲ以テカ師意常ニ謂ラク、苟クモ民力ニ適當スル限りハ、所謂國稅ナルモノハ成ルベク地稅ノ一途ヲ以テ之ヲ徵收シ、其他ハ或ハ證券印稅銃獵稅及ビ度量衡ノ如キ唯其徵稅上敢テ甚シキ手數ヲ要セザルモノノミヲ課シ、而シテ或ハ彼ノ大ニ徵稅上ノ手數ヲ要スルモノニ至リテハ寧ロ可及的之ヲ賦課セザルノ却テ施政上大ニ錯雜紛擾ヲ免カレ得ルノ優レルアルニ若カザルナリト。

第四章

税ヲ貧民ニ課スルハ蓋シ税ヲ富民ニ課スルノ甚ダ徴税シ易キニ若カザルベク、税ヲ貧民需用ノ物品ニ課スルハ蓋シ税ヲ富民需用ノ物品ニ課スルノ極メテ煩雜少キニ若カザルベシ。例ヘバ彼ノ酒造検査ノ甚ダ面倒ナルコトハ人々ノ皆能ク熟知スル所ナルガ、曾テ師意之ヲ或收税官吏ニ聞クニ、曰ク検査日ノ遅速ハ蓋シ氣候ノ寒暖、空氣ノ疎密等ト共ニ多少以テ酒量ノ増減ヲ表ハスコトアリ、然ルニ世ノ不熟練ナル酒造検査吏ノ如キ、往々或ハ此理ヲ悟ラズ、徒ラニ外狀ノ消長ニ欺カレテ爲メニ妄リニ無辜ノ良民ヲ怒鳴リ付クル等ノ弊ナキニシモアラザルナリ。余曾テ久シク之ヲ經驗スルニ、凡ソ獨力以テ能ク數百千石ヲ釀造スル所謂富裕ナル清酒營業家ノ如キニ在リテハ、蓋シ決シテ「脱税ヲ企テ以テ自ラ法網ニ觸ルル」等ノ危険ヲ冒スモノアラザルナリ。即チ酒造家ニシテ妄リニ脱税ヲ計ルモノハ太抵皆富裕ナラザル酒造家ニシテ、即チ「他人ノ資金ヲ借用シテ以テ僅カニ己レカ酒造業ヲ營ム」ト云フガ如キノ小酒造家輩ニ於テ往々之レアルヲ見ルノミト。吁嗟是レ實ニ税ヲ貧者ニ徵スルハ之ヲ富者ニ徵スルノ甚ダ易キニ若カズト謂フ所以ノ一例證ニアラズシテ何ゾヤ。又例ヘバ茲ニ煙草ト賣藥トヲ以テ之ヲ云ハン

乎、蓋シ此二者其徵税上ノ難易ハ素ヨリ、其間ニ種々ノ相異ナル所アリテ然ルナルベシト雖ドモ、而カモ唯特ニ「煙草營業者ニハ脱税者甚ダ多クシテ、而シテ賣藥家ニハ常ニ脱税者甚ダ多カラザル」ノ一事ハ是レ世人ノ既ニ皆熟知セル所ナラン。顧フニ此ノ如キハ果シテ何ゾヤ、即チ煙草ノ如キハ之ヲ賣ルモノ往々富者ニハアラズシテ、而シテ之ヲ買フモノ亦貧者甚ダ少ナカラズ。然ルニ若シ夫レ賣藥ノ如キニ至リテハ蓋シ之ヲ賣ルモノ、之ヲ買フモノト大抵中等以上ノ資産ヲ有スルモノナルベシ。去レバ凡ソ煙ニハ脱税多クシテ而シテ賣藥ニ脱税少キハ主トシテ是レ「其文ヲ賣買スルモノノ貧富如何ニ關ス」ト謂フベキノミ。

夫レ然リ、徴税ノ道之ヲ富者取扱ノ物品ニ徵スルヨリ容易ナルハナク、而シテ之ヲ貧者賣買ノ物品ニ徵スルヨリ澁難ナルハナシ。然リ而シテ凡ソ貧者ノ買フコト能ハズシテ且ツ其所有スルコト能ハザルモノハ蓋シ地所ヲ以テ其最ナルモノトシ、次ニ地所ニ序キテ貧者ノ取扱フコト能ハズ、又其ノ賣買スルコト能ハザルモノハ則チ蓋シ美麗ナル家屋ト及ビ美麗ナル衣服トニ若クモノアラザルベシ。是故ニ師意曾テ窃カニ謂ラク、苟クモ其税額ノ民力ニ適當スル間ハ凡ソ地租ニ次ギテ徴税ノ良源トモ稱スベキハ即チ實ニ家屋ト美服トノ二者ニ優ルルモノアラザルナリト、然リ而シテ今茲ニ其徴税ノ方法ハ大略左ノ如シ。

家屋税

- 第一 日本國ノ内地ニ於テ家屋ヲ所有スルモノハ、各々其建築ノ種類ト其家屋ノ立方積トヲ地方廳ヘ届出ヅベシ。
- 但シ建築ノ模様ヲ變更シ又ハ其立方積ヲ増減シタルトキ亦同ジ。
- 第二 地方廳ニ於テ家屋ニ關スル届書ヲ受ケタルトキハ必ラズ實際ヲ精査シ、然ル後其建築ノ種類ニ從ヒ之ヲ家屋臺帳ニ記入シテ以テ之ヲ徵稅ノ基本ト定ムベシ。
- 第三 家屋ヲ區別シテ十二種トナス。上等木造、中等木造、下等木造、上等石造、中等石造、下等石造、上等煉瓦石造、中等煉瓦石造、下等煉瓦石造、上等雜種造、中等雜種造、下等雜種造等即チ是ナリ。
- 第四 家屋稅ハ其建造ノ種類ニ從ヒ其率ヲ異ニスト雖モ各々一立方「メートル」毎ニ若干ノ稅ヲ拂フベキモノトス。

衣服稅

- 第一 日本國ニ於テ木綿ノ外諸種ノ美麗ナル衣服ヲ服スルモノハ其衣服稅トシテ一人ニ付一ケ年ニ若干ノ稅金ヲ政府ニ納ムベキモノトス。
- 第二 衣服稅ヲ納ムルモノハ其ノ納稅義務者タルコトヲ標示センガ爲メ、地方廳ヨリ各々衣服鑑札ナルモノヲ下付セラルベキモノトス。

- 第三 衣服鑑札ヲ携帯セズシテ妄リニ羅紗若クハ絹帛等ヲ着服スルモノハ必ラズ相當ノ罰ニ處セラルベキモノトス。

抑モ從來日本ニ於テハ所謂國稅ナルモノノ内、特ニ夫ノ證券印稅及ビ訴訟用印紙稅等ヲ除クノ外ハ蓋シ或ハ地稅ニマレ、酒稅ニマレ、或ヒハ賣藥稅ニマレ、煙草稅ニマレ、或ハ菓子稅ニマレ、醬油稅ニマレ、或ハ船稅ニマレ、車稅ニマレ、或ハ國立銀行稅ニマレ、株式取引所稅ニマレ、大抵皆是レ「人々ノ職業上及取扱上」ニ賦課スルノ稅トデモ稱スベキ乎。然ルニ今ヤ茲ニ師意ノ所謂家屋稅及ビ衣服稅ノ如キニ至テハ、則チ蓋シ從來ノ各種國稅ト大ニ其趣ヲ異ニスルモノアリ。何トナレバ若シ或ハ材木稅、煉瓦稅ト稱シ、若クハ絹布稅、羅紗稅ト稱シテ以テ之ヲ材木又ハ煉瓦石等ヲ製造販賣スルモノヨリ徵收シ、若クハ之ヲ絹帛又ハ羅紗等ヲ製造販賣スルモノヨリ徵收スルガ如クンバ、則チ其稅質亦殆ント從來ノ各種國稅ト相異ナル所アルヲ見ザルナラント雖トモ、而カモ茲ニ苟クモ家屋稅若クハ衣服稅ト稱シテ以テ單ニ家屋ト衣服トノ使用者ニ課稅スルガ如キニ於テハ則チ其稅質蓋シ全ク職業上ノモノニハアラズシテ、而シテ殆ント是レ職業外物品ノ使用稅トモ稱スベキ一種ノ稅目トナルナリ。夫レ然リ凡ソ職業者ノ其職業上ノ物件ニ於ケルヤ常ニ必ラズ毫厘ノ利害モ決シテ輕忽ニ之ヲ看過スルコトナカルベシ。而ルニ所謂職業外物品ノ使用ノ如キニ至リテハ則チ人ト各々嗜好心トナン云ヘルモノアリテ、以

テ頻リニ之レガ使用ヲ誘導スルナルベキガ故、或ハ一朝其嗜欲ノ旺盛ナルニ當リテヤ、假令少シク損失アル事ト雖モ往々敢テ其損失ヲ物ノ數トモセズ。必ズ以テ熱ク其嗜欲ヲ満足セシメンコトヲ希望スルヲ常トス。是故ニ凡ソ職業稅ハ其輕重必直ニ農工商實業ノ盛衰ニ影響スルノ最モ著シキモノアルヲ見ルベシト雖ドモ、而カモ凡ソ職業外物品使用稅ノ如キハ其輕重殆ント敢テ民業ノ振不振ニ影響スル所ナシト謂テ可ナラン乎。且ツ夫レ誠ニ思ヘ、家屋ト衣服トノ如キハ蓋シ夫ノ酒煙草ノ如キモノトハ大ニ其ノ用ヲ異ニシ、即チ特ニ中等以上ノ富民ニ在リテハ或ハ其衣服ヲ華美ニシ、其家屋ヲ壯麗ニセント欲スルノ情甚ダ旺盛ナルベキニモ拘ハラズ、茲ニ若シ夫レ世ノ稅租ヲ負擔スルニ苦シムノ貧民輩ニ至リテハ或ハ其衣服欲其家宅欲ノ敢テ亦其飲酒欲其喫煙欲ノ極メテ甚シキニ似ザルヲ見ルベキナリ。師意是ヲ以テカ則チ曰ク、稅ヲ家屋ノ所有者ト衣服ノ使用者トニ課スルハ是レ地租ニ次ギテ稅上最モ煩ハシキ手數ヲ要セザルノ良稅法ナラント。

次ニ家屋稅衣服稅ヲ外ニシテ別ニ師意ノ稍々徵稅ノ良源ナラン乎ト思惟スル所ノモノハ、即チ徵兵免役稅ナルモノ是レナリ。顧フニ陸海軍兵政ノ上ヨリ之ヲ謂フトキハ則チ徵兵免役稅ハ實ニ是レ師意ノ喜ンデ之ヲ課セント欲スル所ノモノニハアラズト雖ドモ、而カモ若シ夫レ一朝數百萬金ノ國稅ヲ徵收セント欲シテ、而シテ又其徵稅上最モ手數ヲ要セザルモノヲ求ムルトキ

ハ則チ師意茲ニ徵兵免役稅ヲ世ノ徵兵畏忌者ニ賦課スルノ最モ捷徑タルベキヲ信ズルナリ。何トナレバ凡ソ好ンデ稅ヲ出スモノハ是レ稅ノ良納者ナリ。稅ヲ出スヲ厭フテ而シテ誠ニ物惜シクニナルハ是レ稅ノ不良納者ナリト謂フベキ乎。然リ而シテ凡ソ世ノ富民ノ子弟等ハ或ハ大抵其ノ非常ニ兵役ヲ畏忌スルト同時ニ、茲ニ彼輩若シ「稅ヲ出サバ兵役ヲ免カル」トノ政令ヲ見ルトキハ、則チ亦必ラズ非常ニ喜ンデ以テ其稅ヲ負擔スルノ義務ヲ甘受スルナルベシ。是故ニ今ヤ陸海軍兵政ノ上ヨリ之ヲ謂ハズシテ、而シテ單ニ徵稅上ノ都合ノミヲ以テ之ヲ謂フトキハ則チ所謂徵兵免役稅ナルモノモ亦夫レ實ニ一箇ノ良稅目ナリト謂フニ足ラン乎。

此章ノ論述ヲ完了スルニ際シテ師意茲ニ聊カ讀者ノ注意ヲ促サザルベカラザルモノアリ。曰ク家屋稅、衣服稅ハ徵稅上最モ手數ヲ要セザル所ノモノナリ。徵兵免役稅ノ如キモ亦是レ時宜ニ依リテハ徵稅ノ一策ト見做シテ可ナリ。然リト雖トモ今ヤ凡ソ此等諸種ノ稅法ヲ以テシテ能ク民生ヲ害スルコトナク、而シテ能ク巨萬ノ稅額ヲ國庫ニ收納シ得ルハ蓋シ唯民力ノ能ク苦痛ナク其稅額ニ堪ヘ得ベキノ時ニ於テ特ニ其然ルヲ見ルベキノミト。

第五章

前章ニ論ズル所ノ如キ新種税目ノ事ハ茲ニ暫ラク之ヲ措キ、今ヤ師意特ニ現行税目ノ一二ニ付キテ少シク其徵税法ヲ輕易簡便ニスルノ策ヲ左ニ講ゼン。

抑モ現行ノ徵税法ニ從ヘバ例ヘバ酒造税ノ如キ或ハ毎年其徵税ノ額ヲ確定スルノ前ニ當リテ必ラズ先ヅ酒造検査トナン云ヘル事ヲ爲サザルベカラズ。然リ而シテ茲ニ此検査タル、或ハ甲酒造家ト乙酒造家トハ其相距ル僅カニ一町餘ニシテ、而シテ乙酒造家ト丙酒造家トハ其相距ル亦僅カニ三十間許ニ過ギズト云フガ如キノ有様ナラバ、則チ蓋シ一日一名ノ検査員ヲシテ數家若クハ十數家ノ検査ヲモ受持タシムルコトヲ得ベシト雖モ、而カモ若シ夫レ山村僻邑ノ如キニ在リテハ則チ蓋シ往々數里ヲ隔テテ僅カニ一二ノ酒造家アルノミニテ亦往々其道路ノ甚ダ崎嶇狹隘殆ント車行舟行スル能ハザルガ如キノ事情モアリ、爲メニ一人ノ検査官ガ一二ノ酒造検査ヲ仕遂グルニ、大抵數日若クハ十數日ノ時日ヲ費ヤサザルベカラザル等ノ事ナキニアラザルナリ。且ツヤ又此検査タル蓋シ酒造家ニシテ悉ク皆正直ナルモノノミニナラバ則チ稍々可ナルベシト雖ドモ、而カモ若シ夫レ或ハ偶々不正ナル酒造家アルガ如クンバ則チ検査官ハ往々終夜寢ネズシテ、以テ之レガ取調ニ刻苦セザルベカラサル等ノ事ナキニアラザルナリ。夫レ然リ現今ノ有様ニ依レバ酒造検査ハ常ニ府縣ノ收税官ヲシテ非常ニ面倒ナル手數ヲ要セシムルガ如キノ弊ナキニアラズ。顧フニ此弊ヲ一掃スル其方法果シテ如何。

曰ク。

- 第一 一郡若クハ數郡ヲ以テ一酒造區トナスベシ。
- 第二 酒造區内便宜ノ地ヲ撰ヒ一ノ酒類組合醸造所ヲ置ク。
- 第三 日本ニ於テハ組合醸造所ニ於テスルノ外ハ一切酒類ヲ醸造スルコトヲ許サズ。
- 第四 組合醸造所外ニ於テ酒類ヲ醸造シタルモノハ必ズ若干ノ罰金ニ處セラルベキモノトス。
- 第五 組合醸造所ノ規約ハ酒類醸造上ノ改良進歩ヲ計ルコト、及ビ組合醸造所外ニ於テ酒類ヲ醸造スルモノアルトキ之ヲ告訴スルコト等ヲ目的トシテ衆酒造家輩ノ會議ヲ以テ之ヲ定ムルモノトス。

抑モ茲ニ彼ノ自家飲用酒醸造ヲ許可スル一事ノ如キ、蓋シ其事實ニ政府寛仁ノ致ス所ナルベシト雖トモ、而カモ凡ソ世ノ事物ノ錯雜スルハ大抵皆「exception」即チ「例外ノ事」ヨリ其端ヲ開クヲ常トス。故ニ今ヤ政府ニシテ苟クモ徵税上ノ錯雜ヲ免レント欲セバ則チ成ルベク夫ノ自家飲用酒醸造等ノ事ヲ全廢スルアルニ若カザルナリ。

右ハ唯特ニ酒造税ノミニ付キテ立論シタルモノナルガ、今ヤ茲ニ例ヘバ煙草税ノ如キモノモ亦或ハ煙草組合植付所トカ、或ハ煙草組合製造所トカ云フガ如キモノヲ設置セシメテ以テ成ル

ベク徴税上ノ手數ヲ簡易ニスルヲ宜トスルナリ。

摘要

前數章ニ於テ論究セル所ヲ摘要スレバ則チ左ノ如シ。

第一章 凡ソ税ノ徴收シ易キト否トハ大抵其徴收法ノ如何ヨリモ寧ロ其民力ノ之ニ堪フルト否トニ關ス。

第二章 日本今日ノ民力ハ果シテ能ク日本今日ノ税額ニ堪ヘ得ベキ程ノモノナリヤ否ヤハ政府ニ於テ夙ニ善ク之ヲ明知セラルルナラン。

第三章 苟クモ民力ニ堪フルノ税額ナラバ或ハ寧ロ地租ノ一途ヲ以テ之ヲ徴收上甚タ煩ハシカラザルモノアルニ若カザルナリ。

第四章 税ヲ富者若クハ富者ノ需要物ニ課スルハ蓋シ税ヲ貧者若クハ貧者ノ需要物ニ課スルヨリモ甚ダ易クシテ且ツ甚ダ便ナリ。故ニ衣服税家屋税徴兵免役税ノ如キモ亦蓋シ止ムヲ得ザル時ノ二三良策ナラン。

第五章 第四章ノ策ニ頼ルコト能ハザルガ如ランバ則チ最後ノ策トシテハ茲ニ酒類組合醸造所

及煙草組合製造所等ヲ設ケテ以テ成ルベク收税検査ノ方法ヲ簡便ニシ、以テ大ニ良民ヲ保護シ姦商ヲ鋤去スル所以ノ道ヲ明カニスルヲ要スルナリ。

右ハ唯師意鄙見ノ大略ノミ、若シ夫レ詳細ノ事ニ至リテハ他日緩ル々論究スルコトモアルベキナリ。

十九年十二月十一日

名古屋矢場町一ノ切三十五番地

西 師 意印

税法改正案餘言

昭和十九年十二月二十六日

西 師 意

本論第四章ニ於テ論ジテ曰ク、徵稅ノ道之ヲ富者取扱ノ物品ニ徵スルヨリ容易ナルハナク、而シテ之ヲ貧者賣買ノ物品ニ徵スルヨリ澁難ナルハナシト。又曰ク職業稅ハ其輕重必ラズ直ニ農工商實業ノ盛衰ニ影響スベシト雖ドモ、而カモ凡ソ職業外物品使用稅ノ如キハ其輕重殆ント敢テ民業ノ振不振ニ影響スル所ナシト。

右ノ道理ヲ以テ之ヲ推スニ、茲ニ又一二徵稅ノ良源トモ云フベキモノアリ。何ゾヤ犬稅及猫稅是レナリ。顧フニ犬ト猫トノ如キ、或ハ獵用夜警用捕鼠用等ノ爲メニ之ヲ飼養スルモノノ外世間往々玩弄用ノ爲メ之ヲ飼養スルノ人アリ。昔者孟軻言ヘルアリ。曰ク、庖有肥肉廐有肥馬民有飢色野有餓莩此率獸而食人也ト、今ヤ其レト此レトハ稍々異ナル所アリト雖モ、而カモ世

間妄リニ多クノ犬猫ヲ飼養シ、以テ大ニ國內ノ穀肉ヲ徒消スルモノアルニ於テハ則チ師意亦實ニ貧困ナル小民輩ノ爲メニ深ク之ヲ哀マザルヲ得ザルナリ。

且ツ夫レ近年ハ世ノ中等以上ノ人々ノ間ニハ或ハ遊獵トナン云ヘルコト大ニ流行シ、從テ或ハ撰ンデ良犬ヲ飼養スルノ人世間亦甚ダ少シトセズ。抑モ遊獵ノ事タル、師意士君子ノ爲メニ素ヨリ其良遊タルヲ稱スルモノナリト雖トモ、而カモ茲ニ凡ソ日本ノ如キ農業國ニ於テ或ハ鳥類ノ數年ニ日ニ益々其少キヲ加ヘ、爲メニ田畑ノ間往々害虫ノ増殖ヲ見ルコト是レ亦敢テ大ニ喜ブベキノ事ニハアラザルベシ。夫レ然リ世ニ犬ヤ猫ヲ飼養スルモノノ年々其數ヲ増加スルハ誠ニ以テ國家泰平ノ徵トシテ之ヲ喜ブベキニ似タリト雖ドモ、而カモ唯日本今日ノ如キニ際シテハ或ハ之ヲ徵稅ノ良源ト見做シ、即チ犬一頭ニ付國稅若干及猫一頭ニ付國稅若干ヲ賦課スルノ甚ダ得策タルヲ感ズルナリ。依テ一言以テ税法ノ餘論トナス。

保護稅論

明治十九年十二月二十日

西 師 意

凡ソ國能ク自由貿易ヲ實行スルニ適當センコトヲ欲セバ、必ズ少クトモ三箇ノ要件ヲ具ヘザルベカラズ。即チ第一、通商貿易上宜シク能動 (active) ノ地位ニ居ルノ國タラザルベカラズ。貿易上受動 (passive) ノ地位ニ居ルモノハ決シテ自由貿易國タルニ適セザルナリ。第二、文明進歩上宜シク舊國タラザルベカラズ。文明ノ新國ハ決シテ自由貿易國タルニ適セザルナリ。第三、文明事業上宜シク富國タラザルベカラズ。文明ノ貧困ハ決シテ自由貿易國タルニ適セザルナリ。

何ヲカ「貿易上能動ノ國」ト謂フ。曰ク其國人民航海ト貿易トニ熱心ナルコト、例ヘバ英國ノ如ク即チ商ヲ以テ其國ヲ立ツルモノ是レ、之ヲ「貿易上能動ノ國」トハ謂フナリ。之ヲ反言

スルニ凡ソ貿易上能動ノ國ニ在リテハ人民主トシテ貿易ヲ他國ニ仕向ケンコトヲ勤メ、而シテ受動ノ國ニ在リテハ寧ロ之ヲ仕向クルコト甚ダ少クシテ而カモ往々他國ヨリ仕掛ケラルルヲ常トス。顧フニ貿易ヲ他國ニ仕向クルモノハ大抵其好ム所ノ國ニ行キテ其好ム所ノ貿易ヲ爲スコトヲ得ベシト雖モ、若シ夫レ茲ニ貿易ヲ仕掛ケラルルモノノ如キニ在リテハ、或ハ對手者ノ掛引次第ニテ随分不用ナル品、無益ナル物ヲバ買ヒ入ルル等ノ事ナキニシモアラザルナリ。譬ヘバ茲ニ物ヲ買ハントテ態々市店ヲ尋ネ行クモノノ如キ、素ヨリ彼レ其ノ好ム所ノ店ニ於テ、其ノ好ム所ノ品物ヲ買ヒ得ルノ便利アルノミナラズ、或ハ彼レ其ノ豫メ買ハント期シタルモノノ外ハ亦妄リニ無益ナルモノ、不用ナルモノヲ買フ等ノ事モ蓋シ甚ダ多カラザルナルベシ。而ルニ世ノ行商者即チ振賣商人 (例ヘバ振賣商間物商ノ如キモノ) ニ就テ物品ヲ買ハント欲スルモノノ如キ、或ハ自ラ不用ナリ無益ナリト知リツツモ猶思ヒ掛ケナク一時ノ好奇心ニ誘ハレテ以テ妄リニ贅物贅品ヲ買入ルル等ノ事甚ダ多キニアラズヤ。夫レ然リ凡ソ貿易ヲ他國ニ仕向クルノ國ハ蓋シ恰モ物ヲ市店ニ買フノ人ノ如ク、而シテ貿易ヲ他國ヨリ仕掛ケラルルノ國ハ蓋シ亦殆ント物ヲ振賣商人ヨリ買フノ人ニ類セリ。是故ニ所謂貿易上受動ノ國ニ在リテハ、特ニ其他國ヨリ仕掛ケラルル所ノ貿易ニ依リ、或ハ妄リニ贅物贅品ヲ買ヒ入ルルコトナカランガ爲メ、所謂保護稅ナルモノヲ外來ノ贅物贅品ニ課シ以テ大ニ其濫入ヲ防止スルノ甚ダ必要ナルヲ

感ズルナリ。

何ヲ以テカ文明ノ新國ハ自由貿易國タルニ適セザル乎。例ヘバ茲ニ都會ノ商人ト田舎ノ農人トヲ比スレバ、素ヨリ都會人ノ物品賣買ニ巧ミニシテ、而シテ田舎人ノ常ニ商機商利ニ暗キコトハ誰人モ皆能ク熟知セル所ナラン。之レト同ジク茲ニ文明舊國ノ人民ト文明新國ノ人民トヲ比較スルニ、則チ文明新國ノ人民ハ猶且ツ商機商利ニ暗クシテ、素ヨリ以テ文明舊國ノ人民ノ誠ニ敏捷ナルモノニ敵スルコト能ハザルナルベシ。且ツ夫レ凡ソ文明ノ新國ニ在リテハ、蓋シ文明ノ事物ニ關シテハ必ラズ事々物々新タニ之ヲ調製シ、若クハ新タニ之ヲ購求セザルベカラズ。然ルニ凡ソ人多少ノ金錢ヲ所有スルニ當リテヤ、其ノ曾テ其製造法ニ慣熟セザル所ノ物品ノ如キニ關シテハ苟クモ廉價ニ之ヲ買入レ得ベキノ間ハ、往々或ハ自ラ之ヲ製造スルノ面倒ヲ見ンヨリモ、寧ロ早速之ヲ他ヨリ購買セン事ヲ欲スルナルベシ。又若シ萬一ニモ自ラ之ヲ製造センコトヲ企ツルモノアルモ、素ヨリ其ノ之レガ製造法ニ慣熟セザルガ爲メ、或ハ一朝意外ノ損失ヲ蒙リ、遂ニ以テ申途其事ヲ廢棄スルモノ往々ニシテ皆然リトナス。是故ニ凡ソ文明ノ新國ニ在リテハ蓋シ其國內文明事業ノ稍々整頓スルニ至ルマデハ必ず保護稅ヲ外來品ニ課シテ以テ其濫入ヲ防止シ、以テ國內人民ヲシテ速カニ文明事物ノ調製方法ニ慣熟スルノ機會ヲ得セシメザルベカラザルナリ。

夫レ然リ英國人民ガ自由貿易ヲ以テ其國ヲ富強ニシ米國人民ハ保護貿易ヲ以テ其國ヲ富盛ニシタルノ事實ハ是レ世人ノ夙ニ能ク熟知セル所ナラン。顧フニ此ノ如キハ果シテ何ゾヤ。即チ英ハ舊國ニシテ而シテ米ハ新國ナルヲ以テ故ニ即チ然ルニアラザルベキ乎。是故ニ今ヤ若シ英米假リニ其地ヲ換フレバ蓋シ英ハ保護稅ヲ以テ興リ、米ハ自由貿易ヲ以テ興ルト云フガ如キノ事ナキニアラザルベシ。吁嗟英ノ自由貿易ヲ採ルハ唯其新國ナルガ故ナリ。世ノ專ラ自由貿易ヲ喜ビ若クハ專ラ保護貿易ヲ喜ブノ論者ハ豈ニ夫レ此理ヲ知ラズシテ可ナランヤ。

何ヲカ文明ノ貧國ト謂フ。曰ク手工即チ人カヲ以テ製造スル所ノ物品ハ暫ラク之ヲ措キ、凡ソ器械即チ天カヲ以テ物品ヲ製造スルコトノ未ダ盛ンニ行ハレザルノ國ハ、是レ之ヲ文明ノ貧困トハ謂フナリ。顧フニ手工品ノ精粗ハ之ヲ鑒識スルコト甚ダ難ク、而シテ機製品ノ美惡ハ大抵一見以テ之ヲ判別シ得ルヲ常トス。去レバ茲ニ譬ヘバ伊萬利燒ノ極メテ精巧ナル器物ト硝子製ノ美麗ニシテ而カモ高價ナラザル器物トヲ示シ、試ミニ亞佛利加ノ野蠻人ヲシテ其好ニ從テ之ヲ撰バシメンニ、或ハ寧ロ硝子器ヲ取リテ却テ伊萬利燒ヲ顧ミザル等ノ事ナキニシモアラザルベシ。夫レ然リ、凡ソ文明ノ製造品ハ一旦其製造法ヲ知リタル以上ハ、誠ニ容易ク之ヲ製造シ得ルニモ拘ハラズ、或ハ其法ヲ知ラザルノ人ニ於テハ蓋シ極メテ珍シク思ハル所ノモノアルナリ。是故ニ國既ニ文明事業ノ隆盛ヲ致セル以上ハ、或ハ奇ヲ好ミ珍ヲ愛スルノ情、人民ヲ

シテ妄リニ無益ナル文明ノ玩弄物ヲ購入セシムル等ノ弊ナキニ至ルナルベシト雖モ、而カモ若シ夫レ國未ダ全ク文明富國タルノ地位ニ達セザルノ間ハ、苟クモ保護稅ヲ以テ外品ノ濫入ヲ防止セザルトキハ則チ或ハ珍品奇物ヲ購入スルニ頻繁ナル、往々多クノ贅品贅物ヲ購入スル等ノ患アルヲ免レザルナリ。

以上論ズル所ノ如ク、凡ソ國自由貿易國タルニ適當スルモノハ、必ズ第一、貿易上能動ノ國タラザルベカラズ。第二、文明ノ舊國タラザルベカラズ。第三、文明ノ富國タラザルベカラザルナリ。然リ而シテ今ヤ我日本帝國ノ如キ、此三點ニ關シテハ、師意殘念ナガラ其ノ自由貿易國タルニ適當スル一個ノ要件ヲモ具備セザルモノタルヲ信ズルナリ。是故ニ師意茲ニ日本將來ノ爲メニ計ルニ、貿易ハ素ヨリ宜シク保護貿易ナラザルベカラズ。彼ノ自由貿易ノ如キハ日本今日ノ未ダ能ク實行シ得ベキ所ニアラザルナリ。

然ラバ則チ今ヤ日本ヲシテ假リニ自由貿易ヲ實行セシムレバ、其結果ハ果シテ如以ナルベキゾ。曰ク日本若シ今自由貿易ヲ行フアラバ、則チ凡ソ文明ノ事物ニ關シテハ人民常ニ唯外來品ノ華美ニシテ且ツ甚ダ廉價ナルニ依頼シテ、爲メニ文明ノ新事業ハ勿論、日本從來ノ舊事業スラ漸ク以テ衰頹スルニ至ラン。若シ又或ハ偶々器械ヲ外國ニ求メテ、以テ文明事業ヲ我國ニ試ミ、若クハ人ヲ外國ニ遣ハシテ以テ文明事業ノ傳習ヲ受ケシムル等ノ事アルモ、或ハ國土人情

ノ猶未ダ文明ノ新事業ト相適應セザルガ爲メ、往々徒ラニ多額ノ費用ヲ空費シテ以テ唯少シク文明ノ模倣法ヲ了知スルヲ得ルノミト云フガ如キノ事情ヲ免レザルベク、而ルニ傍ラヨリ外來ノ物品ハ常ニ續々此國ニ輸入シ來テ、爲メニ大ニ内地ノ製造事業ヲ妨害シ、即チ外品濫入ノ爲メニ日本内地ノ事業ハ蓋シ舊トナク新トナク、總テ浮々然飄々然トシテ遂ニ其隆盛ヲ見ルノ時ナク、以テ到底國力ノ衰弱ヲ致スニ外ナラザルベキナリ（茲ニ謂フ所ノ外品濫入トハ特ニ輸入品物ノ多キニ過グルヲ言フニハアラズシテ寧ロ不用ナル品、無益ナル物ノ妄リニ此國へ流入スルヲ言フナリ）師意故ニ曰ク、日本ニ於テ自由貿易ヲ實行スルハ蓋シ策ノ宜シキヲ得タルモノニハアラザルナリト。

約言

之ヲ要スルニ世ニ自由貿易ヲ可トスルノ論アリ。其論誠ニ可ナリ。世ニ自由貿易ヲ不可トシテ、而シテ保護稅ヲ可トスルノ說アリ。其說亦誠ニ可ナリ。即チ唯特ニ之ヲ可トスルモ、之ヲ不可トスルモ、各々其時ト其場合トアルコトヲ悟ラザルベカラザルナリ。日本今日ノ時、日本今日ノ場合ノ如キハ師意其ノ宜シク自由貿易ヲ不可トスベキノ時ニシテ、而シテ早ク保護稅權

ナルモノヲ彼ノ曾テ之ヲ奪ヒタルノ國々ヨリ我國へ回復スルコトヲ希望セザルベカラザルノ場合タルヲ確信セリ。世人ハ果シテ以テ如何トナス。

煙草專賣法施行ノ議

煙草稅法ヲ改正シテ煙草ノ製作發賣ヲ政府ノ專權ト爲ス議

按ズルニ歐洲各國近年競フテ兵備ヲ更張シ、從テ歲出巨額ニ上リ、他方租稅ヲ課徵シテ之ニ充ントス。余今伯林ニ遊ビ試ミニ諸書ニ就テ之ヲ考究スルニ、佛國ノ歲費ヲ最モ多シトス。其一千八百八十二年度ニ係ル常費ハ吾ガ五億七千〇八十四萬六千四百圓ナリ。而シテ之ヲ辨給スルノ稅目數十種有リ、其收額最モ多キモノハ皆間稅ニシテ、非常ノ高額ヲ納ムルモノハ僅カニ四目ニ過ギズ。曰ク登記稅、曰ク酒稅、曰ク煙草稅、曰ク印紙稅是ナリ。一千八百八十二年度ニ係ル登記稅收額ハ一億一千〇四十一萬九千二百圓、酒稅ハ七千八百七十五萬五千圓、煙草稅ハ六千八百六十五萬六千圓、印紙稅ハ二千九百萬二千八百圓、合計二億八千六百八十三萬三千圓ニシテ、歲出全額ノ過半ナリ。而シテ煙草稅ノ一目ヲ以テ其十分一以上ニ至ル。因テ知ル

佛國歲入中煙草稅ハ最重要ナル其一タルコトヲ。是レ余ガ煙草稅改正意見ノ由テ起ル所ナリ。

今ヤ我邦國庫充實セリト爲サズ、加之ナラズ歲出ヲ要スルコト年々ニ倍增ス。此時ニ當リ新稅ヲ起シ僅々ノ稅額ヲ課徵シ、徒ニ人民ノ苦情ヲ惹起センヨリ寧ロ簡易ノ方法ヲ設ケ巨萬ヲ納ルルニ如クハナカルベシ。以上記載セル稅目ニ就テ考フルニ、登記稅ハ佛國ニ於テ莫大ノ金額ヲ納ムルト雖ドモ、之ヲ賦課徵收スルノ手續方法非常ニ混雜繁多ナルノミナラズ、民間日常ノ賣買貸借授受等ニ大障礙ヲ爲シ、佛國ノ如キハ此稅法ヲ行フ百年以上ニ及ブモ、而モ人民殆ント其苛察ニ堪ヘザラントス。故ニ之ヲ其慣行ナキ我日本ニ施行スルコト固ヨリ一大難事タルベシ。煙草稅ノ如キ人民ノ營生ニ關係セザルヲ以テ、苦情ヲ鳴ラスノ辭柄無ク、且我邦既ニ之ヲ行フノ慣例有リ、但ダ未ダ良法ヲ得ズ、故ニ佛國ニハ之ヲ以テ六千八百萬圓餘ヲ得、伊太利ノ如キ大國ナラザルニ尙ホ之ヲ以テ一千六百萬圓餘ヲ得ルモ、日本ニ於テハ僅々三十四萬圓餘（明治十四年）ヲ得ルノミ。

今若シ吾ガ煙草稅法ヲ改正シ、佛法ニ倣ヒ煙草ノ耕種製造業ハ都テ政府ノ「モノポル」ト爲ストキハ、佛國ノ如キ巨大ノ金額ヲ得ザルモ純益一千七八百萬圓ヲ得ルコト必セリ。請フ之ヲ左ニ證セン。

下文第一表ヲ閱スルニ、佛國ハ第八等ニ居ル。其消費スル所ノ煙草ハ多量ト爲サズ、故ニ日本ニ於テ燒費スル煙草ノ數量ヲ測スルニ、佛國燒費高ニ據テ考案スルトキハ大ナル差謬ナキヲ知ル。

佛國ノ人口ハ大抵三千七百萬、日本ノ人口ハ大抵三千六百四十萬人ナリ。殆ント差ナシト言フモ可ナリ。又佛國ニ於テハ外國人ノ來往スル者多ク、因テ吸煙者多シト雖ドモ、日本ニ於テハ佛國ト異ニシテ吸煙スル者男女ノ別ナシ。是故ニ燒費者ノ數ニ就テハ却テ彼我ヨリ少ナカルベシ。又一人燒費スル所ノ量目ニ就テ考フルニ、彼我煙管大小同ジカラズ。且ツ彼ハ多ク葉卷紙卷等ヲ用ヒ、我ガ小煙管ヲ以テ吸煙スルニ比スレバ量目大差アルガ如シ。然ルニ佛國ニ於テハ吸煙ヲ禁ズルノ時會甚ダ多ク、且ツ吸煙者ト雖ドモ日本ノ如ク朝夕晝夜ヲ分タズ吸煙スルニ非ズ。而シテ上文言ヘル如ク日本ニ於テハ吸煙者ノ數佛國ヨリ多カルベク、因テ察スルニ日本ト年々燒耗ノ煙草量差ナシト斷定スルヲ得ベシ。假リニ差異アリトスルモ佛國ノ一人ニ付、吾ガ二斤八分ヲ燒吸スルニ比考スレバ、日本ニ於テハ一人ニ付キ二斤ニ下ル可カラズ。之ヲ日本人口三千六百五十萬人ニ乘ジ、七千三百萬斤ヲ得、現今日本煙草ノ市價平均大抵一人二十錢ナルベシ。其製作發賣ヲ政府ノ「モノポル」トスルトキハ一倍シテ四十錢ト爲スヲ得ベシ（日本煙草ノ價ヲ外國輸入品ノ價ニ比スルニ甚ダ廉ナリ、故ニ一倍シテ四十錢ト爲スモ輸入ヲ増ス

ノ虞懼ナシ)之ヲ七千三百萬斤ニ乗ジ、二千九百二十萬圓ヲ得、之ヲ發賣ノ惣價額トス。而シテ佛國ノ計算ニ據レバ發物賣價額五分ノ一ヲ製作等一切ノ入費トシ、其四分ヲ純益トス。然ルニ佛國ニ於テハ諸種ノ製作法ヲ用ヒ、爲メニ學術ヲ要シ又廣大ナル製作所アリ。日本ニ於テハ大抵草葉剉切スルニ止マルベシ。故ニ佛國製作費ト同様ノ割合ニ非ルベシ。假リニ佛國ヨリモ一層ノ入費ヲ要スト爲シ五分ノ二ヲ以テ之レニ充ツルモ純益千七百五十萬圓ヲ得ベシ。

佛國ニ於テハ煙草稅莫大ノ入額アルヨリ、近來「オーストリア」伊太利モ佛國ニ倣ヒ「モノボル」法ヲ施行セリ。獨逸ニ於テモ五六年以來「ビスマルク」氏此法ヲ施行セントシ、議案ヲ發スルコト既ニ五六回ニ及ブ。聞ク所ニ依レバ獨逸國ハ舊來煙草商多ク、殊ニ大製造所有リ。爲メニ與フベキ償金二億圓以上ノ概算ニシテ、議案否決ノ理由トナレリト。日本ニ於テハ煙草ノ大製作所有ルヲ聞カズ、只多少煙草商アリト雖ドモ、其過半ハ政府ノ問屋又ハ小賣商ト爲シ、其餘ノ者ニ對シテハ相應ノ償金ヲ付與スルモ一ケ年ノ利益ヲ以テ之ニ充ツルトキハ必ズ不足ナルベシ。

今國庫ニ一千七八百萬圓ノ入額ヲ得ルコト煙草「モノボル」ノ外ニ求ム可カラズ。此法ヲ施行セル後ハ他ノ人民苦情ノ辭柄トナルベキ租稅ヲ減額或ハ免除スルヲ得ベシ。又煙草ノ耕種政府ノ事業トナルトキハ「ハワナ」及ブ「マニラ」ノ煙草耕作人ヲ雇使シ、上好ノ品種ヲ日本ニ

移植培養シ將來大メニ輸出品ヲ增多スルノ一端ヲ開クベシ。

以上諸般ノ事由ニ就テ考フルニ、今日本ニ煙草「モノボル」法ヲ施行スルトキハ、政治會計ニツナガラ益アリ。此法ノ利便ナルコトニ付テハ佛國經濟學士ノ著書中ヨリ煙草稅論一篇ヲ抄譯シ、之ヲ末尾ニ附セリ。其論殊ニ明確ナリ。故ニ此稅法ノ利害得失ニ關シテハ之ヲ茲ニ喋々セズ。又佛國煙草報告書中ヨリ二三ノ表ヲ譯シ之ヲ下ニ掲グ、煙草燒吸ノ量其價格並ニ燒吸スル所ノ品位數量ノ比例等一見ニシテ瞭然タリ。

第一表

一ケ年中吸煙ノ高人口一人ニ付キ比例

米國	八百一匁
和蘭	七百四十匁
白耳義	六百六十匁
奧地利	五百七匁

煙草專賣法施行ノ議

獨逸	五百七匁
瑞典	三百二十匁
魯西亞	二百四十匁
佛國	二百二十七匁
伊太利	百八十七匁
西班牙	百六十一匁

第二表

一千八百七十七年佛國ニ於テ燒費セル煙草ノ量目其品位並ニ價格

三千二百萬「キロ」(一「キロ」ハ吾カ量目二百六十七匁ニ當ル)

燒費物高

(吾カ一億〇六百八十萬斤但シ八十匁ヲ以テ一斤トス) 右ノ内

一千三百萬「キロ」(四千三百三十八萬七千五百斤)

尋常品一「キロ」十一「フラン」半(二圓三十錢)吾一斤ニ付六十九錢(製作所ヨリ大

間屋へ卸賣ノ定價以下同シ)

七百萬「キロ」(二千三百三十六萬二千五百圓)

下等減價ノ品、此内三種アリ一「キロ」ニ付五十錢、八十錢、及一圓

七百萬「キロ」

粉末鼻ニ入ルル品

總計二千七百萬「キロ」(九千〇十一萬二千五百斤)

以上下品トス此價大抵二億五千萬「フラン」(五千萬圓)

六十萬「キロ」(三百萬〇〇二千五百斤)

紙卷、價數様アリ一「キロ」ニ付三圓五十錢ヨリ八圓八十錢ニ至ル。即チ百本ニ付三十

五錢ヨリ八十八錢ニ至ル(一「キロ」ヲ以テ常尋大サノ紙卷千本ヲ作ル)

四百四十萬「キロ」

上等葉卷、此内「ハワナ」産「エニラ」産佛國産ノ三種アリ「ハワナ」産ハ一本六錢ヨ

リ十二錢「マニラ」産ハ三錢ヨリ四錢佛産ハ一錢ヨリ七錢ニ至ル。

總計五百萬「キロ」(千八百六十八萬七千五百斤)

以上上等トス此價大抵八千萬「フラン」(千六百萬圓)

第三表

煙草稅額表

千八百七十六年度	獨逸(純益)	一七、八五二、〇〇〇「フラン」(三百五十七萬〇四百圓)
同 年 度	英國(同)	一九五、〇〇〇、〇〇〇「フラン」(三千九百萬圓)
同 年 度	伊太利(同)	八二、五〇〇、〇〇〇「フラン」(千六百五十萬圓)
千八百七十四年度	奧地利(同)	一二〇、〇〇〇、〇〇〇「フラン」(二千四百萬圓)
明治十四年度	日本(同)	三十四萬八千六百七十圓
千八百八十年度	佛 國	三四六、一三〇、〇〇〇「フラン」(六千九百廿二萬六千圓) 發賣物額
		二八四、一三〇、〇〇〇「フラン」(五千六百八十二萬六千圓) 純 益
		六二、〇〇〇、〇〇〇「フラン」(千二百四十萬圓) 製作諸入費

煙草稅論抄譯

佛國ノ煙草稅ハ課額甚ダ大ナリ。其納收ノ方法ハ「モノポル」法ヲ用ヒ、政府自ラ製作發賣スルノ特權ヲ有ス。此特權ニ關シテハ世上往々論者アリテ非議スト雖ドモ、煙草ノ一物ニ關シテハ余ハ斷然「モノポル」法ヲ行フヲ可ナリトス。何トナレバ煙草ノ課稅タル、爲メニ害ヲ受ルノ民ナク、其主旨ハ道義ニ背カズ、收入ハ殊ニ夥多ニシテ納收ノ方法ハ極メテ容易ナレバナリ。故ニ余ハ曰ク苟クモ國庫充滿セザルノ國ニシテ煙草ニ課稅セザルハ會計ノ方圖ヲ知ラザルモノナリト。今此課稅ノ無害タル理由一二ヲ言ハンニ、煙草ハ他ノ物品ト異ニシテ、他ノ人間有用ノ物品ヲ製作スルノ用ヲ爲サズ。故ニ之ニ課稅スルモ間接ニ他ノ物品ニ課稅スルノ弊ナシ例ヘバ「アルコール」砂糖ノ如キ、之ニ課稅スルトキハ爲メニ他ノ物品ニ關係ヲ及スコト少ナカラズ。煙草ハ人間生活上決シテ必用タラズ。且ツ健康上並ニ智識上有害物タリ。此等ノ事由ハ煙草稅ノ不正タラザルヲ證スルニ足ルベシ。其物品ガ健康上有害ナリト言フノ一事ノミヲ以テシテハ之レニ重稅ヲ課スルコトヲ可トスベカラズ。然レドモ今國債ハ年々ニ增多シ、陸海ノ兵備ハ一日モ忽ニス可カラズ。因テ百般ノ消耗物品ニ就キ徵稅セザルヲ得ザルノ時勢ニ至レリ而シテ煙草ノ如キ消耗物品中、健康上有害ニシテ且ツ之レニ重稅ヲ課スルノ便利アルトキハ宜

ク立法者ノ注意スベキ所ナリ。

佛國ニ於テ始メテ煙草ニ課税シタルハ一千六百二十一年ナリ。其課額ハ百斤ニ付四十錢ナリキ。爾後増加シテ百斤ニ付十「フラン」ニ至リタリ。一千六百七十四年政府ノ「モノボル」ノ制ヲ定メ、煙草ノ製作並ニ發賣ヲ政府ノ專權トセリ。一千七百八十一年佛國中煙草ノ耕作ヲ禁止シ、僅カニ二三縣ニ於テ其耕作ヲ特許シタリ。一千七百八十九年煙草税ノ純益高三十「ミリヨン」「リール」ニ至レリ。

一千七百九十一年自由論盛ニシテ、政府ノ「モノボル」ノ制度ヲ廢シ、煙草耕作ノ禁ヲ解キ唯輸入煙草ノミニ課税シタリ。(佛國大革命ノ際)然レドモ國庫ハ缺乏ヲ告ゲ、之ヲ補充スルノ策ニ苦ミ、數年ヲ出ズシテ其耕作並ニ賣買ニ課税シタリ。此法始メテ出ルヤ、直チニ詐僞百端之ヲ防止スルノ術ナク、一千八百十年ニ於テ更ニ「モノボル」法ヲ復施セリ。是ニ於テ世論囂々其不正弊害ヲ論議ス。此等ノ議論固ヨリ不當ナルニ非ズト雖ドモ、收税ノ爲メ人民ニ困難ヲ來タサズ、而シテ純益二百八十「ミリリヨン」「フラン」ノ多額ヲ得ルノ方策ハ他ニ求ム可カラズ。是レ此「モノボル」法ヲ復施セルノ理由ナリ。

一千八百三十五年煙草「モノボル」法ニ就キ審査ヲ爲シ、又數年ヲ限リ尙ホ之ヲ續行スベキコトヲ決定セリ。爾後解止ノ期來ルト雖ドモ延期シテ今日ニ及ベリ。

又煙草ハ其製作並ニ品位ニ就テ論ズルモ、却テ政府ノ「モノボル」法ヲ施行スルノ可ナルアリ。凡ソ物品ニ課スルノ税額甚ダ多キトキハ猾商必ズ其物品ヲ變造若クハ僞作シ、或ハ健康上大害ヲ來スノ弊アリ。此弊ヲ防止セント欲スルヤ、政府ノ「モノボル」法ヲ行フヲ第一策トス一千八百七十八年獨逸國會副議長「ストーヘン、ベルク」氏煙草税議案ニ對シ論ジテ曰ク「余等吹煙者タリト雖ドモ、實ハ何等ノ物品ニ就テ吹煙スルヤヲ知ラズ。近來煙草ニ代ヘ諸種ノ物品ヲ用フルコト甚ダ多シ。「シンガール」中大根葉、櫻樹葉等數種アリ。盡ク之ヲ知ラント欲セバ、更ニ一種ノ本草學科ヲ起スニ至ラン。若シ今其税ヲ増加シ、五十五「フラン」及ビ七十五「フラン」トスルトキハ何等ノ惡物ヲ調和スルヤ知ル可カラズ」ト。氏ノ此言タル詐僞ノ多キヲ證スルニ足ル。

佛國煙草ノ税額ハ此議員ノ言ヘルヨリ數等高額ナリト雖ドモ、煙草ハ純物ナリ、是レ政府「モノボル」法ノ然ラシムル所ニシテ此法ヲ可トスル理由ノ其一ナリ。

煙草ニ課税セル方法數様アリ。或ハ煙草ノ耕作ニ課ス。孝國之ヲ行ヒタリ。其方法ハ耕作地ノ面積ニ應ジテ賦課スルナリ。其收獲高ニ就テ課徵ス。此法ハ收納ノ税額甚ダ下低ナリ。獨逸全帝國ニ於テ一千八百七十六年度煙草税高純益僅カニ一七、八五二、〇〇〇「フラン」(三百五十七萬〇百圓)ニ及ベリ(煙草税ハ獨逸聯邦ノ會計ニ收入ス)但シ其中目國產煙草ニ就テ課徵

セシ税ハ僅カニ一、八四二、〇〇〇「フラン」(二十六萬八千四百圓)ナリ。故ニ此惣額ノ過半ハ外國煙草ニ課シタル輸入税ナリ。

「バーデン」國ニ於テハ曾テ耕作人ヨリ買取人ニ移ルトキニ當リ課税シタリ。又「ウエルタンベルグ」國ハ其ノ稅額ヲ定メ事業ノ大小ニ比例シ之ヲ耕作人ト商人トニ分課シタリ。然レドモ今日ハ孝國法ヲ以テ獨逸全國ニ施行シ以上二法ヲ廢止セリ。

魯國並ニ米國ハ耕作ノ自在ヲ許シ其製作並ニ賣買ニ課税ス。

以上諸方法アリト雖ドモ、國庫收入ノ點ヨリ論ジ來レバ皆惡法ト言ハザルヲ得ズ。何トナレバ手續法極メテ混雜ニシテ且ツ得ル所甚ダ僅少ナレバナリ。

今一大國アランニ煙草ニ課税シ、税金五千萬乃至六千萬圓ヲ納ムルコト極メテ容易ノ事ニ屬ス。之ヲ得ルノ良法二様アリ。其一ハ國內煙草ノ耕作ヲ嚴禁シ、最高ノ關稅ヲ輸入煙草ニ課ス。是レ英國ノ行フ所ナリ。其二ハ政府ノ「モノポル」法ヲ制定シ、佛國及ビ埃國ノ如ク政府自ラ製作發賣スルカ、又ハ伊國ノ如ク「モノポル」權ヲ賃貸シテ賃貸料ヲ納ルナリ。政府自ラ製作スルノ方法ハ煙草ノ品位ヲ存シ、消耗者ヲ利スルヲ以テ之ヲ可ナリトス。

佛國煙草稅收入ノ方法ハ政府自ラ製作發賣スルノ專權ヲ以テス。是故ニ政府製作ノ用ニ給スル煙草葉ノ外ハ却テ外國品ノ輸入ヲ禁ズ。但シ自用ニ供スル少量ハ例外ナリ。又內國ニ於テハ政府製作ノ用ニ給スルカ、或ハ政府ノ許可ヲ得テ輸出ノ爲メニスルニ非レバ、煙草ヲ耕作スルヲ得ズ。佛國ニハ煙草製作局アリ。煙草葉ハ自國產外國產共ニ此局ニ買入ル。一千八百十五年ノ法ニ據レバ、自國產ヲ用フルコト製作高六分ノ五タル可シト。一千八百三十五年ノ法ニ據レバ自國產ヲ用フルコト五分ノ四トス。蓋シ外國產ハ品位上好ニシテ消耗者ニ益アリ。故ニ此割合ヲ變ジタルナリ。

佛國中煙草製作所十六、問屋三百五十九、小賣店三萬三千有リ。小賣商問屋並ニ製作人ハ皆政府ヨリ任命ス。(下士官兵役滿期後小賣商トナルヲ得ルノ規則アリ。小賣商ノ利益ハ場所ニ從テ甚タ多シ。此株ヲ得ル者ハ之ヲ賃貸スルヲ常トス)

一千八百十六年ノ法ニ於テ「カンチーヌ」ト稱スル一種下等廉價ノ煙草ヲ製スルヲ許シタリ之ヲ以テ國境近傍ノ地方ニ發賣シ、外國品密賣買輸入ヲ防止スルノ策トス。其價一「キログラム」(二百六十匁餘)ニ付四「フラン」トス。一千八百三十四年最モ輸入ノ防ギ難キ地方ニ限リ此種煙草ノ價ヲ減ジ、大抵犯則賣買ノ煙草ト同一ノ價格ニ至ル。是レ所謂區域法ナリ。一國人民ニシテ高低異様ノ稅ヲ納メシムルノ弊アリ、東北諸縣ニ於テ一「キロ」ニ付二「フラン」半或ハ四「フラン」或ハ五「フラン」ノ品ハ内地ニ於テ十「フラン」ノ品ト甲乙アルコトナシ。曾テ此區域ノ數五アリタリ。一千八百七十年減ジテ三トス。又其價ノ差ヲ減シ却テ上好葉卷ノ

價ヲ増シタリ。

佛國ノ稅額ハ諸國中最高度ニ居ル。大抵煙草發賣ノ價ハ元價ノ五倍ナリ。煙草局發賣最高モ多キモノハ尋常品ニシテ其定價ニ増減アリ。即チ左ノ如シ。(定價ヲ増減スルニハ官達ヲ要ス)

千八百十一年	價	八「フラン」半
同 十二年	同	六「フラン」四十文
同 十六年	同	七「フラン」二十文
同 四十八年	同	七「フラン」二十五文
同 六十年	同	九「フラン」
同 七十二年	同	十一「フラン」半

佛國煙草稅ノ課額近年々ニ増多スト雖トモ、消耗ノ量ハ減却スルコトナク、税金ノ收額ハ大ヒニ増多ス。増多ノ割合一千八百六十一年ヨリ六十九年ニ至リ百ニ付二ト四分ノ一ナリ。一千八百七十三年ヨリ七十七年ニ至リ百ニ付二十ナリ。左ニ一表ヲ掲グ。

年	度	消耗高	價	國庫純益
---	---	-----	---	------

年	度	消耗高	價	國庫純益
千八百三十年		一一、一六九、五六〇	六七、一四九、六七三	四六、七八一、〇〇〇
千八百五十九年		二八、六〇二、〇〇〇	一七九、七四八、〇〇〇	一三九、六六〇、〇〇〇
同 六十九年		三三、五五四、〇〇〇	二五五、七〇七、〇〇〇	一九七、二一一、〇〇〇
同 七十二年		二七、〇〇〇、〇〇〇	二六九、四三六、〇〇〇	二八、七二〇、〇〇〇
同 七十五年		三〇、三七一、〇〇〇	三二二、四四〇、〇〇〇	二五五、〇九〇、〇〇〇
同 七十七年		三三、二一九、〇〇〇	三三九、四五〇、〇〇〇	二六八、六五三、〇〇〇
同 七十八年		三三、二四〇、〇〇〇	三三二、一七四、〇〇〇	二六二、六六一、〇〇〇
千八百八十年		三三、五三三、〇〇〇	三四六、二三〇、〇〇〇	二八四、二三〇、〇〇〇

一千八百三十年ヨリ一千八百六十九年ニ至リ、佛國煙草消耗ノ高殆ント三倍ニ上ル。而シテ其收稅高モ殆ント四倍ニ上レリ。普佛戰爭ノ後大ニ課額ヲ増シ爲メニ消耗ノ量減シタルガ如シ或ハ按スルニ紀則賣買ノ數ヲ増シタルナルベシ。

一千八百七十七年發賣物價額三百三十「ミリオン」(六千六百萬圓)ナリ。其内煙草葉買入代價並ニ製作諸費ハ六十乃至六十五「ミリオン」(千二百萬乃至千三百萬圓)ナルベシ。故ニ惣價額五分ノ四ヲ以テ純益トス。同年度發賣セル煙草ノ數量三十二「ミリオン」「キログラム」

(八百五十四萬四千貫目、之ヲ八十匁一斤トスレバ一億〇六百八十萬斤ナリ) 其別左ノ如シ。
千三百萬「キロ」(四千三百三十八萬七千五百斤)尋常品一「キロ」ニ付十一「フラン」半(吾
カ八十匁一斤ニ付六十九錢ニ當ル)

七百萬「キロ」(二千三百二十六萬二千五百斤)國境地方又ハ陸海軍或ハ郵救院等ニ於テ賣放
スル品特別減價ナリ。

七百萬「キロ」粉末煙草(鼻中ニ吸入スルモノ)六十萬「キロ」(二百萬〇〇二千五百斤)紙卷。四
百四十萬「キロ」(千四百六十八萬五千斤)上等煙草(葉卷)

英國ニ於テハ上文言ヘル如ク國內ニ於テ煙草葉ヲ耕作スルヲ嚴禁ス。故ニ英國ノ煙草稅ハ皆
關稅ヲ以テ收入スルナリ。一千八百七十六年度英國收入高一億九千五百萬「フラン」(三千九百
萬圓)ナリ。但シ之ヲ純益トス。一千八百六十四年度ノ收入高ハ一億五千萬「フラン」ナリ。

歐洲陸部ニ於テ煙草ノ「モノポル」法ヲ制定シタル諸國ハ皆巨大ノ稅額ヲ得ルヲ以テ、固ヨ
リ之ヲ廢スルヲ欲セズ。伊太利ハ「モノポル」權ヲ其會社ニ貸貸ス。會社ハ發賣高ニ比較シテ
賃借料ヲ政府ニ納ム。又外ニ其利益ノ若干分ヲ上納ス。千八百六十八年(伊太利初メテ「モノ
ポル」法ヲ施行セル年)會社ノ納額六千八百五十萬「フラン」(千三百七十萬圓)

此内

六千六百八十九萬四千「フラン」

特權賃借料

百六十五萬二千「フラン」

利益若干分

千八百七十六年ニ至リ左ノ稅額ヲ得タリ

特權賃借料

七千九百五十萬「フラン」

利益若干分

五百萬「フラン」

增稅

二百五十萬「フラン」

奧國ハ一千六百七十年以來煙草ノ「モノポル」法ヲ行フ。初メ伊國ノ如ク「モノポル」權ヲ
賃貸シタリ。現今ハ政府ノ製作法ヲ行フ。又千八百五十一年以來「ハンダグリー」國ニ於テ同法
ヲ施行ス。兩國合計煙草稅收入高一千八百七十四年度惣額二億一千五百萬「フラン」諸入費ヲ
除キ純益一億二千萬「フラン」ヲ得タリ。

煙草稅ノ國庫ニ益アルコト以上記述セルガ如シ。近日「ビスマルク」氏モ亦此「モノポル」
法ヲ獨逸帝國ニ施行セントシ、議案ヲ議院ニ下付スルコト數回ナレドモ未ダ行ハレズ。現今獨
逸煙草稅ノ收入高大抵千八百乃至二千萬「フラン」ヲ超ヘズ。今若シ「モノポル」法ヲ施行ス
ルトキハ概ネ現今收入高ノ七八倍若クハ十倍ヲ得ベシ。獨逸國ノ如キ歲出多額ヲ要スル大國ニ
シテ未ダ之ヲ行ハザルハ余ニ於テ甚ダ恠ム所ナリ。凡ソ未ダ煙草ノ「モノポル」法ヲ施行セザ

ルノ國ニ於テハ速カニ之ヲ制定セシト余ガ切ニ冀望スル所ナリ。而シテ佛國ノ如キ既ニ之ヲ行フノ國ニ於テハ或ハ之ヲ廢スルノ論者アリト雖ドモ、實ニ時宜ヲ知ラザルノ迂論者ト謂フ可シ。又煙草税ノ一事ニ關シテハ苟クモ其收入額ヲ減ゼザル以上ハ、課額愈々高クシテ制度愈々當ヲ得タリトス。吾ガ佛國ノ如キ斯ノ陸海軍ヲ養ヒ斯ノ負債ヲ擔フ。豈ニ煙草ノ「モノボル」ヲ廢ス可ケンヤ。

右明治十六年十月

於伯林府

今村和郎

國ノ境遇ト地租輕減

地租ノ輕減ハ第一期議會以來衆議院ノ多數ノ說タリ。強大ナル政黨ノ持論タリ。衆議院ガ國防及經濟ノ必要ナル費項ヲ削減廢除シテ顧慮スル所ナキハ、蓋シ其ノ唯一ノ目的タル地租輕減ヲ行ハント欲スルニ外ナラザルナリ。其說ヲ持スル者今年之ヲ論ジテ行ハレザレバ、明年之ヲ議シ、明年之ヲ議シテ行ハザレバ更ニ數年ヲ期シテ必之ヲ行ツテ而シテ後ニ止マントス。此ノ議一タビ出デテ豫算ノ成立ハ毎年其妨グル所トナラン。地租ノ輕減ハ其原因タリ。豫算ノ不成立ハ其結果タリ。此ノ争局ニシテ決セザル間ハ立憲ノ政遂ニ調熟ノ期ヲ望ムベカラズ。吾人反對說ヲ持スル者ハ今ニ及デ之ヲ痛論スルノ止ムベカラザルナリ。

地租ノ輕減ハ其ノ事極メテ美ナラザルニ非ラズ。但國家時宜ノ許ス所如何ト顧ミザルベカラズ。回顧スレバ我國海外ニ交通セシヨリ茲ニ三十餘年、而シテ維新以來封建制度ヲ改革シ、明治十二年ニ至リ内治稍々緒ニ就クヲ得タルモ、戰亂ノ餘ヲ承ケ、仍財政ノ困迫ト戰ハザルヲ得ズ。紙幣ノ流通過多ニシテ、商工其ノ弊ヲ蒙リ、輸出入ノ不平均ハ殆ント極ニ達シ、政府ハ銳

意財政ヲ整理シ、辛ウジテ紙幣ヲ銷却シ、稍々回復ニ就クヲ得タリ。此ノ百般草創纔ニ事緒ヲ收拾スルノ時ニ當リテ、國防及國家經濟ノ計畫僅ニ初歩ヲ爲シ、未ダ進張ヲ見ルニ至ラザルハ實ニ勢ノ己ムヲ得ザルナリ。幸ニ明治二十一年以後國庫ノ財政稍々餘裕アルヲ得、始メテ進爲ノ途ニ就クヲ許サントス。此レヲ今日ノ現況トス。

經費ノ總額ハ國運ノ進歩ト相隨伴スル者ナリ。各國ノ財政史ハ吾人ニ左ノ事實ヲ示シタリ。佛國ハ千七百八十九年ヨリ今日ニ至ルマデ百年間、實ニ六倍ノ經費ヲ増セリ（ボーリウ氏） 塊國ハ千八百四十九年ヨリ千八百八十三年ニ至ル三十四年間ニ於テ歲出八千五百五十五萬圓ヨリ増シテ二億四千五百九十五萬圓ニ至リ、露國ハ千八百五十九年ヨリ千八百八十五年ニ至ル三十六年間ニ於テ歲出一億九千五百十五萬圓ヨリ増シテ六億四千九百七十二萬五百圓ニ至ル。今最近ノ統計ニ據ルニ左ノ如シ。

千八百七十年ヨリ九十年ニ至ル二十一年間、各國歲出増加ノ割合。

佛國	千八百七十年ノ歲出 二、〇五四、五八八、四六九法 四九三、一〇一、二三三	千八百九十年ノ歲出 三、七六九、六四七、八〇三法 九〇四、七二五、四七三	増加ノ割合 八割三分四厘
----	--	--	-----------------

伊國	一、三二、六五七、六七五リール 二六九、一九七、八四二	一、八五七、九〇六、八五〇リール 四四五、八九七、六四四	六割五分七厘
白國	二六、九〇八、〇〇〇法 五二、〇五七、九二〇	三二、〇九二、四七九法 七七、〇六二、一九五	四割八分
瑞西國	三〇、九〇五、四九七法 七、四二七、三一九	八五、五八、三〇〇法 二〇、五九、一九二	十七割六分七厘
魯國	六九三、五四五、八三〇留 四二六、二七、四九八	八八七、四七七、二八三留 五三二、四七四、三六九	二割七分一厘

又英國及普國七十一年ヨリ九十年ニ至ル二十年間ノ増加左ノ如シ。

英國	六九、六九八、五九九磅 四九三、〇〇九、八四〇圓	八五、九六六、八七磅 五九、〇二二、〇〇五圓	二割三分三厘
普國	三八九、〇六七、五二五馬 二六、七二〇、二五八	一、五三三、八九四、八七九馬 四五四、一六八、四六四	二十八割八分五厘

塊國百八十七年ヨリ八十九年ニ至ル二十年間ノ増加左ノ如シ。

埃國	四四一、二七〇、二七六鎊 二〇、六三五、一三六	五四〇、〇四五、八八五鎊 二七〇、〇三三、九四三	二割二分二厘
----	----------------------------	-----------------------------	--------

米國千八百八十年ヨリ九十年ニ至ル十一年間ノ増加左ノ如シ。

米國	二六七、六四二、九五八弗 三四五、二五九、四一六	三四一、三二一、〇〇〇弗 四四〇、三〇四、〇九〇	二割七分五厘
----	-----------------------------	-----------------------------	--------

此レ皆國ノ進歩ニ隨伴セル自然ノ趨勢ニアラザルハナシ。我國明治八九年ニハ歲出總額六千萬圓ヲ超エザリシモ、明治二十三年ニ於テ八千萬圓ヲ超エ、實ニ二千萬圓ノ増加ヲ致シタリ。今將來ノ爲メニ設計ヲ建畫セバ、内ニシテハ鐵道ノ完成ハ三千五百萬圓ノ巨額ヲ要シ（私設鐵道ヲ買收セバ更ニ五千萬圓ヲ要ス）治水ノ事業ト國道ノ修築ハ各々毎年百萬圓ヲ要スベク、北海道ノ開拓移住ハ更ニ國庫ノ供給ニ依頼セザルベカラズ。外ニシテ海軍ヲ擴張シ、十二萬噸ノ艦隊ヲ編製スルニハ五千餘萬圓ヲ要スベク、海灣海峽砲臺建築ノ費又巨額ノ費ニ上ルベシ。而シテ是レ皆國家ノ獨立國民ノ共同生活ニ於ケル必須ノ需要ニシテ、苟クモ虛榮ヲ張リ國力ヲ疲ラスモノニアラズ。

凡後進ノ國ニシテ蹶起シテ富強ノ位置ヲ取ル者、總テ皆財政ノ困難ヲ經過セザルハナシ。暫

ク一例ヲ舉ゲンニ、彼ノ伊太利ノ如キ王國ノ統一以來千八百七十年ニ至ルマデノ間、逐年歲出ノ超過ヲ告ゲ、千八百六十二年ノ如キハ四億四千六百萬「フランク」ノ不足ヲ殘シ、其後租稅ノ前拂ヲ要求シ、強募公債ヲ命ジ、更ニ最後ノ犠牲ト稱スル磨機稅ヲ起スニ至レリ（後之ヲ廢ス）然ルモ猶千八百七十年以來益々陸海軍ヲ擴張シ（陸軍常備十二師團海軍二十八萬噸）以テ歐洲大國ノ列ニ加ハルヲ致シ、鐵道線路ハ千八百六十年ニ於テ一千三百五十七哩弱ナリシヲ、千八百八十九年ハ増シテ六千八百八十二哩強ニ至リ、國道縣道ハ千八百六十二年ニ於テ一萬三千六百三十五哩強ナリシヲ、千八百八十三年ハ増シテ二萬二千六百四十九哩強ニ至レリ。彼國ノ著述者ガ誇稱シテ國民愛國心ノ致ス所ト謂ヘルモ蓋シ過言ニ非ザルベシ。

國家ノ時宜ヲ論ゼントセバ先ヅ國ノ境遇如何ヲ視ル。國々一隅ニ隔外シ風馬牛モ相及バザルハ己ニ過去ノ歴史ニ屬ス。「ポルトガル」人ノ始メテ喜望峯ヲ超ヘ印度洋ニ達シ、及ビ閣龍比斯カ大西洋ヲ渡リ米洲ヲ發見セシハ是レヲ寰宇變遷史ノ第一期トス。英國ガ帝號ヲ印度ニ稱ヘタル、佛國ガ安南ニ占據シタル、及蘇士峽路ノ開鑿ハ海ノ東西ヲシテ比隣ノ接壤タラシメタリ。是ヲ寰宇變遷史ノ第二期トス。今ハ世人ノ知レル如ク西比利ノ鐵道歐亞ノ脊梁ヲ貫穿セントスルノ舉アリ。亞比利加ニ於テニカラガ運河ヲ開鑿シ、東西洋ヲ一貫スルノ企ハ又千八百八十九年十月ヲ以テ起工シタリ。是豈寰宇變遷史ノ第三期ヲ目睫ノ間ニ見ルニ非ズヤ。夫西洋各國競爭ノ

勢ハ我東洋ニ向テ注射シ、長江大河ノ滔々乎トシテ底止スル所ヲ知ラザルガ如ク、而シテ我國幼稚ノ國勢ヲ振作興張シテ以テ此ノ局面ニ當ルハ實ニ天ノ吾人ニ負擔セシムル逃ルベカラザルノ重任ナリ。此ノ時ニ當リテ施設ノ方針ハ之ヲ消極ニ取り、租稅ヲ輕減シテ以テ休養ノ美觀ヲ爲サン歟。又之ヲ積極ニ取り國防及國家經濟ノ須需ヲ供給シ以テ進張ノ途ニ就カン歟。二者得テ兼ヌベカラズ。擇テ其急ヲ取ラザルコトヲ得ズ。人或ハ民力ヲ量ラズシテ國力ヲ伸ベントスルノ非ヲ論ズル者アリ。今地租ノ沿革ニ就テ叙述センニ、維新以來歲入二千萬圓ヲ増加シタルニ拘ハラズ、地租改正ニ因テ得ル所ノ租額四千四百九十六萬圓ヲ以テ之ヲ改正ノ前ニ比スレバ實ニ二百九十萬餘圓ノ減差ヲ生ズ。而シテ十年ノ減租ニ依リ八百二十四萬圓ヲ減ジ（地租改正報告書）十三年特別地價修正ニ由リ四十二萬餘圓ヲ減ジ、二十二年特別地價修正ニ由リ又三百二十三萬圓ヲ減ジ、前後合計減額千四百七十九萬餘圓亦尠少ナリトセズ。而シテ今又更ニ巨額ノ稅ヲ減ゼントスルガ如キハ其ノ國運ノ進歩ニ伴フ所ノ國務ノ需要ヲ輕視スルニ過グルコトナキヤ。

且租稅ノ輕重ハ實ニ納稅力ノ厚薄ニ比較ス。故ニ農民ノ幸福ハ租稅ヲ減ズルヨリ寧ロ收穫ノ増加及米價ノ平準ニ在リト謂ハザルベカラズ。國家經濟ノ運用ハ人民ノ納稅力ヲ養生シテ漸次ニ高度ニ進マシムルヲ得ベシ。今其ノ一例ヲ舉ゲンニ、僻陬ノ地ハ運搬ノ不便ナルガ爲ニ米一

石ノ價四圓五十錢ナリシモ、新ニ鐵道ヲ敷設シタルガ爲ニ増シテ五圓ト爲ルコトヲ得ルハ事實ノ證スル所ナリ。明治二十一年ノ統計ニ依ルニ（二十二年ハ凶二十三年ハ豐ナルヲ以テ二十一年ノ平等收穫ニ依ル）全國米收穫三千八百六十四萬五千五百八十三石ナルヲ以テ、若シ米價一割ヲ増シ、地租改正ノ當時ニ於ケル平均米價一石四圓十八錢五厘ニ比シ四圓六十錢四厘トナルトキハ、全國收穫ノ價ハ一億七千七百九十二萬四千二百餘圓ニシテ、實ニ納稅ガ一千六百九十九萬二千五百圓ヲ増シ（地租改正ノ當時ニ於ケル平均米價ヲ明治二十一年ノ產額ニ乗ジタル價額一億六千七百二十一萬七千六百圓ニ比較シタル差）又二割ヲ増シテ五圓〇二錢二厘トナルトキハ全國收穫ノ價一億九千四百〇七萬八千八百圓ニシテ、實ニ納稅力三千二百三十四萬六千三百圓ヲ増スモノナリ。而シテ此ノ増加ハ既ニ全國農家ノ負擔タル田畑ノ地租金額ト殆ント相比等スルニ至ル（二十三年ノ田畑地租三千四百〇二萬六千五百圓ナリ）蓋地租五分ノ一ヲ減ズルニ比ベテ米價五分（百分ノ五）ヲ増ストキハ農民得ル所ノ實益ハ遙ニ其ノ上ニ出ベシ。（二十三年ノ統計ニ據ルニ田畑平均一段四十圓二十五錢四厘トアルヲ以テ、地租五分ノ一ヲ減ズルノ二十錢〇一厘二七トス。今一段一石五斗ノ收穫トシテ假定センニ、米價百分ノ五ヲ増ストキハ増差三十一錢四厘ヲ得即ヤ五分ノ一減租ニ比ベテ三分ノ一ヲ多クス）又況ンヤ現在米價ノ増加ハ既ニ一割又ハ二割三割ヲ増スニ止マラズ、今後貿易ノ運搬ノ塗轍ヲ誤ラザラシメバ、地租改正ノ時

ノ平均價格ニ比ベテ二割以上ノ平準ヲ保ツコトヲ得ベシ。此レニ反シ交通運搬其便ヲ失ヒ、貿易上ノ販路滯塞シ、若ハ其他ノ事狀ノ爲メニ米價其平準ヲ誤ラバ地租五厘又ハ一分ヲ減ズルモ農民ノ困難ハ決シテ蘇息スルコトヲ得ザルベシ。故ニ數理上ノ結論ニ依ルトキハ、農民ノ休養ハ地租減率ヨリモ寧ロ米價平準ニ在リト云フベシ。而シテ農民ニ慈惠ナル政事家ノ尤注意スベキハ地租輕減ノ美名美觀ニ非ズシテ、經濟上ノ激變米價ノ不平準ヲ防グニ在リ。彼ノ日本新聞記者ガ謂ヘル如ク、明治十一年ニ於ケル紙幣ノ増發ハ少シモ其負擔ヲ減ゼザルニ、一時非常ノ盛況ヲ呈セシメ、十七年以降ニ於ケル急劇ノ回收ハ些シモ其負擔ヲ增加セズシテ、斯民ヲ餓死ノ地ニ致シタリトハ欺カザルノ事實ナリ。記者ハ又一石ニ付相場ノ下落八錢餘ニ至レバ、忽チ五厘減ノ恩惠ヲ抹殺スルニ足ルトノ數例ヲ與ヘタリ。佳此レノミナラズ收獲ノ増差ハ明治二十一年ノ產額(明治二十一年ノ產額ハ尤モ平均ヲ得タルモノトス)三千八百六十四萬五千五百八十三石ヲ明治十二年ノ收獲三千二百四十一萬八千二百四十四石ニ比レバ、實ニ六百二十二萬七千六百五十九石ヲ得(米一石ヲ五ヶ年平均價格五圓五十七錢トスルトキハ全國田畑ノ地租額ニ過グ)又明治十九年ヨリ二十三年ニ至ル五ヶ年平均ノ產出額三千八百三十七萬六千六百六十二石ヲ以テ、明治十二年ニ比スレバ、増差五百九十五萬七千二百三十八石ヲ得(米一石ヲ五圓五十七錢トスルトキハ田畑ノ地租額ニ足ラザル僅ニ九萬四千餘圓ナリ。故ニ今日ノ急務ハ生産事業ノ

進歩ト、交通ノ發達トヲ勸導扶翼シテ以テ納稅力ヲ増進セシムルニ在ルハ何人モ疑フ存セザルベシ。上ニ述ル所ハ今ノ納稅力ト地租トヲ比較シテ已ニ輕率ヲ示スモノト謂フニハ非ズ。但シ今ヨリノ後益々國家經濟ノ供給ヲ惜マズシテ、内ハ交通ヲ便ニシ、生産ヲ進メ、外ニハ貿易ヲ盛ニシ、運輸ヲ廣ムルヲ得バ、未來ヲ以テ現在ニ比シテ一般ノ富力ヲ發達セシムルコト亦現在ノ過去ニ於ケルガ如クナルベク、而シテ稅率ヲ減ジテ零碎ノ減額ヲ各戸ニ惠與スルニ比ベテ右實際ノ民福ヲ増殖セシムルヲ得ベシト云フニ在ルナリ。

吾人ハ曾テ或ル外國人ガ不充分ナル統計ト調査トニ依リ、彼我ノ間ニ他ノ諸般ノ關係ノ異同アルコトヲ察知セズシテ、我國地租ノ普國ニ比シテ過重ナルコトヲ論ジ、地租ヲ減ジテ酒類官賣ヲ行ヒ、以テ其額ヲ補フノ說ヲ建テタルヲ見タリ。又曾テ他ノ一ノ外國人ガ最少ナル收獲高ト、最廉ナル米價トニ偏據シタル統計ニ依リ、利子計算法ニ從ヒ農業ノ損失アリテ利益ナキコトヲ論ジ、大農法ヲ以テ之ヲ救濟スルノ策ヲ建テタルヲ見タリ。又曾テ或ル政黨新聞ガ懸賞文ヲ募リ、其一等賞ヲ與ヘタル稅法改正論ニ、我國稅法ノ商工ニ輕クシテ地稅ニ偏重ナルヲ論ジ(之レ亦或ル外國人ガ我が國ノ地租ハ歲入百分ノ七十九ニ居ルコトヲ論ジテ、之ヲ印度ニ比ベタル說ニ原クモノノ如シ)家屋稅、營業稅ヲ興シテ農稅ヲ減ズルノ新案ヲ建テタルヲ見タリ。思ハザリキ此ノ如キ外國風ノ空漠ナル議論ニシテ遂ニ議會ノ議題トナルノ元素トナラントハ、

今此ノ空想ヲ破ル爲ニハ或ル農學士ガ實際ニ徵證シタル論說中ノ一節ヲ抄録スルヲ以テ満足スベシ。曰世ノ開明ニ伴ヒ商工業ノ發達ト共ニ新稅源ヲ得ルニ至ラバ、歲入ハ膨脹スルモ土地ヨリ徵收スル租稅ハ依然トシテ更ニ增進スルコトナキガ故ニ、其割合ハ低下スベキナリ。現ニ明治十二年ニ在リテ歲入百分中土地ヨリ徵收セシ者ハ六十七、七ナリシガ、二十年ニ至リテハ減ジテ四十七、七トナレリ此ノ比例ヲ以テ將來ヲ推ストキハ二十年ヲ出ズシテ地租ノ割合ハ歐洲諸國ノ歲入金額ニ對スル割合ニ迄減ズルニ至ルベシト。又曰地價ニ對スル稅率ノ歩合高キヲ以テ、土地ノ負擔重シトスルハ、券面地價ヲ以テ資本ト認ムルニ由來セル謬見ニシテ、券面地價ナル者ハ課稅ノ爲メニ算定セル一種ノ目安ナルコトヲ忘レタルナリ。券面地價ト券面地價ニ對スル地租率トハ常ニ不變ニシテ、實際ノ收入利益ヨリ生ズル賣買地價及賣買地價ニ對スル地租率ハ常ニ變易スル者ナリト。蓋シ世運ノ發達ニ伴ヒ生産物ノ收穫及賣價ノ増加スルニ從ヒ、并ニ商工諸業ノ進歩スルニ從ヒ農稅ヲ輕減スルヲ待タズシテ自然ニ農稅ノ比例著シク輕減スルヲ見ルベキナリ。之レニ由テ觀レバ今日輕減ノ必要ハ何ニ由リテ存スベキヤ。

此ノ點ニ依リ觀察スルモ、施政ノ方針ハ積極ノ方法ニ依リ、直接又ハ間接ニ納稅力ヲ增進セシムベキ乎、又ハ消極ノ方法ニ依リ實租ヲ輕減スベキ乎。

此ノ事ハ國家ノ隆運ト實ニ關係ヲ相爲スモノニシテ、後ノ今ニ代ハル者又ハ必ラズ今ニ嗣テ

繼續進行セザルコトヲ得ザルノ共同目的ニ屬スルモノナリ。此レ豈獨リ政府ノ責ナランヤ。今ノ時ニ當リ國民ノ輿論ハ國力ヲ增進シ國光ヲ宣揚スルニ在ラズシテ、唯一ノ目的ハ地租ヲ輕減スルニ在リト謂ハバ、百年ノ後吾人ノ子孫ハ吾人ニ對シ遺憾ヲ表スルコトナカランヤ。

夫一千萬圓（地價修正ト田畑地租輕減ノ額ヲ併算ス）又ハ七百餘萬圓ノ減稅ハ少額トセズ。

今假リニ將來十年間ニ於テ國務國防ノ爲ニ二億萬圓ノ需用ヲ要ストセバ、地租ヲ減ジタルガ爲メニ其ノ半ヲ失ハシ。減租ノ令一タビ發シテ復々回消スベカラズ。此ノ缺額ヲ補フ爲ニハ朝三暮四ノ計ノ能クスル所ニ非ズ。西人ノ說ニ曰「凡ソ稅法ノ改革ハ假令其新稅ハ完全ノモノニモセヨ、假令改革ノ爲全體ニ於テ別ニ租稅ノ負擔ヲ加重セザルニモセヨ、一時人民ノ產業ニ障礙ヲ與ヘ、社會ニ一ノ波瀾ヲ起スモノナリ。是レ稅法ノ改革ニ隨伴スル所ノ避クベカラザル結果タリ。古今ノ政治家稅法ノ改革ニ苦心スルハ實ニ此點ニアリト。又其ノ諺ニ曰ク「人民ノ慣習シタル舊稅ハ皆可ナリ學理ヨリ生シタル新稅ハ皆不可ナリ」ト此語固ヨリ槩論スベカラズト雖トモ、亦思フベキナリ。若夫平時租ヲ減ジ稅ヲ削リ、以テ美觀ヲ爲スモ、一朝轉ジテ積極ノ進歩ヲ爲スニ急ナルニ當リ、或ハ有事ノ必要アルニ當リテ俄ニ外債ヲ募リ外資ヲ集メ、以テ空缺ヲ塞クガ如キアラバ、或ハ都爾其埃及ノ覆轍ヲ踐ムコトナカランヤ。政黨ノ韜略機ニ應ジ勝ヲ制スルモ亦自其道アラン。何ゾ必シモ國ノ命運ヲ未來ニ束縛スルニ至ランヤ。國家ノ爲ニ贊

畫ノ責ニ當ル者庶幾クハ深ク思フテ審ニ之ヲ斷ジ、一時ノ韜略ノ爲メニ百年ノ長計ヲ誤ルコト勿レ。

輸出税免除ノ議

別紙輸出税免除ノ件ヲ案ズルニ、抑條約ニ依リテ海關稅ヲ新定改更スルハ、條約締結ニ關スル
ル 天皇大權ノ範圍内ナリヤ。又ハ法律案トシテ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要スベキモノナリヤ
ハ目下ノ一大問題ニシテ、甲論乙駁未ダ容易ニ歸スル所ヲ知ル能ハズ。故ニ若シ此際其撰ム
所ヲ失シ、輕忽ニ之ガ解釋ヲ示スガ如キコトアラバ、爲メニ他日ノ紛擾ヲ遺スノ虞ナシトセズ
然レドモ此問題ノ生ズルハ條約ヲ以テ海關稅ヲ新定改更スルノ場合ニ止リ、條約ニ依ラズ政府
隨意ニ之ヲ定ムルヲ得ルガ如キ場合ニ於テハ、無論此ノ如キノ問題ヲ生ズルコトナカルベシ。
今本件ノ如キハ即チ條約以外ニ於テ我國政府ノ隨意ニ之ヲ定ムルヲ得ベキ事例ノ一ニシテ、毫
モ目下ノ大問題ニ關聯スル所ナキヲ以テ、之ヲ何レニ決スルトモ敢テ該問題ニ關シテ政府ノ解
釋ヲ示シタルモノト看做サルノ恐ナキノミナラズ、タトヘ海關稅ノ新定改更ハ 天皇ノ條
約締結權ノ範圍内ナリトノ說ニ決定スルコトアリトモ、本件ノ性質上尙ホ決シテ之ニ從フベキ
モノニアラズ。現ニ昨明治二十三年九月十二日法律第八十二號ヲ以テ小包郵便物ノ輸出税ヲ免

除シタルノ先例モアレバ、今或論者ノ言ノ如ク勅令ヲ以テ之ヲ定ムベシトスルトキハ、何ガ故ニ同一種ノ事件ニシテ先ニ法律ヲ以テ定メタルモノヲ、今回ニ限り勅令ヲ以テ之ヲ定ムルヤ。其理由ヲ辯理スルノ辭ナキニ至ルベシ。

右ノ理由ニ依リ本件ハ無論憲法第六十二條ノ規定ニヨリ法律ヲ以テ之ヲ定メラルベキモノト認ム。

參 照

朕小包郵便ヲ以テ外國へ輸出スル物品關稅免除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム。

御 名 御 璽

明治二十三年九月十二日

內閣總理大臣
大藏大臣
遞信大臣

法律第八十二號

小包郵便ヲ以テ外國へ輸出スル物品ハ總テ關稅ヲ免除ス。

石油ノ包箱ニ課税ノ件

去ル明治廿二年五月以來横濱ニ於テ米國石油商某々等、輸入石油ノ包箱ニ課税スルハ不當ナリトノ異議ヲ主張スルモノアリ。税關ニ於テハ之ニ答フルニ石油ハ輸入税目第四種「元代ニ從ヒ五分ノ税ヲ收ムベキ品」トアル明文ニ據ルノモノニシテ、元代トハ物品ノ産出若クハ製造國ノ市場ニ於テ之ヲ船積スルトキ、本品ガ有スル所ノ價ヲ指シタルニ外ナラズ。殊ニ石油ノ如キハ外箱ノ價平均元價ノ四分半ニ當リ、又固ヨリ市場賣買ノ價值ニ含ムモノナレバ、之ヲ税價ニ入ルルハ至當ナリトノ意ヲ以テ其異議ヲ容レズ今日ニ及ビタリ。

然ルニ這般英商其ノ企圖セル露國産石油槽船輸入ノ新手段ヲ實行センニハ、包箱ヲ有スル米國ノ石油ハ自然不利ノ影響ヲ受ケ、到底失意ヲ免レザルベシ。左ナキダニ前陳ノ如ク已ニ異議者アリ、事爰ニ至ラバ更ニ商業上競争ノ意味ヲ加ヘ、彌々不服ヲ訴ヘテ止マザルベシ。

此時ニ方リ若シ情勢止ムコトヲ得ズ、其包箱費ニ係ル税金ヲ免除センカ、近ク三ヶ年ノ平均ニ依リテ觀レバ、米國産石油ニ係リ、將來一ヶ年凡八萬七千六百圓ノ税金ヲ減ズベシ。加之其例ハ特ニ石油ニ止ラズ、類似ノ諸物品ニ波及セザルヲ得ズ。查スルニ流動體ノ包裝及包裝費ニ對シ課税スルハ、一般各國關税法ノ認ムル所ニシテ、從來我國税ノ成規自ラ之ニ適合シタルモノナルニ、今之ヲ變更スルニ至ルハ頗ル退歩ノコトト言ハザルベカラズ。況ヤ液體ノ直接包裝ヲ省キテ直チニ船車等ニ容レアルモノニ對シテハ、包裝ヲ見込ミテ課税スルモ定量課ノ關税法ニハ既ニ認ムル所ナルニ於テオヤ。

去ル廿二年五月以來今日ニ至ル迄石油包箱ニ係ル税金不服ヲ以テ納メ置ク旨記載提出ノ書面五十八通、此金額ハ無論返還ヲ要請スベシ。其他輸入ノ當時異議ヲ訴ヘザリシモノモ、忽チ均霑ノ欲望ヲ起シ、一齊返税ヲ請求スルニ至ルベシ。此等亦權衡上聽クモノトセンカ、延ヒテ各關港輸入石油ノ總體ニ推及シ、其返税高目下既成ノ統計表ニ掲載スル分ノミニシテ已ニ三十四萬二百餘圓ノ巨額ニ登レリ。

又舊例ニ一ノ患フベキモノアリ、明治七年中輸入鐵板類ニ對シ從前徵課セシ從價税ヲ不當トセル外國商ノ異論ニ關シ、其筋ニ於テ外國公使ト協議ノ末、之ヲ定額税ニ引直シ、既納税金ノ差額ヲ既往ニ遡リテ返還セシコトアリ。若シ前陳石油ノ包箱ニ係ル税金ノ返付モ亦舊例ニ據リ既往ニ遡ルノ要請ヲ起サバ、其聽否果シテ如何ン。蓋シ杞憂ニ屬スルモ、彼相望蜀ノ勢ヒ其事ナキヲ保セズ、明治元年以來石油ノ包箱ニ係ル税金ヲ合計スレバ實ニ九十二萬九千五百餘圓ノ

巨額ニ達セリ。會計法第十八條ノ期備免除ト適用スルモノトスルモ其額四十一萬七千八百二十三圓餘ニ至ルベシ。

是ニ由テ觀レバ、若シ一朝免稅ノ端緒ヲ開カバ將來ニ尠ナカラザル收入ヲ減少スルノミナラズ、其例ハ延ヒテ幾多ノ要求ヲ生ズベキモノト推定セザルベカラズ。此場合ニ於テ情勢、權衡舊例等ニ依リ敢テ悉ク拒絶シ難キコトアリトセンカ、之ガ爲メ歲出豫算諸拂辰金ノ項ニ於テ其金額ヲ増サザルベカラズ。右ハ輸入石油外箱稅免否ノ問題ヲ決定スルニ方リ先ヅ計畫セザルベカラザル要點ナリ。

日本興業銀行設立ニ付スタイン博士 ノ書簡

謹啓陳ハ拙者ヲシテ閣下ト直接ニ往復スルノ榮ヲ賜ハル慶幸千萬ニ存候。曩ニ御送付相成候條例草案并ニ説明書ニ於テ聊カ卑見開陳致シ候ニ付御嘉納被下候ハ、幸甚ニ存候。

拙者會テ土地抵當銀行ニ關スル説明并ニ貴國ニ於テ該銀行設立ヲ要スルノ意見ヲ裁シテ伊藤伯閣下ニ送呈致シ候。該書類ハ閣下ニモ傳達相成候コトト存候。閣下御送付ノ書類ハ早速熟閱致候處、敢テ開陳致シ度キ義ハ只一事有之而已。其ハ他ナシ一個ノ會社ヲ設立スルコトヲ止メテ二個ノ會社ヲ設立シ、各自殊別ノ證券ヲ發行セシメ度トノ事ニ御座候。拙者ノ觀ル所ニ據レバ閣下ハ地方貸付ノ會社ヲ設立スルノ一新案ヲ發明セラレタルガ如シ。獨逸ニハ斯ノ如キ會社之レナク、佛國ニ於テハ之ヲ以テ純粹ノ土地抵當貸ト混淆致シ候。蓋シ佛國ノ制ニ據ルトキハ國債豫算ヲシテ非常ノ重擔ヲ負ハシメ、財政上毫モ利益スル所ナキノ恐有之候。尤府縣貸附ニ就テ本草案中説明セラルル所ハ固ヨリ事理ニ適切ナルノミナラズ、我歐洲ニ於テモ貴國ト同ジク必要ヲ感ズル所ニ有之、拙者ハ斯ノ如キ大考案ニ對シテ恭シク慶祝ヲ表スルノ外無之候。今

拙者が開陳スル所ノ主意ハ本草案及ビ説明書ノ考案ヨリ生ズルノ結果ニ過ギズト存候。閣下ニ於テ此主意ヲ御嘉納相成ルベキカハ知ラザレドモ、閣下明斷其宜キヲ制シ、幾分カ卑見ヲ採納實行セラルル所アラバ幸甚ニ存候。兎モ角拙者が常ニ民智ノ異常ナルヲ欣シ、且ツ將來ノ隆盛ヲ豫期スル所ノ貴國ノ爲メ、多少裨益ヲ謀ルノ證左ナリトシテ此ノ一篇ヲ御領承アランコトヲ期望ニ不堪候。

閣下若シ疑義ノ廉モ有之候ハ、更ニ御下問ヲ賜ハリ度、併セテ拙者ノ敬意ヲ御領承被下候ハ、幸甚ノ至リニ存候。頓首謹言

千八百八十六年一月十八日維也納(ウエイドリッガン)

ドクトール、ローラン、フォン、スタイン

大藏大臣 松方 伯閣下

スタイン博士日本興業銀行意見書

大藏大臣松方伯閣下

日本興業銀行條例、草案及ビ説明書ニ就イテ卑見ヲ開陳スルニ當リ、余ハ敢テ細目瑣節ニ論涉スルコトヲ爲サズ、只其大體ニ就テ聊カ意見ヲ開陳スルニ止メントス。蓋シ閣下ノ余ニ望ム所亦此ニ外ナラザルベシ。抑モ此法制タル日本政府ガ意ヲ公利公益ニ致スノ親切ナルト、土地抵當貸ノ制度ニ關シテ歐洲諸國ノ經驗ヲ利用スルニ聰明ナルトヲ益々世上ニ證明スルノミナラズ、猶「クレデービユブリック」(公共信約ノ義)ノ發達モ亦之ガ爲メ更ニ著大ナルヤ敢テ疑ハザル所ナリ。夫レ斯クノ如ク重要ノ法制ニシテ猶ホ一事ノ稍ヤ議論ヲ容ルベキモノアリ。是レ余ノ茲ニ提論セント欲スル所ナリ。

土地抵當會社ノ事ニ關シ、貴國大藏省ガ一ハ國家ノ鴻益ヲ謀リ、一ハ其機關ヲ組織セラレタルノ大主眼ニ於テハ敢テ容喙スベキ所ナシ。余ハ唯土地抵當會社ノ方法ハ進歩ノ迅速ヲ以テ夙ニ文明世界ノ注目ヲ惹キタル貴國政府ノ聰明ヲ以テ、既ニ之レガ端緒ヲ啓キタレバ、此上ハ其

英斷ヲ以テ速カニ之ヲ舉行セラレンコトヲ熟望スルノ外アラザルナリ。

故ニ日本興業銀行ノ方案ニ就キ余ガ論述セント欲スルハ唯タ一事アルノミ。勿論此一事ハ惟リ大體上ニ止マラズ、二三ノ細目ニ涉リテモ頗ル重大ナル結果ヲ來サザルニ非ラズ。然レドモ此一點ニ於テ余ノ所説或ハ原草案ト稍々見點ヲ異ニスル所アルモ、閣下ノ寛仁能ク之ヲ容恕セラレンコトヲ期望ス。

抑モ佛蘭西土地抵當銀行ト獨逸及奧國ニ於テ土地抵當貸ヲ業トスル諸會社（會社ノ名稱ハ各々異ナリト雖ドモ、其目的及ビ組織ハ皆同ジ）トハ大ニ其制ヲ異ニス。是ハ閣下ノ素ヨリ悉知セラルル所ナリト雖ドモ、今茲ニ其制ヲ異ニスルノ要點ヲ舉ゲテ聊カ論述スル所アラントス。何トナレバ余ガ切ニ閣下ノ注意ヲ惹カントスルハ正ニ此一點ニ存スレバナリ。獨逸國ニ於テ土地抵當貸ヲ業トスル諸會社ハ其數一ニシテ足ラズト雖ドモ、皆同一ノ主義ヲ以テ組織ス。所謂同一ノ主義トハ他ナシ。凡ソ土地抵當會社ノ貸付ハ必ラズ、不動産ヲ所有スル一個人ニ限ルベシ。故ニ地籍ニ明記アル不動産ノ書入抵當ヲ除クノ外、他ニ向テ貸付ヲ爲スコトヲ得ズ。苟クモ右ノ範圍内ニ在ラザルモノハ斷テ土地抵當貸ノ惠澤ニ浴スルヲ得可カラズ。勿論府縣郡區ト雖モ所有ノ不動産アラバ會社ハ之ヲ抵當トシテ貸付ヲ爲スコト一個人ニ對スルト敢テ異ナラザルベシト雖ドモ、其貸付ノ抵償タルヤ決シテ府縣郡區ノ歲入ヲ以テスルニ非ズ。又其地方稅ヲ

以テスルニアラズ。又附加稅ヲ以テスルニモ非ズ。全ク該府縣又ハ郡區所有ノ不動産ヲ以テ抵當ト爲スモノトス。然レバ其貸金ヤ即チ書入質ノ貸付ナルヲ以テ、該不動産ノ價格ニ據リテ標準ヲ定ムベク、復タ其地方歲計豫算ノ如何ヲ問フヲ要セザルナリ。

且夫レ府縣又ハ郡區ニ於テ臨時資金ノ必要アレバ豫メ政府ノ許可ヲ受ケ、其歲計豫算ノ許スベキ範圍内ニ於テ自カラ地方債ヲ起スコトヲ得ベシ。

斯ノ如ク土地抵當ノ貸付ト府縣郡區ノ貸付トヲ區別スル所以ノモノハ何ゾヤ、一個人ノ所有ニ係ル不動産ノ擔保ハ決シテ行政廳ノ擔保ト相繫累セシム可カラズ。蓋シ一個人ノ擔保ハ不動産抵當貸ノ組織ニ依テ固ヨリ完全ノ擔保ナリト雖モ、行政廳ノ擔保ハ之ニ反シテ種々ノ關係ニ由リ變更ヲ來シ易ヲ以テ不完全ノ擔保ナリト謂ハザル可カラズ。是レ其兩者ノ區別ヲ要スル所以ノ原旨ナリ。

佛國土地抵當銀行ノ原旨ハ此主點ニ於テ大ニ獨逸ト異ナリ、佛國ハ一個人ノ不動産抵當ノ貸付ト行政廳ノ貸付トヲ混淆シテ全ク同一物ト看做シ、府縣郡區ノ歲計豫算ヨリ生ズル擔保ヲ視ルコト恰モ一個人ノ不動産ヲ書入レタルノ擔保ト異ナルコトナシ。

兩國ノ制此ノ如ク相異ナルヲ以テ、獨逸國ノ土地抵當會社ハ悉トク私立無名會社（ソシエテ、アノニーム、ブリヴェー）ノ性格ヲ有シ、各々其資本、組織、營業及ビ歲計ヲ特有シ、政

府ハ（現今ニ在テハ）決シテ此等ノ會社ニ補助金ヲ與付スルコトナシ。蓋シ該會社トシテ經紀其宜シキヲ失ハザレバ決シテ補助金ノ必要ヲ見ルコト無カル可ケレバナリ。故ニ政府ガ該會社ノ事業ヲ監督スルヤ、他ノ無名會社ニテ銀行事業ヲ營ムモノニ於ケルト毫モ異同ナシトス。但シ該會社設立ノ許可ヲ與ヘ、其主旨及ビ組織ヲ明記セル定款ヲ認可シ、且ツ營業ノ實況ヲ時々公告セシムル等ハ固ヨリ政府ノ權内ニ在リト雖ドモ、其事業ノ經紀如何ニ至テハ全ク會社ノ自由ニ放任セリ。何トナレバ不動産抵當ノ貸付ト雖ドモ政府ハ之ヲ視ルコト猶ホ一〇個人ノ私業ト異ナラズ。敢テ之ニ干涉スベキニ非ザレバナリ。然レドモ此等ノ會社ニシテ府縣又ハ郡區ニ對シテ貸付ヲ爲ストキハ、其擔保ハ行政廳ニ從屬シ、行政廳ハ又必ズ政府ニ從屬セザルヲ得ズ。是ヲ以テ政府ハ該貸付ヲ許可スルト同時ニ又財政上ノ責任ヲ負擔セザルヲ得ズ。而シテ府縣郡區ニ於テ資金ヲ要スルハ素ト一般公共ノ需要ニ供スルガ爲メナレバ、勢ヒ竟ニ非常ノ巨額ニ登ラザルヲ得ズ。果シテ然レバ一方ニ於テハ政府ヨリ直接ニ補助金ヲ附與スルカ、又ハ間接ニ該貸付ヲ政府ニテ保證セザル可カラザルノ必要アルベシ。一方ニ於テハ該會社ガ一〇個人ノ書入抵當ニ對シテ貸付クベキ金額ハ府縣郡區ノ需要ニ比較シテ常ニ甚ダ寡少ナルニ至ルハ勢ノ然ラシムル所ナリ。是ヲ以テ凡ソ府縣郡區ノ歲計ニ對シテ貸付ヲ承諾スルノ會社ハ必ズ一〇個人ノ需要ニ應ズルノ餘資ナク、書入抵當ニ放子スベキ金額ハ盡ク公共ノ貸付ニ吸收セラレ、而シテ大藏

省ハ此公共貸付ニ對シテ元利辨償ヲ保證スルノ責任ヲ負ハザル可カラズ。夫レ此ノ如クナレバ該會社（又ハ銀行）ハ變ジテ恰モ大藏省ノ一部ト爲リ、長ク政府ノ煩累ヲ貽スニ至ランコト蓋シ遠キニ在ラザルベシ。之ヲ要スルニ農業振興ノ目的ハ府縣郡區ノ事業ニ壓倒セラレテ竟ニ土地抵當會社ノ本務ヲ全フスル能ハザルナリ。

夫レ一〇個人ニ對スル貸付ト公共ニ對スル貸付トハ其性質基礎及ビ取扱ノ點ニ於テ大ニ縣隔アルニ拘ハラズ、佛國ノ主義ハ之ヲ混淆シテ同一物ト看做スガ故ニ、竟ニ一〇個人ノ確實ナル書入抵當ヲシテ併セテ亦地方債ノ擔保タラシムルニ至レリ。意フニ佛郎西土地抵當銀行ガ各州邑ノ事業ヲ幫助スルノ功ハ洵ニ掩フ可カラズト雖ドモ、一〇個人ニ對スルノ貸付ニ於テ未ダ遺憾ナキ能ハザルモノハ職トシテ是ニ之レ由ル。是レ余ガ斷ジテ證明スル所ナリ。

今日本興業銀行條例ノ草案ヲ案ズルニ、一〇個人ノ貸付ト公共ノ貸付トハ幾分カ區畫ヲ立テタルモノ、如シ。即チ草案中主要ノ部分（第三十二條迄）ハ獨逸ノ主義ヲ採リタルヤ明カナリト雖ドモ、第三十四條ハ蓋シ佛國ノ主義ヲ採リタルモノノ如シ。而シテ此兩主義ヲ混用シタルガ爲メ、如何ナル結果ヲ生ゼシヤト問ヘバ、本草案ニ於テ佛國主義ヨリ生ズベキ大結果ヲ以テ其主要ノ部分即チ（獨逸主義ヲ採リシ部分）ニ移用セシコト是レナリ。何ヲカ佛國主義ヨリ生ズベキ大結果ト云フ。曰ク、第一、一〇個人及公共ノ貸付ニ應ズルニ足ルベキ巨額ノ資本金ヲ備フ

ルコト。第二、公共貸付ニ必要ナル補助金及ビ政府ノ監督ヲ以テ純然タル一個人ノ土地抵當貸付ニ施及スルコト。此兩者ハ皆佛國主義ヨリ生ズルノ大結果ナリ。然ルニ本草案中之ヲ以テ、主部分即チ獨逸主義ヲ採リシ部分ニ移用セシモノハ、蓋シ彼ノ兩主義ヲ混用セシニ原因スルナリ。

上來陳述スル所ニ據リ茲ニ卑見ヲ開陳セバ余ハ將サニ言ハントス。日本興業銀行設立ノ主旨ハ美且大ニシテ賛成ニ暇アラズト雖ドモ、能ク其目的ヲ達セント欲セバ一個人ノ會社(又ハ銀行)ヲ設立スルヲ止メテ二個人ノ會社(又ハ銀行)ヲ設立シ、一ハ全ク土地抵當ノ貸付ヲ業トシ、一ハ府縣郡區ノ貸付ヲ業トシ、一ハ一般ノ無名會社ト均シク營業ノ自由ヲ得セシメ、一ハ官立會社トシテ國債事務ノ一部ト爲シ、其創立スルヤ政府ノ許可ヲ要シ、其事業ハ政府之ヲ監督シ、且ツ其利益ヲ保證シ若クハ補助金ヲ付與スベシ。

今土地抵當ノ貸付ト府縣郡區ノ貸付ト相異ナル所以ノ原因ト結果トヲ左ニ略陳セントス。而シテ此相異ナルガ爲メニ本草案ニ變更ヲ來スコト甚ダ鮮ナシ。唯之ヲ分ツテ兩部ト爲シ、以テ其區劃ヲ判然タラシムルニ在ルノミ。

第一 資本金

凡ソ一會社ノ資本ハ限アルヲ以テ、一個人ノ土地抵當貸スラ猶ホ且悉ク之ガ需用ニ供スル能ハズ。況ンヤ府縣郡區ノ需用ニ至テハ決シテ十分之二應ズルノ資本アラザルヤ明カナリ。

故ニ一個人ノ需用ト府縣郡區ノ需用トヲ問ハズ、一定ノ資本金ヲ以テ悉ク之ガ貸付ニ供スルハ天下決シテ有ル可カラザルノ理ナレバ、必ズ廣ク全般ノ資本家ニ就キ之ヲ募集スルノ途ナカレ可カラズ。今兩會社(土地抵當貸ヲ業トスル會社及ビ府縣郡區ノ貸付ヲ業トスル會社)ヲ云フノ若キモ單ニ固有資本ノミヲ以テセバ決シテ其目的ヲ達スル能ハザルベキヲ以テ、其組織タルヤ必ズ資本家ト需要者トノ間ニ介シテ彼此資金ヲ融通スルノ具タラザル可カラズ。

夫レ然リ是ヲ以テ該會社一タビ廣ク資本家ニ就テ之ヲ募集セントスレバ、資本家ハ必ズ其會社ガ擔保ノ實力如何ヲ審査シテ其最モ安全確實ナリト思考スル者ニ向ツテ、資本ヲ注下セントスルハ勢然ラザルヲ得ズ。而シテ獨逸主義ニ據ルト佛國主義ニ據ルトハ其懸隔此ニ至リテ霄壤霄ナラザルモノアリ、請フ之ヲ左ニ辯明セン。

獨逸ノ主義ニ據レバ凡ソ土地抵當會社ノ貸付ハ決シテ現金ヲ以テセズ、乃チ證券ヲ交付スレバ借主自カラ之ヲ他人ニ賣却シテ其代金ヲ得ルノ法トス。故ニ證券ノ賣却ヲシテ容易ナラシメント欲セバ必ズ其買主ニ與フルニ完全ノ擔保ヲ以テシテ證券元利ノ辨償ヲ保スルニ非ザレバ能ハザルナリ。然ルニ自己固有ノ資本ノミヲ以テ廣ク需要者ニ供給スルニ足ル程ノ大資本ハ世界

決シテ之レ有ルノ理ナシ。此資本ハ既ニ以テ全國不動産所有者ノ需要ニ悉ク供給スルニ足ラズトスレバ、全國借主ニ貸與スベキ資本金ノ擔保ト爲スニモ亦不十分ナリト認定セザル可カラズ。土地抵當會社ノ資本ト雖トモ亦然リ。已ニ此資本ノミヲ以テ借主ノ需要ニ應ズルニ足ラズトスレバ、該會社ノ性質ハ必ズ佛國ノ主義ヲ採用スルヲ得ザルベシ。資本家ノ望ム所ハ貸出金元利ノ安全ニアリ。而シテ借主ハ不動産ノ書入ヲ以テ其安全ヲ保スベシ。故ニ獨逸ノ土地抵當會社ナル者ハ自ラ資金ヲ貸與スルモノニ非ズ、只安全ナル不動産書入ヲ索求シテ之ヲ資本家ニ提供シ、資本家ヲシテ之ニ投資セシムルノ機關タリ。之ヲ要スルニ書入ト現金トノ媒介者タルニ過ギザルナリ。然レドモ該會社ガ他ノ不動産抵當貸ヲ營業スル私立會社ト大ニ相異ナル所ハ、即チ此點ニ在リ。而シテ土地抵當會社ノ法律ニ於テハ此要點ヲ解釋明示スルコト最モ緊要ナルヲ以テ左ニ之ヲ略示セントス。

凡ソ土地抵當會社ノ制ハ不動産ノ書入ヲ以テ資金ヲ借用セント欲スル者アルトキハ、先ヅ會社名義ヲ以テ之ガ書入ヲ爲サシム。乃チ其金額ニ對シテ書入質ノ權ヲ有スルモノハ會社ナリ。然レドモ借主ニハ現金ヲ貸與セズシテ書入金額ニ應ズル證券(券面ニテ)ヲ附與シ、之ヲ他ニ賣却セシムルガ故ニ、其買主ハ雷ニ該證券ヲ發行セシ會社ニ對シテ債主ト爲ルノミナラズ、之ト同時ニ會社名義ヲ以テ登記セル書入質ニ對シテ眞成ノ所有主ト爲ルナリ。此ノ如クナレバ借

主ヨリ會社ニ拂込ム所ノ利子ハ無論證券所有者ニ屬スルヲ以テ、會社ハ利札支拂ノ手續ヲ以テ之ヲ所有者ニ拂渡サザル可カラズ。蓋シ會社ハ初メ現金ヲ貸與セズシテ單ニ證券ヲ附與シ、借主自カラ之ヲ賣却セシモノナレバ、右借主ヨリ借入金ニ對シ拂込ム所ノ利子ヲ會社ニ收得スルノ權利ナシ。何トナレバ該會社ハ恰モ證券所有者ノ代理人トシテ利子ヲ徵收スルモノナレバ、證券利子ノ拂渡ノ如キハ單ニ眞成ノ貸主(證券所有者)ニ對シテ其義務ヲ盡スト云フニ外ナラザレバナリ。斯ク論ジ來レバ各個ノ證券ニ對シテ各個ノ不動産ヲ書入スルガ如クナレドモ、決シテ然ラズ、凡ソ會社ニ受取リタル書入不動産ハ各證券ノ所有主ニ對シ總テ之ヲ同一體ト看做スガ故ニ、書入質ノ權ハ法律上會社ニ屬スルコト無論ナリト雖トモ、之ト同時ニ又其全體ヲ舉ゲテ各個證券ニ對スル元利辨償ノ擔保ナリト知ルベシ。故ニ該會社ノ性格ハ法律上ノ式文ニ由テ立言スレバ乃チ左ノ如シ。

凡ソ一個人ノ貸借ニ於テハ債主負擔者各々一名アルヲ通常トス。土地抵當會社ハ之ニ異ナリ一ノ貸借ニ於テ債主負擔者各々二名アリ、不動産ヲ書入シテ資金ヲ借用スルモノ是レ第一ノ負債者ナリ。而シテ會社ハ自己ノ名義ヲ以テ書入質ヲ所有スルヲ以テ是レ第一ノ債主トス。然レドモ會社ハ更ニ證券ヲ發行スルヲ以テ再ビ第二ノ負債者ト爲リ、而シテ其證券ヲ所有スル者ハ會社ニ對シテハ直接ノ債主ト爲リ、土地抵當ノ借主ニ對シテハ間接ノ債主ト爲ル。乃チ是レヲ第二

ノ債主ナリトス。斯ノ如ク論述スレバ頗ル法理ニ偏スルガ如クナレドモ、獨逸國ニ於テ土地抵當會社ノ依テ以テ基礎トスル所ハ正ニ此主義ニ在リ。故ニ會社若シ證券元利ノ支拂ヲ爲ス能ハズ、若クハ破産ノ不幸ニ遭遇スルコトアルモ、證券所有者ハ之ガ爲メニ會社名義ニ登記セル書入質ノ權ヲ失フコトナク、直チニ其代權人トシテ該會社ノ相續ヲ受クルモノトス。獨逸法術ノ斷例ハ未ダ嘗テ此法旨ニ違反セシコトアラザルナリ。假令該會社ニシテ支拂ヲ停止シ、又ハ破産ニ遭遇スルコトアルモ、證券所有者ハ決シテ其元利金ヲ損失スルコトナシ。蓋シ會社ハ元ト代理人タルニ過ギザレバ一タビ破産ニ陥キルトキハ其委任者タル證券所有者相會シテ破産處分會議キユトラールンラブリガシオン（獨逸語ニテ證券營財人ト云フ）ヲ聞キ、以テ會社定款ノ規約ニ據リ、負債者ヲシテ元利金ノ辨償ヲ了セシメ、且ツ法術ノ監督ヲ受ケテ證券償還及利子支拂ノ事務ヲ繼續スルヲ得ルナリ。夫レ此ノ如クナレバ該會社ガ證券所有者ノ安全ヲ保護スルヤ實ニ至リ且ツ盡セリト謂フベシ。今茲ニ之ヲ約言スレバ第一會社固有ノ資本金アリ、以テ負債ノ保證ニ充ツベシ。第二負債者ヨリ會社ニ對スル書入抵當アリ、會社若シ支拂ヲ停止スルトキハ證券所有者ノ全體ハ直チニ此抵當ヲ相續スルヲ得ベシ。加之會社ニ收受シタル書入抵當ハ、證券ト各個相對シテ義務ヲ負フニ非ズ。其全體ヲ以テ連帶ノ義務ヲ盡スモノナリ。故ニ或ル書入抵當ニ於テ償還ノ滯滯ヲ來スコトアルモ、固ヨリ特ニ相對スル證券ナキヲ以テ、此ヲ辨償シテ彼ヲ拒却スルカ如キコト

ナシ。而シテ證券所有者ニ在テハ其償還及ビ利拂ノ困難ニ就テ毫モ關心ヲ要セザルナリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ、證券所有者ノ保證ハ乃チ二個アリ、第一直接義務者タル會社ノ資本金、第二間接義務者タル借主ノ書入不動産是レナリ。之ヲ一個人ノ貸借ニ於テ其保證ノ惟リ書入抵當ノミニ存スルモノニ比スレバ其確實ナル更ニ萬々ナルヲ見ルベシ。

上文論述スル如ク該會社ノ資本金ハ直チニ貸付ニ使用スルモノニ非ズ。唯營業ノ正確ヲ保證スルノ具ニ過ギザルヲ以テ、必ズシモ巨萬ノ資本金ヲ置クヲ要セザルベシ。今土地抵當會社資本ノ組織及ビ機關ノ運用ヲ約言スレバ則チ左ノ如シ。

資本金
第一 今茲ニ一會社ヲ創設セバ少額ノ資本金ヲ置キ、例ヘバ百萬圓ト定メテ之ヲ國庫ニ拂込ムベシ。此ノ資本金ニハ勿論相當ノ利子ヲ附セザルベカラズト雖ドモ、固ヨリ以テ運轉ノ用ニ供スベキモノニ非ザルガ故ニ、之ヲ以テ公債證書ヲ購求スレバ株主ハ則チ其利子ヲ收得スベキナリ。

資本金ノ作用
第二 資本金ハ決シテ運轉ノ用ニ供セズ、常ニ之ヲ國庫ニ預托スベシ。何トナレバ資本金ハ貸付ニ使用スベキモノニ非ズ。乃チ營業ノ正確ヲ保證スルノ具タレバナリ。故ニ苟モ會社ノ過失ニ依リテ證券所有者ニ損失ヲ來スノ危険アルトキハ、該所有者ハ右資本金ニ對シ干涉ノ權利ヲ有スベシ。

第三 不動産所有者若シ會社ニ就キ借入金ヲ望ムトキハ、會社ニ於テハ其不動産ノ價格ヲ定メ若シ舊負債アレバ之ガ解除手續キテ履行シタル上、其價格ニ應ジ會社名義ヲ以テ書入ノ手續キヲナサシム。但其貸付ニハ通貨若クハ株券ヲ以テスルニ非ズ。其書入金額ニ應ジテ書入證券ヲ付與スベシ。而シテ書入主即チ借主ハ其證券ヲ賣却シテ要用ノ金額ヲ得ルニアリ。

第四 該證券ノ賣買ヲ容易ナラシムルニハ左ノ三件ヲ要ス。

甲 券面金額ノ安全ナル事此ノ安全ヲ保證スルモノハ第一書入質ノ權第二會社ノ資本金ニ在リトス。

乙 利子ヲ拂渡ス事、但シ利子拂渡ノ方法ハ左ノ如シ。

一、書入主ヨリ利子ヲ徵收スルコトハ會社自ラ之ヲ負擔シ證券所有者ハ敢テ之ニ關涉セザルモノトス。

二、各證券ニハ利札ヲ附スルヲ以テ、證券所有者ハ利子拂渡期限ニ至リ之ヲ會社ニ持參スベシ。會社ハ豫メ書入主ヨリ利子ヲ徵收スルガ故ニ、其利札ノ支拂ニ必要ナル金額ハ必ス會社ニ所有スルモノトス。

丙 證券元金ヲ償還スル事、此元金ハ證券所有者ガ會社ノ書入質ニ對シテ間接ニ貸與シタル

モノナリ。會社ニテ之ヲ償還スルニハ書入主ヨリ徵收スル利子金中ノ一部ヲ以テ之ニ充ツベシ。此方法ハ説明書中十分ニ闡明セシヲ以テ、復余輩ノ贅辯ヲ要セズ。又條例草案ニ於テ抽籤惠與金ノ方法ヲ定メラレシハ最モ賛成ヲ表セザルヲ得ズ。余ハ之ヲ捨テ他ニ良法アルヲ見ザルナリ。故ニ證券償還ニ充ツベキ金額ハ必ズ利子ノ割合ト常ニ權衡ヲ持セシムルヲ要ス。

余ハ茲ニ償還方法ニ就キテ聊カ一言セントス。不動産所有者即チ借主ヨリ約定期限前ニ於テ一時返金ヲ爲サント欲スルトキハ、必ズ證券ヲ以テ返入セシメ、決シテ通貨ヲ以テスルヲ許サザルコトト定ムベシ。此ノ如クナレバ證券ノ相場ニ幾分ノ景氣ヲ與フルノ益アリトス。然レドモハ頗ル瑣屑ニ涉リ敢テ緊要ノ問題ニハアラザルナリ。

借テ會社營業ノ實際ニ就テ考案ヲ下サント欲スレバ、先ヅ計算部ニ於テ左ノ帳簿ヲ設クルヲ要ス。

一、書入質記入帳 此記入帳ニハ各不動産ニ就テ價格書入金額、價格評定ノ日附及利子拂込ミノ期限ヲ記入スベシ。

一、證券記入帳 此帳簿ニハ發行證券ノ番號及ビ發行月日ヲ記入シ、證券發行高ノ總額ト書入

質ノ總額トヲ對照シテ資産負債ノ權衡ヲ示スベシ。

一、利子計算帳 此帳簿ニハ借主ヨリ徵收スベキ利子ト證券所有者ニ支拂フベキ利子トヲ精算記入スベシ。

一、元金計算帳 此帳簿ニハ借主ヨリ徵收セシ利子金中元金ノ償還ニ充ツベキ金額及ビ償還期限ニ至リタル證券ニ對シ現ニ支拂ヒタル金額ヲ記入スベシ。

以上歷陳スル所ニ由テ之ヲ觀レバ左ノ如キ結果ヲ生ズベシ。

一、土地抵當會社ハ書入主即チ借主ヨリ時々入金ノ滯滞ナキヲ要スルノミ、決シテ他ニ資金ヲ要スルモノニ非ズ。

二、右ノ如キ會社ハ不動産所有主ニ對シテ無限ノ金額ヲ貸付クルコトヲ得ベシ。何ントナレバ書入質ノ性質ヨリシテ各證券ニハ先取特權ノ安全ト會社資本ノ保證トヲ帶フルガ故ニ、世人ハ爭テ之ニ放資センコトヲ望ムベケレバナリ。

三、前二項ニ論定スルノ理由ナルヲ以テ、土地抵當會社ハ僅々二三百萬圓ノ小資本ヲ以テ敢テ之ヲ使用セザルモ、能ク一億萬圓以上ノ資金ヲ運轉スルコトヲ得ベシ。

凡ソ前文ニ叙述セルガ如キ主義ハ株式ト證券ト全ク其性質効用ヲ異ニスルニ原由ス。

夫レ株式ナル者ハ會社資本金ノ一部ニ對スル各社員（即チ株主）ノ權利ヲ表スルニ過ギズ。

之ヲ約言スレバ各社員ノ所有權タルヲ以テ、不動産抵當ノ貸付トハ略々交渉ナキモノナリ。唯會社營業ノ正確ヲ保證スルノミ。而テ該會社ノ社長ハ政府ヨリ命ズルモ敢テ不可ナケレドモ、寧ロ政府ハ之ヲ認可スルニ止マルヲ善トス。何トナレバ土地抵當會社ナルモノハ本來獨立シテ種々干渉ヲ受ク可カラズ。抑モ該會社ノ事務ハ平常ニ一私人トノ取引ニ止マルノミナラズ、政府若シ其事業ニ干渉スルトキハ隨テ益々重大ナル責任ヲ負擔スル結果ヲ生ズルヤ必然ナリ。而シテ之ガ爲メ毫モ政府ニ利益スル所ナカルベシ。是レ最モ政府ガ該會社ニ干渉スルノ不可ナル所以ナリ。

政府ガ該會社ニ干渉スルノ不可ナルハ乃チ此ノ如シト雖モ、社運ノ進歩ヲ幫ケ事業ノ擴張ヲ圖ルガ爲メニ必ズ之レヲ扶持助成スルアラント欲セバ、亦自カラ其方法アリ。蓋シ其方法タルヤ最モ確實ニシテ、政府ハ毫モ責任ヲ負擔スルヲ要セズ。而シテ其効澤ノ及ブ所ハ却テ顯明普博ニシテ世人ヲ舉ツテ感謝ニ堪ヘザラントス。然ラバ則チ其方法如何、曰ク是レ利益金ノ保證ヲ謂フニ非ズ、抑モ株金ナル者ハ素ヨリ運轉ニ供スベキ性質ニ非ズ。唯公債證書ニ變換シテ政府ニ寄托スルニ過ギザレバ、利殖ノ途最モ顯然タルモノニシテ、復タ政府ノ保證ヲ要セザルベシ。且ツ補助金ノ如キモ該會社既ニ之ガ必要ナケレバ、政府ハ曷ゾ必ズ之ヲ付與スルヲ要センヤ。當ニ之ヲ要セザルノミナラズ、隨テ弊害ヲ醸成セザルヲ保セズ。何トナレバ會社ニテ證券

ノ利子ヲ支拂フニ不動産所有者即チ借主ノ納付スル金額ヲ以テセズシテ、常ニ之ヲ政府ノ補助金ニ仰グガ如キアラバ、則チ所謂補助金ハ社運ノ進歩ヲ幫クルノ効ナクシテ、却テ會社ハ其負債者ニ對シ不動産ノ價格ヲ正當ニ評定シ、且ツ嚴肅ナル處分ヲ行フヲ好マズシテ、專ラ政府ニ依頼スルノ念ヲ生ジ、政府ハ之ガ爲メニ其國庫ヲ耗失シ、隨テ納稅者ヲ損害スルノ惡結果ヲ生ズベケレバナリ。然ルニ余ガ前ニ所謂確實有効ニシテ政府ノ宜ク決行スベキ方法トハ他ナシ。政府自カラ株式取引所ニ就テ土地抵當會社ノ證券ヲ買收スルコト是レナリ。此方法ヲ以テスレバ證券ノ時價益々騰貴ニ傾キ、一般ノ購買者ハ益々勇氣ヲ鼓シ、隨テ該會社創草ノ際ニ當リ信用ヲ發達シ、基礎ヲ鞏固ニスルノ効アリ。而シテ之ガ爲メ毫モ國庫ニ損耗ヲ來スノ危險ナカルベシ。是レ洵ニ一舉兩得ノ法ニシテ、其理最モ親易シ復余ノ贅辯ヲ要セザルナリ。

第二 興業證券

余ハ是レヨリ本草案ニ所謂興業證券ノ事ニ就テ二三ノ意見ヲ開陳セントス。

余ノ見ル所ニ據レバ、本草案ニ所謂興業證券ナル者ハ前文ニ叙述シタル書入證券（オブリガシヨン、イポテケール）ト全ク其性質ヲ異ニス。蓋シ書入證券ノ保證ハ書入質資本金トノ兩者

ニ存スレドモ、興業證券ニ至リテハ單ニ株式ヨリ成立チタル資本金ノ巨額ナルヲ悻ムモノナレバ、兩證券ノ相異ナル所ハ全ハ此點ニ在リト信ジテ敢テ誤解ニハ非ザルベシ。然ルニ府縣又ハ郡區ニ於テ資金ノ需要アルモ、別ニ書入抵當ニ差入ルベキ不動産ヲ所有セザル時、必ラズ其資本金ヲ以テ之ニ貸與スベキモノトスレバ、該會社（府縣貸付會社ト稱シ若クハ其他ノ名稱ヲ付ス）ハ決シテ固有ノ資本ヲ以テ普ク之ニ供給スル能ハザルヤ明瞭ナリ。蓋シ世界最大ノ會社ト雖ドモ限有ルノ資本ヲ以テ各府縣限無キノ需要ニ應ズル能ハザルハ理ノ最モ親易キモノナリ。假リニ巨額ノ株券ヲ發行シテ斷ヘズ資本ヲ募集シ、以テ其需要ニ供給スルヲ得ベシトナスモ、安ゾ知ラン各資本家ハ該會社ノ株券ニ對シテ資本ヲ放下スルヨリモ、寧ロ府縣郡區ニ向テ直接ニ資本ヲ供給スルヲ好マザルコトヲ、現ニ歐洲各國ニ於テモ州若クハ邑ニ於テ各々地方債ヲ起シ、其金額ハ大率ネ數億萬ノ巨額ニ登ルニ非ズヤ。上來論述スル所ニ由テ之ヲ觀レバ、本草案ニ所謂興業證券ハ一般ニ地方債ト稱スル者ト大ニ其主旨ヲ異ニスル所アルヤ知ルベシ。但興業證券ト云ヘル名稱ニ於テ少シク疑惑ナキ能ハズ。凡ソ眞ニ興業貸付ト稱スルモノハ新タニ事業ヲ作ス者、若クハ既ニ着手セシ者等ニ對シ資金ヲ貸與スル銀行事業ノ一部タリ。然ルニ本草案ニ掲グル所ノ證券ハ此ノ如キ貸付トハ略々交渉ナキモノトス。是レ聊カ疑惑ヲ免レザル所ナリ。又佛國ノ主義ニ從フトキハ結局此證券ヲシテ國債ノ一部タルノ狀アラシメ、隨テ國債額ヲ

シテ佛國ノ如ク非常ノ高度ニ達セシムルノ結果ヲ生ズベシ。然レドモ名稱ノ適否ト佛國主義ノ良否トハ今此ニ論ゼズ。兎モ角モ余ハ能ク該證券ノ本旨ヲ會得シタリト信ズルモノナリ。該證券ノ本旨ハ實ニ盛大ニシテ且ツ新奇ナリト謂ハザル可カラズ。全歐各國財政上ニ關スル問題ハ余ノ深ク研究セシ所ナレドモ、何レノ國ト雖ドモ未ダ曾テ此本旨ニ等シキ考案アルヲ聞カズ。此考案ニシテ一たび世人ノ熟知スル所トナレバ、世界財政上ノ重要ナル諸考案中ニ相當ノ地位ヲ占ムルニ至ルヤ必然ナリ。余焉ゾ之ニ對シテ恭敬セザルヲ得ンヤ。

此考案ニ對シテ余ハ無益ノ批評ヲ下スヲ欲セズ、只其深意ノ在ル所ヲ察シテ順ヲ逐フテ左ニ之ヲ説明セントス。

顧フニ政府ニシテ草案第三十二條及第三十四條ノ主旨ヲ實行スルノ日ニ至ラバ、必ズ道ル可カラザルノ一事アルヤ必然ナリ（此一事トハ下文ニ謂フ所ノ府縣貸付ノ損失ヨリシテ其害ヲ土地抵當貸ニ及ボスヲ指ス）夫レ土地抵當貸ナル者ハ府縣貸付トハ全ク其性質ヲ異ニス、人一たび地方債證券ノ何物タルカ、又其書入證券ト異ナル所ハ重ニ主義取扱ヒ公法上ニ在ルコトヲ了解スルトキハ、本草案ニ所謂興業證券ナル者ハ府縣貸付ヲモ包含スルヲ知ルベシ。

前文ニ論述スル如ク、地方債證券ト書入證券トハ大ニ其ノ趣ヲ異ニスレバ、決シテ之ヲ混淆シテ單ニ興業證券ノ名稱ヲ付ス可カラザルヤ言フヲ俟タズ。蓋シ地方債證券ハ實ニ其基礎及ビ

取扱ニ於テ書入券ト異ナルノミナラズ、其流通高ハ必ラズ非常ノ多額ニ登ルノ傾キアリ。故ニ地方債ニ於テ萬一損失ヲ蒙ムルコトアレバ、必ズ其災ヲ書入證券ニ延及スルコトアルハ蓋シ避ク可カラザルノ勢ナリ。而シテ土地抵當會社ノ如キ重大ナル會社ニシテ、苟クモ他ノ爲メニ書入證券ノ安全ヲ害セラルルガ如キコトアレバ、國家ノ全體ニ關シテ不測ノ禍根タラザルヲ保セズ。豈慎マザル可ケンヤ。今若シ草案第三十二條及第三十四條ノ主旨ヲ實行シ、而シテ之ガ危害ヲ防遏セント欲セバ、宜ク之ヲ分割シテ二個ノ會社ト爲シ、一ハ土地抵當會社ト稱シ（其綱要ハ既ニ上文ニ論列セリ）一ハ府縣貸付會社ト稱スベシ。此ノ如クナレバ府縣貸付ノ爲メニ土地抵當貸ニ對シテ毫モ危害ヲ及ボスコトナク、又其成敗ニ因リテ土地抵當貸ノ連用ヲ妨グルコトナシ。而シテ府縣郡區ニ在テハ其需要ニ從ヒ常ニ資金ヲ得ルノ便路アリ。果シテ然レバ則チ府縣貸付ト土地抵當ト兩制並行ハレテ原説明書ノ主旨ニ於テ、始メテ全フスルヲ得ベシ。

以上叙述スル所ノ旨趣ヲ實施センニハ必ズ左ノ綱要ニ據ルベシ。

政府ハ先ヅ土地抵當會社ノ外ニ別ニ府縣貸付會社（ソシエター、ヂユ、クレデー、コンミニナル）ト稱スル一會社ノ設立ヲ特許シ、府縣若クハ郡區ニ對シテ無抵當ニシテ貸付ヲ爲スコトヲ目的トスベシ。而シテ其貸付ハ猶ホ土地抵當會社ト同一ノ主旨ニ據リ通貨ヲ以テセズシテ證

券ヲ付與スルノ法トス。

此會社ノ資本金ハ便宜之ヲ定メ公債證書ヲ買入レテ之ヲ大藏省ニ預ケ置クベシ。

此資本金ハ決シテ貸付ニ使用ス可カラズ。只該會社營業ノ保證金ニ充テ、萬一營業上ニ失錯アルトキハ之ガ責任ヲ負ハシムベシ。猶ホ土地抵當會社ノ資本金ヲ直チニ書入貸ニ使用セズシテ單ニ保證金ニ備フルガ如シ。

政府ハ該會社ノ社長ヲ特命シ且ツ其營業上全體ヲ監督スベキコト勿論トス。

儲テ會社既ニ開業ヲ告ゲ、府縣若クハ郡區ヨリ借用金ヲ請求スルトキハ、會社ニ於テ地方債證券（オブリガシヨン、コムミュナル）ヲ發行シテ之ヲ地方債ニ付與スレバ、地方債ハ株式取引所ニ於テ又ハ一個人ニ對シ此證券ヲ賣却シテ其代金ヲ得ルコト恰カモ土地抵當會社ノ證券ニ於ケルト異ナルコトナシ。

該證券ノ賣却ヲ容易ナラシメント欲セバ、猶ホ書入證券ト等シク二個ノ保證ヲ付スルヲ要ス。蓋シ該會社ノ妙用能ク他ニ異ナル所以ハ全ク證券ニ二個ノ保證ヲ付スルニ在レバナリ。

所謂二個ノ保證トハ左ノ如シ。

第一 資本金ヲ舉ゲテ證券元利ノ支拂ニ對シテ責任ヲ負ハシムル是レナリ。株主ハ右責任ヲ負擔スル代リニ其ノ株金（即チ公債證書）ノ利子ヲ收得スルノ外ニ、猶ホ府縣郡區ヨリ其借用金

ニ對シテ納付スル利子ノ中幾分ヲ割キテ之ヲ各株主ニ配當スベシ。

第二 此保證ハ前者ニ比スレバ更ニ重要ナルモノニシテ、地方廳ノ請求ニ依リ會社ニテ地方債證券ヲ貸與シタルトキハ該證券ノ利子ニ充ツベキ金額ヲ地方廳ノ歲計中ヨリ徵收スルノ權利ヲ該會社ニ特許スルコト明ナリ。會社ハ地方豫算ノ決定前後ニ拘ハラズ、若シ又已ムヲ得ザルトキハ府縣又ハ郡區ノ收益、税金若クハ金庫ニ就テ證券利子ニ充ツベキ金額ヲ差押フルコトヲ要ス。假令地方廳ニ於テ之ガ爲メ政費ノ不足ヲ來スコトアルモ、該會社ニハ決シテ繫累ヲ及ボス可カラズ。何トナレバ新稅又ハ附加稅ヲ課シテ以テ政費ノ支辨ニ供スルハ獨リ地方廳ノ責任ニ在レバナリ。

前文ニ論定セル主義ハ必ズ嚴肅ニ實行スルヲ要ス。若シ然ラズシテ地方歲計ノ如何ニ由リテ苟クモ證券利子ノ支拂ヲ左右セラルルガ如キコトアラバ（例ヘバ證券ノ抵償トシテ二三種ノ稅額ヲ會社ニ付與スル等ノ如シ）該會社ノ株券ハ忽チ信用ヲ墜シ、隨テ全國各府縣若クハ郡區ニ對スル證券モ亦之ガ影響ヲ免ルル能ハザルベシ。故ニ地方廳ニ於テ若シ其借用金ニ對スル利子ノ納付ヲ怠リタルトキハ、直チニ其金庫ヲ差押フルノ權利ヲ該會社ニ特許センコトヲ要ス。而シテ會社ハ又其資本金ヲ舉ゲテ證券所有者ニ對シテ元利支拂ノ責任ヲ負擔スベキハ勿論ナリトス。

此ノ如クナレバ地方廳ニ於テ若シ利子ノ支拂ヲ怠ルトキハ會社ハ別ニ訴訟手續ヲ要セズ、只其旨ヲ政府ニ上申スルノミニテ直チニ該廳ニ屬スル金庫及ビ收入金ヲ差押フルコトヲ得ルヲ以テ、決シテ其資本金ヲ損失スルノ虞ナシ。又政府ハ此ノ如キ非常ノ特權ヲ付與スルモ、其社長ハ政府ノ親シク進退指揮スル所ナレバ、之ヲ濫用シ若シクハ、拋棄スル弊ヲ醸スノ憂ナカルベシ。而シテ證券所有者ニ於テモ僅少ナル金額ノ爲メ費用ヲ抛テテ地方廳ニ對シ訴訟ヲ起ス煩ナク、直チニ會社ニ就テ元利金ノ支拂ヲ受クルコト、恰モ土地抵當會社ニ對スルト一般ナルベケレバ、證券所有者ノ便最モ大ナリト謂フベシ。是ニ由テ之ヲ觀レバ、地方債證券ナル者ハ全ク書入證券ト効用ヲ同フシ、其異ナル所ハ只書入證券ノ基礎ハ主トシテ不動産ノ書入質ニ存スト雖ドモ、地方債證券ニ在テハ地方廳ノ收入金ヲ以テ基礎ト爲シ、該廳若シ支拂ヲ怠レバ直チニ之ヲ差押フルヲ得ルト云フニ在リ。之ヲ要スルニ土地抵當貸ハ民法上書入質ノ權ニ基ヅキ、府縣郡區ノ貸付ハ公法上官金差押ノ權ニ基ヅクモノトス。既ニ公法ト民法トノ區畫判然タル以上ハ、土地抵當會社ト府縣貸付會社ト間ニモ亦豈其區畫ナクシテ可ナランヤ。

以上論述スル主旨ヲ實行セント欲セバ、只原草案第三十四條ノ旨趣ヲ擴充シテ土地抵當ト府縣貸付トノ兩會社ヲ分チ、歐洲諸國未ダ曾テ有ラザルノ妙案ヲ完終スルニ在ルノミ。

本論ヲ終ルニ臨ミ此ニ一言スベキアリ、政府若シ府縣貸付會社ノ事業ヲ保護セント欲セバ其

方法ハ利益金ヲ保證スルヨリモ寧ロ地方廳ニ對スル差押執行ヲ迅速ナラシムルヲ最モ實効多シトス。蓋シ地方廳常ニ差押ノ危険アルヲ知ラバ必ラズ利子ノ支拂ヲ怠ラザルベシ。利子ノ支拂ヲ怠ラザレバ則チ百事井然復タ憂フ可キモノナシ。

千八百八十六年一月

維也納ニ於テ

ドクトル、ローラン、ド、スタイン

日本近代財政ノ沿革

ローランド、スタイン

今ヲ距ルコト五十年前ノ所謂「財政」ナルモノハ、吾人今日ノ文明ノ地位ヨリ之レヲ觀レバ寔ニ遼藐トシテ遠洋ヲ莅ムガ如キ思ヒアリ。五十年前ニ於テ理財ノ道ハ最モ祕密ニ屬シ、一國ノ財務ハ一ノ技術ノ如ク之ヲ了知スルノ人甚ダ尠ク、一切ノ財政僅ニ其道ニ入ルノ人ニ限リ之ヲ了解スルヲ得タルノミ。爾後五十年ノ間ニ歐羅巴殊ニ獨逸ニ於テ理財ノ道幾多ノ變遷ヲナシタルヤ、是レ世人ノ能ク知ル所ナリ。夫レ眞ノ理財學ヲ發達セシメタルハ正シク獨逸國ノ功勞ニ歸スト雖ドモ、眞ノ財政ノ法規ヲ創定セシ名譽ハ、之ヲ史乘ニ徵スルニ佛蘭西ト孛漏生トノ二國ニ分與セザルヲ得ズ。然リ而シテ不正ノ計算ヲ世ニ公布シタルモ亦佛蘭西國ヲ以テ嚆矢トス。蓋シ同國ノ決算報告ニ就テハ千七百五十八年以來吾人寡クモ其要領ヲ知ルヲ得ベシ。今日ニ於テハ既ニ一般文化ノ進ムニ因リテ歐羅巴各國財政ノ狀況ヲ普ク了知スルニ至リ、且ツ收支豫算ノ討議ニ依リテ各人ヲシテ當ニ收稅ノ法規ヲ知ラシムルノミナラズ、收稅ノ原因ヲモ了解シ易カラシムルニ至レリ。是レ畢竟我文明ノ著シキ進歩ヲナシタル結果ニシテ、敢テ怪シム

ニ足ラザルナリ。宜ベナル哉今日已ニ各國ノ財政ハ其國ノ確タル秩序ト、其獨立自存ノ實力トニ對スル無二ノ標準トナリ、並ニ其歲入出豫算書ト國家ノ爲メニ平時ニ於テハ望ム可ク戰時ニ於テハ嫌フ可キモノ（即チ一國ノ殷富）ノ度ヲ計數ニ表ハシ、以テ之ヲ吾人ニ知ラシムルニ至レルヤ。夫レ一國ノ財政ニ於テ其國政ノ爲メニ消費スル金額並ニ其國經濟上ノ活動ヲ損スルコトナクシテ、其歲入ヲ以テ支辨ス可キ金額ト國民ノ生存力及將來トノ間ニハ頗ル重要ノ關係アリト雖ドモ、吾人ハ之ヲ爰ニ論ゼザルベシ。但シ吾人ハ豫算ノ統計數ニ由リテ一國ノ財政上其能スル所ヲ知ルガ故ニ、理財學ニ依リテ吾人ハ又財政ノ内ニ正シク租稅法ハ一國ノ生産ト消耗トニ關スル經濟力ノ秩序ヲモ立法上ニ認定セシヤヲ指示スルモノタルヲ知ルナリ。而シテ右ノ豫算統計ノ總額モ畢竟此經濟力ヨリ生ズルモノニ外ナラズ、蓋シ邦家經濟ノ狀態ニシテ果シテ政府ノ爲メニ理財ノ道ノ元素トナラシメバ、稅則ハ即チ此元素ヲ支配スベキ精神ノ外部ニ發表セシモノト謂フ可シ。

本論ニ移ルニ先ツテ前記ノ緒論ヲ約述セシ所以ハ、該論ノ當ニ政治上及理財上ノミナラズ、貿易上ノ關係ニ於テモ亦大ニ裨益アルガ爲ニシテ、讀者幸ニ之ヲ了セラレヨ。而シテ其本論トシテ吾人が爰ニ我讀者ノ注意ヲ喚起セント欲スルモノハ即チ日本ノ租稅法是レナリ。

夫レ我歐洲人ガ一方ハ英領印度、一方ハ太平洋ヲ越エテ意ヲ東方亞細亞ニ注ギタル以來、未

ダ十年ヲ經過セズ。其初メハ東方亞細亞ノ將來果シテ宇内ノ重要ナル境土トナルヤ全く不明亮ノ感覺ヲ懷キタリ。歐洲ニ於テ此東方亞細亞ヲ知了スルコト寔ニ淺少ナリト雖ドモ、今ヨリシテ既ニ其發達開展ニ自ラ一定ノ時期アルヲ辯明スルヲ得ベシ。而シテ吾人ハ此地ニ於テ目下準備中ノモノアルニモ拘ラズ、其發達ノ意義及ビ進路ヲ詳説スルコトノ甚ダ有益ナルヲ信ズ。蓋シ東方亞細亞ノ前兆ニシテ全く違フコトナクンバ、歐羅巴ト東方亞細亞トノ交際ノ第三期ハ今既ニ其端緒ヲ示スガ如ク、眞ニ等閑ニ付スベカラザルノ秋ニシテ、且ツ決シテ匆率ニ其局ヲ結バザルベシ。斯クノ如ク東方亞細亞ノ開進スルニ從ヒテ、其最顯著ナル文明ヲ致スベキハ即チ日本ナリ。而シテ日本ニ於テ之ガ主據ヲ演スルモノハ其租税法トス。

抑々歐羅巴ト東方亞細亞トノ關係ノ第一期ハ吾人歐羅巴人ガ東方亞細亞ヲ發見セシ時期ナリト謂フモ敢テ不當ニアラザルベシ。而シテ之ヲ發見セシ人ハ實ニマルコポーロ氏ニシテ、氏ハ恰カモ遠キ東洋ノヘローデス(昔時コーデア國ノ王ニシテ東方ヲ平定セシ人ナリ)ニ似タリ。是ヨリ第二ノ時期發達シ、其二三ノ實蹟ハ人ヲシテ之ヲ忘ル能ハザラシム。抑々十六世紀ノ頃葡萄牙人ノ此土ニ來レル際ニ、東洋諸國及其人民ト葡人トノ初度ノ遭遇ハ恰モ同時ニ西班牙人及之ニ次グ所ノ阿蘭人ノ東洋諸國ト交際ヲ始メタルガ如ク二様ノ別アリキ。即チ當時已ニ此東方亞細亞全土ノ歐羅巴ニ對シテ二大部ニ分レタル事是レナリ。此二大部ハ今尙依然存在シ、且

ツ百世ノ後ニ至リテモ決シテ消滅スルコトナカルベシ。其一大部ハズンダ海峽ノ群島ヨリ支那ニ至ルマデノ亞細亞諸島ヲ包括シ、此等總テ馬刺加及ビ蘇門答臘ヨリ、呂宋^{ルイソ}ノ極尖端ニ至ルマデ、歐羅巴人ニ對シ同一ノ運命ヲ呈セリ。又海ニ航シテ直ニ達スベキ島嶼ニシテ未ダ嘗テ確タル國家ノ團結ニ發達セザルモノハ一切歐人ノ治下ニ服從セリ。然リト雖ドモ自餘ノ東方亞細亞ニ在リテハ敢テ然ラズ。

其敢テ然ラザル亞細亞諸國ノ中、吾人ノ爰ニ論ゼントスルモノハ二大強國ニシテ、一ハ陸地ノ強國タル支那ト、一ハ洋中ノ強國タル日本ナリ。此二國ニ對シテハ歐人侵略ヲ逞フスルコト能ハザルハ言ヲ俟タズシテ之レト成ルベクタケ永久ノ通商貿易ヲ爲シ、親密ノ交際ヲ保タンコトニ止ラザル可カラズ。然リ而シテ支那ト日本トハ今ヲ距ルコト二百年前ヨリ既ニ大ナル懸隔徑庭アリテ、今日ニ至リテハ殆ンド特異ナル二系統ヲ追ヒテ發達スルコトトナレリ。支那ハ初ヨリ歐羅巴人ヲ敵視シ、且ツ之ヲ擯斥セリ。日本ハ之ニ反シテ兩手ヲ開キテ歐羅巴ノ事々物々ヲ受容シ、且ツ日本國ニ固有ナル信實ヲ以テ之ヲ取レリ。歐羅巴ノ移住者ハ支那ニ於テハ斷エズ危險ニシテ、日本ニ於テハ平安ナル郷里ヲ得タリ。日本人中又歐人ト額繁ノ交際ヲナス者許多之レアリ。一時ハ日本ト歐羅巴ノ關係將來ニ向テ双方其安全ヲ保スルヲ得ルノ度ニ達セリ。然ルニ圖ラザリキ夫ノ不幸憐ム可キノ事變起リ、嘗テ中部亞米利加ニ於テ基利督ノ爲ニ舊時ノ

文明ヲ滅盡シタルガ如ク、葡萄牙僧徒ノ布教熱心却テ其慘憺タル事態ヲ招ケリ。當時ニアリテハ政府ノ能ハザル所教會之ヲナスノ勢ニシテ、刀劍ニ代ルニ經典ヲ以テ日本ヲ奪略センコトヲ計レリ。何トナレバ政府之ヲナシ能ハザレバナリ。此ニ至リテ所謂日本鎖國ノ一端起リ、「カトリック」宗ノ僧徒ハ（吾人、今日之ヲ史乘ニ徵スルガ如ク）大ニ日本ノ懇親ヲ損シタリ。當時僧徒ハ漸ク歩ヲ進メテ内地ニ入り、大ニ國ノ内情ニ立入り、遂ニ日本ノ執權者ヲシテ僧徒ノ所爲ヲ危險ナルモノト看認メシムルニ至レリ。此時ニ當テ日本政府ガ斷然布教ノ事ヲ嚴禁シ、兵力ヲ以テ耶蘇教徒ヲ國外ニ放逐シ、宗教ノ問題ニ因リテ内訌殆ンド起ラントスル狀況アリキ。是ヲ以テ日本トノ關係ノ第二期其終リヲ告ゲタリ。斯クノ如ク布教ノ徒ハ將來ニ向テ日本人民ガ歐羅巴人ヲ深く憎惡スル事ヲ遺シ、阿蘭人ノ如キ夫ノ布教ノ事ニハ毫モ關係セズシテ殆ンド自國人民ノ名譽ヲモ顧ミザルニモ拘ハラズ、彼ノ限界ヲ劃シ警戒ヲ嚴ニシタル一小地ニ於テ、一定ノ規約ヲ守リ金利多キモ名譽少キノ商業ヲ營マント欲スルモ、尙日本政府ノ準許ヲ得ルコト甚ダ難キニ至レリ。是ニ於テ歐羅巴ト日本トノ交際ハ數百年間中絶スルコトナレリ。

然ルニ第十九世紀ノ半バニ至リ再ビ交通ノ事起レリ。今本編ニ於テ最近三十年間ノ沿革ヲ述ブルハ贅長ニ涉ルヲ以テ之ヲ省略スベシ。蓋シ此時期ハ日本ト歐羅巴トノ當時未ダ充分發達セザル通商貿易ヲ開展スルノ第二期ニ當レリ。此期ニ於テ見ルベキモノハ世人ノ普ク知ルガ如ク

日本ノ漸次萬國貿易ニ加入セルト、且ツ現時既ニ日本ト各獨立ノ大國トノ間ニ於ケル貿易上ノ關係ニ就テ一大問題ノ起レルコト是レナリ。

其問題タルヤ從來専ラ左ニ掲グル二點ヨリ成レリ。是レ我が讀者中之ヲ知レルモノ甚ダ多ラザリシナラン。即其一ハ吾人ノ已ニ簡單ニ説明セル所ノモノニシテ、日本ニ居留スル歐羅巴人ノ治外法權及其免稅權ノ問題はナリ。其二ハ之ニ反シテ通商條約ニ關スルモノニシテ、第一ノモノト齊シク重大ノ關係ヲ有シ、殊ニ太平洋海上事物ノ發達ニ於テハ一層緊要ナリ。但シ吾人ハ此點ニ於テハ本論ニ直接ノ關係アルモノノミヲ説クベシ。而シテ現ニ談判中ナル日本ノ通商條約ニ論及スルコトハ之ヲ他日ニ讓ルベシ。然レドモ日本ノ治外法權並ニ通商條約ノ現行法ハ實ニ一種殊別ノ性質ヲ有スルモノト謂ハザルヲ得ズ。抑々此二者ハ日本自家ニ於テモ歐羅巴ニ於テモ共ニ日本ヲ以テ歐羅巴ノ開明ヨリ遠ク劣レル國ト見做セル時ニ起レルモノナレバ、總テ此條約タル歐羅巴ノ文明ニ遠ク及バザル土兒其國ノ如キ舊時ノ東國ニ對スルト同一ノ地位ヨリ發シタルモノトス。然ルニ千八百五十四年ヨリ千八百七十四年ニ至ル迄三十年間ノ經驗ニヨレバ日本ニ於テ未曾テ土國ノ如キ事情アルヲ見ズ。且ツ開港以來日本ノ事物ハ大ニ變遷シテ其舊時ト現時トハ復得テ比較スベカラザルホドナリ。吾人今特ニ本論ニ關スル諸件ヲ説クニハ、先ヅ日本ノ商業ニ於ケルノミナラズ、進取ノ氣象ニ富メル日本人民ノ文明ニ於テ、非常ノ進歩ヲ爲

シ、今ハ殆ンド歐米諸國ト併進スルノ實況ヲ示スニアラザレバ本論ノ主意ヲ詳ニスルコト能ハザルベシ。今ヤ日本ハ嘗ニ商業上ノ一國タルニ止マラズ、自己モ亦自ラ之ニ安ンゼズ、實ニ一強國ニシテ自己モ亦強國タルノ公認ヲ得ンコトヲ求メ、竟ニ此公認ヲ得ルニ至レリ。即チ日本ノ公使ハ歐羅巴ノ各大國ニ駐在シ、歐羅巴ノ公使ハ東京ニ駐紮ス。又日本ト歐米各國トノ交際ハ外交上全ク平等ノ地位ニ立テテ完全整備ス。其他日本ト歐羅巴トノ間ニ於ル學問上ノ交通ハ日夜長足ノ進歩ヲナセリ。是ヲ以テ舊時制定ノ事件ニシテ尙殘留スルモノニ就テハ今日ニ於テ異議百出シ、就中夫ノ不正不當ナル治外法權及東洋關稅法ノ連帶スル通商條約ノ如キハ今日已ニ英國ノ政治社會ニ於テスラ復維持スベカラザルモノト認定セララルニ至レリ。故ニ日本ノ進歩ノ實ニ迅速ナル事ヲ實驗シタル人ハ、夫ノ舊條約ヲ廢シ日本ノ歐羅巴人ニ比肩スルノ時ハ吾人ノ信ズル所ヨリモ尙早カルベシトノ說ニ對シテ皆同齊ニ然リト言フベシ。既ニ此時期ニ達スレバ日本ハ宇内強國ノ一ニ列シ、太平洋上第一等ノ強國トナルベシ。是ニ於テ始メテ吾人ノ爰ニ論ズルモノ、即チ日本ノ財政ハ甚ダ重要ノ關繫ヲ有スルニ至ルベシ。是レ財政ハ日本ノ由リテ以テ其獨立ヲ保チ大疑問ノ權衡ヲ維キ得ルモノナレバナリ。

吾人今此ノ簡單ナル緒言ヲ終リ、進ミテ本論ニ移ラントス。然ルニ日本ノ財政タル實ニ奇異ノ基礎ヨリ起レルヲ以テ、其事嘗ニ東洋一部ノ利害ヲ有スルニ止ラズ、理財學上ノ裨益ヲ爲ス所モ亦甚ダ多カルベシ。何トナレバ日本財政ノ發達ハ全世界財政ノ沿革中、略ボ之ニ類スルモノタリトモ決シテ見ザレバナリ。

今ヲ距ルコト二十年前ニハ、日本ニ於テ未嘗テ租稅法アラザリシ。而シテ現時ノ租稅法ハ何レノ點ヨリ之ヲ觀ルモ歐羅巴ノ租稅ト全ク同等ナルモノトス。是レ實ニ史乘ニ於テ未ダ曾テ其例ヲ見ザル所ノ發達ヲ成シタルモノト謂フベシ。苟モ邦家經濟ノ問題ヲ以テ任ズルノ人ハ、斯ノ如キ事業ヲ成スニ何等ノ難件ニ遭遇スルヤヲ知ルベシ。抑々負債、收入及支出ハ各國古ヨリ之ヲ有スル所ニシテ、日本モ亦然ルハ固ヨリ怪ムベキニアラズト雖ドモ、獨リ稅則ニ至リテハ大ニ異同アリ。夫レ眞ノ稅則ナルモノハ政府ニ於テ人民ノ收入スル利源ヲ詳細調査シ、次ニ其收入ノ各部ト其納稅力トヲ比算シ、而シテ後始メテ賦課ノ割合ヲ確定スルニアラザレバ實際行ハル可ラザルナリ。而シテ人民收入ノ源ヲ詳ニスレバ則チ始メテ課稅品目ヲ定ルヲ得ベク、又收入ノ各部ト納稅力トヲ比較スレバ則チ始メテ課稅ノ割合、他語ヲ以テ之ヲ言ハバ眞ノ租稅法ヲ確定スルヲ得ベシ。此租稅法タルヤ、萬國財政ノ沿革ニ於テ歷然タルガ如ク、恒ニ直稅、間稅ノ別ヲ設ケザルハナシ。但シ各種ノ租稅ヲ一々直稅間稅ニ分解シテ以テ整然完備ノ稅規ヲ定ルニ至ルマデハ、之ヲ歐土ノ例ニ徵シテ數百年ヲ費シタリ。苟クモ歐土各國財政史ノ大體ニ通ズルモノハ前ニ述ベタル租稅ノ別遠ク希臘、羅馬ノ世ニ胚胎シタルニモ拘ラズ、其完全整備ヲ

致スニ尙數百年間ノ久シキヲ要セシコト皆能ク知ル所ナリ。夫レ歐羅巴ハ當十九世期ニ至リテ始メテ租税法ノ發達ニ就キテ稍々正當ノ制ヲ發見セリ。日本ハ今ヲ距ルコト二十年前ニアリテハ未ダ此兩大區別ヲモ知ラザリシガ、今ハ整然完備シテ確乎タル基礎ニ基ケル租税法アリテ、毎年其統計ヲ公布ス。是ニ由リテ日本帝國ハ吾人ノ一生期前ニハ絶テ收入ヲ有セザリシモ、今ヤ其歲入七千萬圓餘即チ凡ソ我一億五千萬「グルデン」餘ニ當ル豫算ヲ示シ、憲法上ノ成規ナキモ毎年詳細ノ計算報告ヲ人民ニ告示ス。此ノ如ク眞ニ世ニ希レナル成績ヲ詳ニ了知スルヲ得タルハ、是レ偏ニ日本ノ事情ヲ熟知スル英國公使館ノ書記官ガビン君ガ近時起草セル日本租稅報告書ニ依ルナリ（載セテ千八百八十三年英國領事館通商報告ニアリ）

ガビン君ガ日本沿革ノ此部分ニ深ク論及セザルハ獨リ遺憾トスル所ナレドモ、書中總テ租稅ニ關シテ發布セラレタル現行法律ノ説明ヲ掲ゲタリ。而シテ、東亞細亞每週新報中ノ巨擘タル「日本ウエックリーメール」ハ本年五月三十一日ノ附録ヲ以テ其報告書ヲ公ニセリ。之ニ加ルニ「メール」記者ハ日本ノ一大新聞タル報知新聞ノ數日ニ涉ル論說ヲ英文ニ翻譯シ、以テ之ヲ該報告ニ附加シタルニ因リテ、日本財政ノ景況殊ニ明瞭ナルヲ得タリ。英譯報知新聞ノ論說ハ主トシテ地租ニ關シ最モ裨益アル記事沿革ヲ掲ゲ、ライン其人ト雖ドモ未ダ嘗テ聞見シザル所ノモノヲ載セ、吾人ヲシテ日本帝國舊時ノ國勢ヲ明瞭ニ知了セシム。蓋シ此論說ヲ一讀セザル

者ハ日本近時ノ發達ニ就テ敢テ充分ノ判斷ヲ下ス能ハザルベシ。

之ガ爲メニ讀者ハ猶古今萬國理財學ノ沿革ニ於ケルガ如ク、日本ノ租税法モ亦其國ノ社會及政治上ノ秩序ト親密ノ關係ヲ有スル事ヲ忘却ス可ラズ。

既ニ上文ニ述べタルガ如ク、日本ニ於テハ一千八百六十八年ニ至ルマデ歐羅巴主義ノ稅則一モナカリシコトヲ知ラバ、更ニ進ンデ日本ノ公債上ノ事態ヲ一見スベシ。即チ其初メ國權上ノ事ハ舊時ノ地主タル藩主ノ掌中ニ存在セシ狀況ヲ觀察セスンバアル可ラズ。

此目的ノ爲ニ先ヅ說述スベキハ日本全國凡ソ百八十ノ藩國ニ分レテ、各藩別ニ一小獨立ノ財政ヲ布施セルコト是レナリ。其性狀ハ設令吾人ニ甚ダ奇異ノ思ヒヲ爲サシムト雖モ、下文ニ說述スル理由ヲ知レバ容易ニ之ヲ了會スルヲ得ベシ。即チ各藩主ハ獨立ノ一小國ヲ成シ、其領内ニ於テ殆ント無限ノ主權ヲ施行シタリト雖ドモ、此領士タルヤ藩主ノ私有物ニアラズ、又藩主其領地ノ上ニ眞ノ範圍管領權ヲ有スト云フ可カラザルヲ以テ、是レ歐羅巴ノ意義ニテ了解スルコト甚ダ難事ナリトス。然ルニ各藩主ハ其城内（屋敷）ニ住シ、數多ノ武士衛卒ヲ引率シ、先祖傳來ノ兵權ヲ掌握セリ。此武士トハ即チ士^{サムライ}ノ謂ニシテ、一國ノ貴族ニ相似タレドモ、決シテ土地不動産ヲ私有スルモノニアラズシテ、單ニ藩主ヨリ給養ヲ仰グモノナリ。今夫レ各藩主ハ收獲アル土地ヲ私有スルニアラズ、從ヒテ其武士モ亦歐羅巴ノ例ノ如ク其奉仕ノ報酬トシテ

所有地ヲ以テ封セラレザルガ故ニ、他ニ一事ノ餘レルモノアルノミ。日本舊時ノ理財法是レナリ。即チ各藩ノ領土ニ住スルモノハ總テ其藩主ニ年々貢米ヲ納メザル可カラズ。而シテ後、藩主ハ此貢米ヲ一ハ舊米ノ慣例トナリタル石高二從ヒ、一ハ自己ノ酌資ヲ以テ更ニ麾下ノ武士ニ分與セリ。是ヲ以テ武士ハ藩主ニ對シ諸般ノ勤務殊ニ軍役ニ服スルノ義務ヲ負ヘリ。此ノ如キ方法ヲ以テ經濟上武士ハ其藩主ニ隸屬セルガ故ニ、武士ハ藩主ニ對シテ最忠義ノ道ヲ盡セリ。何トナレバ此忠義ナクンバ武士タルモノハ殆ント生存スルコト能ハザレバナリ。此事情數百年間繼續シテ深ク人心ニ浸染シ、現時ニ至リテ尙其ノ餘効力アリ。即チ武士ハ夫ノ米祿ヲ以テ永久安全ナル生存ヲ得タル故ニ、嘗ニ農業勤勞ヲ取ラザルノミナラズ、其他ノ各職業ヲモ亦一切拋棄シテ坐食スルノミ。是ニ因リテ維新改革ノ際各藩頓ニ廢セラレタルガ爲ニ、全國ノ武士總テ不安ノ地位ニ陥リシコト寔ニ明カナリ。何トナレバ今ヤ各藩主ハ其舊臣ヲ統率スルノ權利ヲ失ヒ、從テ又米租ヲ徵スルノ權利ヲ失ヒ、復タ武士ヲ給養スルコト能ハザレバナリ。當時國權ノ名アルモ之ニ附屬スル租稅ノ種類一モアルコトナク、政府ハ其國權ニ依リテ新ニ理財ノ道ヲ開カザルヲ得ザルノ有様ナリキ。又日本皇帝ノ當時絶テ資財ナカリシコトハ世人ノ能ク知ル所ニシテ、藩主ハ時ニ臨ンデ皇帝ニ參朝シ、若クハ獻物ヲナスト雖ドモ、總テ此事タル之ヲ中古時代ニ於ケル獨逸帝國ニ比スレバ其効力寔ニ鮮少ニシテ論ズルニ足ルベキモノアラズ。即チ日

本皇帝ハ絶テ皇室ノ財産、官領地、鑛山鹽田等ノ利原及關稅ヲ有セズ、寔ニ洗フガ如キノ赤貧ニシテ、總計所有物件ノ至高君長タル虛位ヲ占ムルノミ。又皇帝ハ小弱ナル大名ノ如ク帝屬ノ武士ヲ有セズ、之ニ代フルニ格式ハ甚ダ高貴ナリト雖ドモ、全ク無資産無勢力ノ高等貴族（公卿）アリテ皇帝ニ奉仕セリ。是レトモ僅々少數タリシノミ。故ニ米租ノ外ニ收入ノ源アレバ其利ハ獨リ諸侯ノ長タル將軍ニ於テ之ヲ收メタリ。凡ソ收稅官領地及鑛山鹽田若クハ關稅ノ收入ニ付テハ歲出ノ種類ト齊シク共ニ言フ可キモノナカリシ。何トナレバ各藩ハ皇帝并ニ將軍ニ對シテ全ク獨立不羈ノ經濟ヲ營ミ、其武士ヲ以テ自己ノ軍兵ヲ支持シ、凡ソ理財ノ事ニ就テハ嘗ニ計算ノ責ニ任ゼザルノミナラズ、各藩隨意ニ紙幣ヲ發行スルノ權ヲ有シタレバナリ。但シ此紙幣タルヤ固ヨリ其領内ニ限り僅カニ流通シ其本位價格ヲ有シタルモノトス。其他ノ事情ハ吾人爰ニ之ヲ述ブルヲ止メ、惟々彼ノ殆ント八拾種ノ通用紙幣アリテ絶テ之ヲ監督スルコトナク、維新ニ依テ政府ハ各藩ニ代リテ之ヲ辨償セザルベカラザルガ如キ、寔ニ國家經綸ノ道ノ具ハラザリシ事ヲ簡單ニ述ブルノミ。是レ我問題ニ對シ維新前財政ノ關係ニ於テ示ス所ノ狀況ナリ。

是ニ於テ皇帝ノ名ヨリ皇帝ノ實ヲ生ジ、名實相伴フニ至リテ新立政府ハ其財政ニ關シテ非常ノ責務ヲ負ヘルコト言ハズシテ既ニ明カナリ。

吾人ハ今爾後ノ財政沿革ニ論及スルコトナク、爰ニ專ラ新政府ノ困難及其非常ノ責務ヲ略述スルニ止マント欲ス。

第一ニ着手シテ著明ナル事業ハ諸藩及將軍ヲシテ總テ其權利、所領、收獲及世祿ヲ舉ゲテ之ヲ悉ク皇帝ニ奉還スルコトヲ出願セシムルニアリキ。

是ヲ以テ今ヤ皇帝ハ臣民ヨリ從來ノ諸稅ヲ徵スルノ權ヲ有スト雖ドモ、之ガ爲メ舊諸藩ノ百般ノ義務ヲモ亦悉ク負擔セリ。但シ是時ニ當リテ皇帝ハ又同時ニ一切ノ國權ヲ其手ニ綜攬シタルヲ以テ、日本國社會ノ第二要素（即チ士族）モ亦之ガ爲メニ變革セリ。抑モ各藩其舊時ノ地位ヲ失ヒタル後、武士ト藩主トノ關係同時ニ廢滅シ、當時新政府ハ舊來ノ武士ノ未中央權ニ服從スルニ慣レズシテ新設兵制ノ嚴密ナル軍紀ヲ遵奉スルノ意向ナキヲ洞察シテ之ヲ軍務ニ役スルコト能ハザリキ。其他從來武士ノ殆ント制限ナキ支配ヲ受ケタル自餘ノ人民ヲ起シテ武士ト同等ノ地位ニ立タシメタルハ、武士ニ取リテ忍ビ難キノ情ヲ懷カシメ、殊ニ高尚ノ知識ハ到底武士ニ歸セシヲ以テ、其平民ト列ヲ同スルヲ憤ルニ至レリ。而シテ武士ハ今復其上ニ舊時ノ藩主ヲ有セズ、又平民ナル總名ノ下ニ統合セラレタル國民ト一般ニ視サレタルニ因リテ、復其舊時ノ米祿ヲ受ルコトヲ得ザリキ。武士ハ此時權力ト共ニ生活ノ方便ヲ失ヒ、之ニ加フルニ自ラ生業ヲ營ムノ力ナカリキ。故ニ日本ノ後來ニ向テ内亂ノ危險アルハ炳乎トシテ火ヲ睹ルガ如シ。

夫ノ一千八百七十七年日本政府ニ六千萬圓ヲ消費セシメタル騷亂ノ如キハ、實ニ其結果ナリト謂フベシ。是ニ於テ其勢力尙強大ナル士族ニ對シテ手ヲ下スベキノ責ヲ生ジ、且ツ設令ハ既ニ米祿ヲ廢シタリト雖トモ、目下必迫ノ困難ヲ救治スルノ策ヲ講ゼザル可カラズ。斯ノ如ク新政府ニ於テ士族ノ損害ヲ補充スベキ第二ノ責務起レリ。第三ノ責務ハ雇給官吏ヲ以テ新ニ獨立官省ヲ設ケ新政治ヲ開始スルニアリテ、敢テ輕易ノ業ニアラザリシモ、幸ニ平穩ニ其緒ニ就キ進ンデ其目的ヲ達スルヲ得タリ。此等百般ノ需求、日本數千年來ノ歴史ニ於テ其實行ノ準備會テ無ク、偶然新政府ニ現出シタルハ今ヲ距ルコト未ダ二十年ノ上ニ出デズ。吾人歐羅巴ニ於テ未ダ嘗テ斯ノ如キ例ヲ見ズ。僅カニペーテル大帝時代ノ魯西亞ニ起レルモノ之ト比較スベキニ似タリト雖ドモ、日本人民開化ノ度高キニ位スルト、其他諸般ノ事ニ於テ自ラ殊別アルトニ因リテ固ヨリ比較ス可カラズ。

新政府ガ第一ニ着手セザルヲ得ザル緊急必需ノ事業ハ國庫經濟ノ道ヲ起スニアリタリ。其當時ニアリテ歐羅巴ノ事情ヲ了知スルコト比例ハイヤニ的甚ダ尠ナキニモ拘ラズ、加ルニ此國歴史ノ先例ナク、又公ナル會計法及租稅法ニ練熟セル官吏モナク、且ツ理財學ノ理論ヲ知得スルモノモナカリシニ、開始ノ時ヨリ能ク理財ノ原則ヲ了解シ、秩然歩ヲ進メテ現時ノ發達ヲ致サシメタルハ實ニ驚駭ニ堪ヘザルナリ。

吾人ハ歐羅巴ニ於テハ數百年ヲ經テ始メテ今日ノ狀勢ニ達シタル開明ノ度ノ日本ニ於テハ僅ニ人生ノ半期間二十五年ニシテ一握ニ括取セラレタル發達ノ綱領ヲ爰ニ先ヅ記述スルハ允當ナリト信ズルナリ。而シテ吾人ノ說カント欲スルモノハ實際ノ觀察ニ基ヅキテ日本國ヲ判斷スルノ徒ニ對シ、實ニ正當ノ標準ヲ與フルモノニシテ、同時ニ又吾人ハ日本現時ノ財政ニ論及スルヲ得ベシ。總テ此等ノ事ハ東亞細亞ノ管ニ通商上ニ於ケルノミナラズ、政治上ニ於テモ亦等閑視スベカラザルモノトス。

吾人ハ之ヲ各別ニ細說スルコトナク一千八百六十八年以來ノ日本財政ノ發達ヲ三期ニ分チテ以テ概說セントス。其第三期ハ已ニ現時ノ中央ニ立テリ、各期共ニ皆二百年間ノ沿革ノ價值アリ。

第一期トハ維新ノ初ヨリ一千八百七十七年有栖川親王ガ士族ノ騷亂ヲ戡定スルニ至ルマデノ十年間ヲ謂フナリ。此時期ニ於テ創始ノ財政ニ對シテ先ヅ三事業アリタリ。第一ニハ政權ヲ諸藩ヨリ收メシ後、全國一致ノ財政ヲ布カンガ爲メ紙幣ノ制度ヲ統一セザルベカラズ、是ニ由リテ政府ハ舊藩ノ從來ノ紙幣類ヲ廢シ、之ニ代フルニ全國普通ノ紙幣ヲ以テセリ。(然レドモ是レ路易十四世紀若クハ英國内藏局若クハ維也納府銀行ノ先例ヲ知リテ之ニ模倣シタルニアラズ、唯偶然佛國ノ國庫證券ノ主意ニ符合セリ)是レ日本紙幣即チ金札ノ本源ニシテ、今尙日本ニ於

テ重要ノ關係アルモノナリ。第二ニハ舊藩主就中士族ニ其失亡セル實祿ノ補充ヲ與ヘザルベカラズ、而シテ當時未ダ曾テ歐羅巴ノ土地買上規則即チ土地讓渡ノ法ヲ知ラズト雖ドモ、其事自然ニ行ハレ敢テ苦情ノ起ルコトナカリシ。而シテ此士族ハ其賠償トシテ金員ヲ受ケタリ、但シ其賠償額ハ從前受領シタル米祿(石高ニ依リ)ノ多寡ニ從ヒテ等差ヲ定メタリ。米石ノ價值ハ今日尙諸地租ノ根基タリ。第三ニハ全國維持ノ爲メ軍兵及ビ軍艦ヲ創設セザルベカラズ、此一難問ヲ解クニ兩道アリキ。即チ一方ニハ英國ノ資本ヲ借入シ、一方ニハ内國債ヲ募リテ以テ國債ヲ統一セシコトヲ以テ其一トス。當時倫敦ニ於テ日本國債券ノ相場ハ百ニ對シ凡ソ百二十ノ割合ナリ。次ニ又獨立ノ稅法ヲ設ケタルヲ以テ其二トス。而シテ稅法ヲ新定スルニ當リテ米租ノ舊制ヲ參酌セシハ固ヨリ自然ノ理ニシテ、此新稅法タルヤ唯現行ノ米租ヲ一定ノ地租ニ改メタルニ外ナラズ是レ理財學ニ大ナル裨益ヲ與フルヲ以テ、吾人其顛末ヲ詳論セント欲スレドモ本編ニ於テハ左ノ二件ヲ述ルニ止ラザルヲ得ズ。即チ第一ニ總ベテ從來ノ米納ヲ金納ニ更革シタル事、及ビ第二ニ地租稅賦課ノ爲ニ地券大帳ヲ編製シタル事是レナリ。其地券大帳ハ町村ノ協力ニ依リ速カニ全國ニ實行セラレ、爾後許多ノ改正ヲ經テ今尙現行ス。地租條例ハ地方官及著者ノ假リニ命名スル郡令ニ達セル令條ト共ニ千八百七十三年全國ニ公布セラレタリ。此際凡ソ開墾シタル土地ハ各所有主ニ屬シ、未ダ開墾セザル土地ハ之ニ反シテ政府ニ屬スベシ。

(官有地) トノ原則ヲ履ミタリ。是レ米國ノ制ニ模倣シタルコト疑ナシトス。然リ而シテ寺院學校、道路等ニ屬スル土地ハ佛國ノ例ニ倣ヒ之ヲ官有地ニ算入セリ。又、其ノ地租ハ既開ノ地(私有地)ニ課シ、其額ハ收入ノ多寡ニ依リテ定ルニアラズシテ米作ノ收穫ニ從ヒテ起草シタル地價ニ基ヅキ即チ此地價百分ノ二ケ半ヲ以テ地租額ト定メタリ。是レ後ニ至リ不足ヲ告グルハ明カナレドモ、唯其基礎ヲ定メタルノミ。夫レ此新租ハ新政府ノ需用ニ應ズルニ足ラズシテ船舶ニ課シタル小稅(一千八百七十一年以來)ノ如キハ未ダ以テ缺乏ヲ充タスニ足ラズ。當時國ノ信用尙薄弱ニシテ、之ニ加フルニ薩摩ニ於テ固キ根據ヲ有シタル士族ノ抵抗猛烈ニシテ、國力ノ平穩ナル發達ヲ防碍シタルヲ以テ、政府ハ新ニ金札ノ通用ヲ許サザルベカラザルニ至レリ。而シテ當時人々皆知了セシ如ク、曩時政權ヲ有シタル種族ノ殘徒ト社會トノ爭鬪ヲ鎮定スルニアラザレバ、國力ノ養成開達ニ着手スルニ由ナカリキ。故ニ此爭鬪止ミテ後始メテ眞ノ財政ヲ興起スル事ニ思慮ヲ運ラヌヲ得タリ。

千八百七十七年士族ノ騷亂及其鎮定ヲ以テ日本ノ財政ニ第二ノ重要ナル時期ヲ創メタリ。今此時期ヲ一々詳論スルハ大ニ裨益アルコトトス。而シテ吾人此ニ亦二個ノ事實ヲ冒頭ニ掲ゲ來ラバ苟クモ財政ノ問題ヲ以テ事トスル人ハ皆能ク吾人ノ主旨ヲ理解ス可シ。其事實トハ國ノ爲ニ重要ノ關係アルコト遠ク財政ノ外ニ超出スルモノニシテ、且ツ日本ガ前十年間ニ幾千ノ經驗

ヲ爲シタルカヲ明カニスルニ足レリ。即チ千八百七十七年ニ於テ政府ハ大ニ悟ル所アリテ、是ノ時ヨリ以來國家經濟ノ事皆古來ノ慣例ニ悖ラザルヲ主トシ、民間ノ實情ヲ參酌シテ以テ官治ノ財政ト自治ノ財政ヲ嚴ニ區畫分別セリ。

凡ソ財政ノ組織機關ハ畢竟一國行政ノ組織機關ヲ以テ其基礎トナシ、而シテ行政ヲ明カニスルニ非ザレバ到底財政ヲ了解スルコト能ハザルベシトノ原則ハ今日ニ於テ人々皆能ク了知スル所ナリ。抑々日本ハ其士族ヲ壓伏スルマデハ、純然タル無限君主制タルニ外ナラザリシト雖ドモ、帝室ハ未嘗テ無限政治ヲ以テ其國是トナサズ。故ニ社會ノ秩序漸ク安固ニ趣クヤ、皇帝ハ猶豫セズシテ内治ノ改良ニ着手セリ。即チ佛國ノ例ニ模倣シテ全國ヲ數多ノ獨立自治ノ縣ニ分チ、中央ノ行政ヲ之ニ分任シ、各縣ノ長トシテ恰モ佛國ブレフエクトト同一ナル縣令ヲ設置セリ。而シテ一縣内ニ於テハ英國ノ制ニ則リテ更ニ郡區ノ差別ヲ設ケタリ。斯クノ如クシテ舊藩諸侯ノ領地ニ代ルニ縣及之ニ屬スル郡區ノ制ヲ以テシ、其集權ノ甚シキハ猶佛國ノ革命時代ニ於ケルガ如シ。同時ニ又縣令ニ副ヘテ縣會ヲ組織セリ。是レ蓋シ佛國ノ模範ヲ採リタルモノナルベシ。縣令ハ毎年其縣會ニ全縣ニ係ル歲出豫算案ヲ提出シテ以テ之ヲ審議セシメ、其議決ハ内務大藏兩卿ニ呈出シ、之ヨリ更ニ縣令ニ下付ス。而シテ後其歲出ヲ辨ゼンガ爲メニ必要ナル租稅ハ郡長ニ於テ之ヲ徵收ス。當初全國自治制ノ財政ニ對シテ特別ノ稅則ヲ制定セザル可カラ

ザリシハ勿論、且ツ其稅則タル專ラ直稅ニ據ラザル可カラザリシハ蓋シ實際已ムヲ得ザルノ勢ナリキ。是ニ於テ其稅則ハ全ク中央政府ノ地租ニ由テ左右セラレタリ。但シ其充分實行セラルルノ期ニ達セシハ舊士族ノ討平後ニアリタリ。既ニ其目的ヲ達スルヤ地租ニ二様ノ制ヲ生ジ、之ト共ニ實際二種ノ行政法ヲ施行シ、即チ千八百七十八年ヲ以テ地方稅ノ制ヲ施行シタル以來二者相並ビ行ハレタリ。然リト雖ドモ日本ハ之ガ爲ニ恰モ千七百九十一年ノ佛國政府ニ於ケルガ如キ惡結果ヲ見ルニ至レリ。

地租ノ改正ヲ以テ財政ノ需要ニ應ゼシメン事ハ、當時日本一般ニ希望シタル所ナリシカドモ、日本ハ農業ヲ以テ無二ノ財源トナスノ國ニシテ、從來ノ稅則一ニ土地ニ根據スル事ニ就テハ當時東京ニ於テ之ヲ知ルモノ多カラザリキ。然レドモ政府ノ銳意鞠躬シテ舊時ノ不經濟ナル餘物ヲ討盡シ、大ニ内地改良ニ從事スルニ至リテ、地租ノ外ニ收益稅ヲ要シ收益稅アレバ又間稅ナカル可カラザルコトヲ認知シタリ。斯クノ如クシテ千八百七十九年以來日本國ニ新ニ起リタル財政ノ發達ハ我理財學ニ取テ極メテ有益ナルモノトナレリ。即チ日本稅制ノ兩原則タル中央政府ノ租稅ト地方稅トノ殆ンド完全ナル稅法ニ發達シタルコト是レナリ。

吾人ハ其事ノ頗ル裨益アルニモ拘ハラズ、一々之ヲ詳論スルコト能ハザルハ獨リ遺憾トスル所ナリ。然レドモ總テ課稅ノ條規其發達及其收入ノ増加ニシテ果シテ國威ヲ進陸發達セシムル

ニ有効ナルモノトセバ、此二派ノ稅則ハ日本ガ既ニ十分歐羅巴諸國ノ活劇ニ參伍シタルヲ示スモノト謂フ可シ。

抑モ千八百七十八年ハ日本財政ノ沿革ニ甚ダ重要ノ關係アル時期ナリシ。即チ此年ニ於テ一方ニハ従前ノ租稅ヲ再興改良シ、一方ニハ全ク之ヲ新設創置シ、以テ地租ノ外ニ收益稅及消費稅ノ法ヲ設ケタリ。已ニ千八百七十八年ニ於テ先ヅ煙草稅ナルモノヲ創設シ、千八百八十二年更ニ之ヲ改正セリ。此稅ハ煙草賣捌人ニ課スルモノニシテ、千八百八十三年ニ至リ始メテ之ヲ確定整理シ、其營業免許ヲ三等ニ分テリト雖ドモ、包束ニ製シタル煙草ニハ亞米利加ノ主義ニ基キ帶封印紙ヲ以テ特別ノ稅ヲ課セリ。酒類稅ハ千八百八十年ノ法律ヲ以テ日本火酒（酒）ノ製造ニ課シタルモノニシテ、千八百八十二年ノ法律ヲ以テ更ニ改正ヲ加ヘ、之ヲ三等ニ分テリ又英國ノ模範ニ依リ釀造稅ヲ施行シタレドモ、是レ惟々麥酒釀造稅ニシテ、千八百八十年ノ法律ヲ以テ定ムル所トス。之ニ次ギテ賣藥營業人及歐羅巴ノ藥舖ニ類スルモノニハ一ハ營業免許料一ハ帶封印紙ヲ以テ課稅シタリ。（已ニ千八百七十八年以來之ヲ創メ現今更ニ改正セリ）船舶稅モ亦千八百七十八年同ジク改正ヲ加ヘ、同年驛傳馬車營業及運輸營業ノ課稅ヲ設ケ鑛山條例ヲ發布シテ借區稅ヲ課セリ。（五百坪ニ付一圓五十錢ヲ一位トス）然リ而シテ一切ノ商業會社ニ課稅シタル事ハ前ニ列舉シタル諸稅ヨリ一層重要ノモノニシテ、蓋シ商業會社ハ舊時ニ於テ恰

モ日耳曼ノ同業組合ト同一ノ地位ヲ有スルモノナレバ、吾人ハ爰ニ之ヲ詳論セズ。然レドモ該會社ノ沿革ヲ明ニスルハ實際上必要ニシテ、又歴史ニ取リテモ有益ノモノナレバ、他日一ト度ビ之ヲ論ズルコトアル可シ。爰ニハ只從前ノ組合會社ハ猶獨逸ノ組合ニ於ケルガ如ク、諸藩ノ獨立自治政ヲ行ヒタルニモ拘ラズ、全國ニ布衍シ、其組織構成自ラ一定翕合シタルモノアリテ且ツ諸藩相互ノ交際ニ於テ殆ンド無二ノ媒介者トナリシコトヲ記スルヲ以テ足レリトス。

之ガ爲ニ漸次商業上ノ專賣權ヲ生ジタルハ自然ノ勢ニシテ、是ヨリ租稅ヲ徵スル諸藩ニ對シテハ其專賣權甚ダ便益ナリシガ、千八百六十八年諸藩ヲ廢スルニ及ビテ從前會社ノ享有シタル特權ノ地位モ今ヤ亦消滅ニ歸シ、政府ハ已ニ千八百六十九年ニ於テ全國内ノ商業ニ自由營業ヲ布告セリ。此事タル當初商業ノ一大瓦解ヲ招致セシハ蓋シ已ムヲ得ザルナリ。然レドモ商業ハ資本ト舊商人ノ知略ヲ缺ク可カラザルモノナルヲ以テ、千八百七十一年ニ至リテ政府ハ專ラ商業會社ヲ再興挽回セシメンコトニ着手セリ。是ニ於テ特別ノ商業稅條例ヲ制定シ、千八百七十九年ノ布告ヲ以テ之ヲ施行セリ。條例ハ日本ニ創立セル銀行ノ組織ト相關スルモノナリ。而シテ千八百八十二年仲買商規則ヲ設ケテ之ニ稅ヲ課シ、以テ米穀仲買商ト貨幣仲買商ヲ區別シ、其營業稅ハ免許料ノ體裁ヲ以テ之ヲ納メシメタリ。其詳細ハ別ニ精密ニ記述スルニアラザレバ之ヲ知ルコト能ハズト雖ドモ、條約改正ニ依リテ日本ニ於テ歐羅巴ノ商業ヲ認許セラルル

ノ期ニ至テハ其事實際ニ於テ極メテ緊要ナルヲ證スベシ。其他二三ノ營業稅ニ關スル規則ハ爰ニ之ヲ省略ス。然ルニ此營業稅ノ外ニ獨立ノ稅法即チ手數料ノ制アリテ迅速ナル發達ヲ爲シタリ。即チ歐羅巴ニ於ケルニ派ノ原形、詳ニ之ヲ言ヘバ裁判費用ト眞ノ印紙稅トニ關シテ精密ナル規律ヲ設ケタリ。而シテ其法律ニ據レバ、證券野紙ト商人會計簿ノ貼用印紙トヲ判然區別セリ。凡ソ此等ノ法律ハ僅々二三年ノ間ニ於テ歐羅巴ノ商業ニ對シテ著大ノ影響ヲ與ヘタリ。右ニ列舉シタル間稅及營業稅ニ地稅ヲ合スレバ千八百七十八年以來日本ニ於テ發達シタル國稅ノ全般即チグツビン氏ノ所謂「ナシヨナルタツキスレ」ヲ窺フコトヲ得ベシ。而シテ千八百八十三年乃至八十四年ノ歲出入豫算案ニ依レバ觀察ヲ下スベキ事件數多アリト雖ドモ吾人爰ニ悉ク之ヲ論ズルヲ得ズ。但シ其全體ノ成績ヲ示セバ、歐羅巴ノ注意ヲ喚起スルニ於テ既ニ十分ナリトス。

千八百七十年以來國稅法ノ全體ノ成績ハ歲入ニ非常ノ増加ヲ現ハシタルヲ見テ之ヲ知ルベシ。抑モ租稅收入ノ總額ハ千八百七十九年度ノ決算ニ依レバ五千二百二十萬二千八百二十九圓トス（壹圓ハ壹佛ニ當ル）然ルニ千八百八十三年度ノ歲出入豫算案ニ於テハ總額七千〇二十五萬六千七百二十圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレバ千九百萬弗ノ増加トス。地租ハ千八百七十九年度ニハ四千百萬圓、千八百八十三年度ニハ四千三百萬圓ヲ占メタリ。此増加ハ肥沃ノ地ヲ開拓シタ

ルニ基クモノトス。煙草税ハ三年ニ於テ三倍ノ増加ヲ爲シタルニモ拘ラズ（千八百七十九年度ニハ三十四萬八千六百七十四圓）千八百八十三年度ニハ僅ニ九十七萬四千九百九十九圓ノ收入ニ止マレリ。火酒税ハ千八百七十九年度ニ於テ四百五十萬七千三百七十二圓ニ過ギザリシガ、千八百八十三年度ニハ千六百七十一萬千六百三十五圓ノ驚クベキ巨額ニ登レリ。即チ三年ニ於テ凡ソ千二百萬圓ノ増加ヲナセリ。是レ實ニ日本ニ取リテハ一大功業ト謂フベシ。關稅ハ千八百七十九年度ニハ二百十八萬千三百十圓ニシテ、千八百八十三年度ニハ二百六十萬〇三百三十圓ニ上レリ。是亦今日ノ事情ニ於テハ尙甚ダ善良ナリト謂フベシ。其他日本ニ於テ最モ着シク振起勃興シタルモノハ郵便事務トス。是レ上文ノ諸税ト齊シク新政府ノ創造ニ係ルモノニシテ、千八百七十九年度ニハ僅々百〇五萬圓ヲ收入スルニ止マリシモ、三年ノ後ニ於テハ二百二十五萬圓ヲ超ヘルニ至レリ。日本ニ於テ事物ノ進歩スルヤ夫レ此ノ如ク迅速ナリ。

然リ而シテ爰ニ最モ奇異ニシテ深ク觀察注目スベキモノハ日本商業ノ事情トス。即チ商社稅收入千八百七十九年度ニ於テ五十萬圓ニシテ、千八百八十三年度ニハ五十萬六千五百八十八圓餘ナリシニモ拘ハラズ、貨幣兩替商ノ稅ハ千八百七十九年度ニ於テ未ダ其痕跡ヲモ見ザリシニ千八百八十三年度ニ於テ突然九十三萬二千九百五十六圓ニ下ラザル收入アリタリ。此數ハ營ニ増加ヲ示スノミニ止ラズ、日本ニ於ケル商業貿易上ニ一大變動ヲ來シタル所以ヲ知ラシムルモノトス。

以上ハ中央政府財政ノ要領ヲ述ベタルモノナリ。之ニ地方自治ノ財政ヲ添加スルトキハ又他ノ頗ル有益ナル事件ヲ知得スベシ。

新政府ノ意志ハ廢藩ノ舉ヲ斷行シタル時ヨリシテ舊法古制ヲ悉ク政府ノ中心ニ收攬セント欲シタルニアラズト雖ドモ、如何セン地方自治ニ對シテ殆ンド一モ法制規律ナク、加之其慣習スラ之ナキニ因リテ新ニ之ガ法律ヲ設ケテ其基礎ヨリ構成セザルヲ得ザリキ。吾人ハ爰ニ一々之ヲ論ズルコトヲ措クト雖ドモ、此點ニ於テモ亦一目ノ下ニ稅法ハ諸行政ヲ組織スルノ基本トナルコトヲ了得スベシ。故ニ日本政府ガ地方自治制ヲ起シテ其獨立ノ自動ヲ振作スルヤ主トシテ地方稅ノ制ヲ設定セリ。

是故ニ日本ノ法律ハ千八百七十八年以來同時ニ此二事ヲ制定シ、今ヲ距ルコト五年前ニ於テ已ニ英獨二國ノ制ニ類スルモノヲ施行セリ。而シテ其府縣會ニ委任シタル政務ノ主トナルモノハ教育、地方警察、囚獄及救貧ノ諸事是レナリ。其會計豫算ハ地租割稅及家屋稅（家ノ面積ニ從テ之ヲ算定ス）及營業稅ナル三種ノ地方稅ニ基クモノトス。吾人ハ地方自治體ノ負擔スル其他ノ責務、例ヘバ巨額ヲ要スル道路費及衛生費ノ如キハ一々之ヲ論ジテ我讀者ヲ煩ヌヲ欲セザルナリ。惟々爰ニ注意スベキハグツビン氏ガ此地方稅ノ總額ヲ千四百萬圓ト算定シタルコト是

レナリ。予ヲ以テ之ヲ觀ルニ千八百八十三年公立學校ノミニテモ七百萬圓餘ヲ需用シタルガ故ニ、總額千四百萬圓ハ甚タ寡少ニ過グル算定ナリト言ハザルヲ得ズ。

國稅ト地方稅トハ上文ニ述ベタル如ク相併ヒ行ハレタリ。而シテ此稅ノ賦課徵收及其他ノ執行法ニ就テハ千八百七十九年以來周密ナル規律ヲ設ケタリ。此事ニ對シテグツビン氏ノ報告中其一ニ示シタリ。

以上列舉シタル事ハ悉ク五年以内ニ起レルモノナリ。顧フニ吾人ハ他日一タビ該金額ノ使用ニ就キ聊カ論說スベキ時機ヲ得ルコトアルベシ。而シテ以上列舉シタル事實ハ吾人ヲシテ彼ノ日本ヲ以テ東亞細亞ノ自餘ノ諸國ト同一視セント欲スルノ人ヲ怪マシムルニ餘リアルベシ。是レ敢テ過當ノ言ニアラザルベシ。況ンヤ此日本帝國ヲ處スルニ東亞細亞ノ自餘ノ諸國ト同等ノ方法ヲ以テセントシ、甚シキニ於テハ一偶ニ壓排セントスル人ノ如キ誠ニ論ズルニ足ラザルナリ。

從明治八年至同十七年 物價并弗相場職工賃錢表

自明治八年至同十七年 物價并職工賃銀表 (京都府)

種目	數量	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
米	一石	五圓六〇〇	四圓七〇〇	五圓三〇〇	六圓九〇〇	八圓四〇〇	一〇圓三〇〇	九圓九〇〇	九圓〇五〇	五圓〇二五	五圓八七〇
大麥	〃	二〇〇〇	一六五〇	三九〇〇	三九〇〇	三八〇〇	三六〇〇	三六〇〇	二五八〇	二三五〇	二五五〇
大豆	〃	八〇〇〇	六八〇〇	六六五〇	七二〇〇	九〇〇〇	九三五〇	九三〇〇	九三〇〇	五三六五	四〇〇〇
小豆	〃	六三〇〇	七二〇〇	六二〇〇	七三〇〇	八〇〇〇	九二〇〇	九三〇〇	八五〇〇	一一〇〇〇	四〇〇〇
茶	五貫匁	一九五〇〇	二〇〇〇〇	二六〇〇〇	二七〇〇〇	一九〇〇〇	三三〇〇〇	三二〇〇〇	二〇八三〇	一八〇一	四三五
酒	一升	一〇〇	〇九〇	〇九〇	一〇〇	一一〇	一二〇	一二五	一二五	一〇九	一〇〇
味噌	一斤	〇三三	〇四〇	〇四九	〇三三	〇三三	〇三八	〇三五	〇三五	〇四四	〇四三
醬油	一升	〇三三	〇三三	〇三〇	〇三〇	〇三〇	〇三八	〇三〇	〇三〇	〇四五	〇四〇
炭	一俵	四一〇	四二〇	四〇〇	四三三	五九〇	五四三	五一六	五七〇	四六五	四五〇
薪	一把	〇三八	〇三三	〇三八	〇五二	〇六五	〇九五	一〇五	〇九八	〇六〇	〇五五

物價并弗相場職工賃錢表

水	油	鹽	甘藷	豆腐	鯉節	白木綿	半紙	大工	左官	建具師	土方	染工上	染工中	染工下	織工上	織工中	職工中	職工下
一升	一升	一升	一斤	一個	百目	一端	一束	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人	一人
一三五	二〇五	〇三三	〇〇三	〇〇八	一七五	四七五	二四二	三三二	二七〇	一五〇	一八〇	一一〇	〇六五	〇六五	〇四五	二一〇	一七〇	〇四五
二〇五	三三五	〇一〇	〇〇三	〇一〇	一六五	四〇〇	一八二	二五〇	二七〇	一五〇	一八〇	一一〇	〇六五	〇六五	〇四五	二一〇	一八〇	〇四六
三三五	二八五	〇三三	〇〇六	〇一〇	一七〇	三七五	二四二	二八〇	二九〇	一五〇	一八〇	一一〇	〇六五	〇六五	〇四五	二一〇	二〇〇	〇九〇
二八五	三三八	〇二八	〇〇四	〇〇八	一五五	四五〇	二四四	二二〇	二七〇	一八〇	一八〇	一一〇	〇九〇	〇九〇	〇五〇	二八〇	三三〇	〇九〇
三三八	三三九	〇五〇	〇〇六	〇〇八	一七〇	五〇〇	二四八	二八〇	二七〇	一八〇	一八〇	一一〇	〇九〇	〇九〇	〇五〇	三〇〇	二四〇	〇九七
三三九	四二七	〇四七	〇一六	〇一〇	二六八	六〇〇	二四三	三六〇	三六〇	一八〇	二二〇	一一〇	〇八〇	〇八〇	〇五五	三〇〇	二五〇	一一〇
四二七	二五七	〇四九	〇一五	〇一〇	三三二	六七五	二七一	四三五	四四〇	二〇〇	三〇〇	一五〇	〇八五	〇八五	〇六〇	三〇〇	二五〇	一〇〇
二五七	一七〇	〇三七	〇〇九	〇一〇	二〇九	六〇五	二六四	四三五	四四〇	二五〇	二八〇	一一〇	〇九〇	〇九〇	〇七五	三〇〇	二五〇	一〇〇
一七〇	〇一〇	〇一四	〇〇八	〇〇八	一六六	三八〇	一三四	三五〇	三七五	二五〇	三〇五	一一〇	〇九〇	〇九〇	〇五〇	一八〇	一五〇	〇五〇
一五五	〇一〇	〇〇八	〇〇八	〇〇八	一五五	三七〇	一三〇	三〇〇	三〇〇	三五〇	二九〇	一〇〇	〇九〇	〇九〇	〇五〇	一八〇	一五〇	〇五〇

從明治八年西陣織物製產金額表
至同十八年

年次	一ヶ年金額	增減前年比較
明治八年	三百七十萬五千七百圓	
同 九年	三百三十貳萬四千四百六十五圓	減三十八萬二千二百九十三圓五錢
同 十年	五百二十八萬八千七百九十六圓	增百九十六萬四千三百八十九圓五錢
同 十一年	七百四十三萬三千九十圓	增二百十四萬四千二百九十四圓
同 十二年	七百八十四萬二千二百八十圓	增四十萬九千九百九十圓
同 十三年	一千二萬四千二百二十五圓	增二百十八萬千八百四十五圓
同 十四年	八百三十八萬三千九百二十五圓	減百六十四萬百九十五圓
同 十五年	五百八十七萬六千六百四十圓	減二百五十萬七千二百九十圓
同 十六年	三百六十九萬三千七百八十五圓	減二百十八萬二千八百五十五圓
同 十七年	三百七十四萬三千七百九十八圓	增五十萬十三圓
同 十八年	八十一萬二千七百五十四圓八十八錢	—

從明治八年 粟田燒陶器製産金額表
至同十八年

明治八年	五萬二千圓	
同 九年	七萬五千圓	增二萬三千圓
同 十年	八萬五千圓	增一萬圓
同 十一年	九萬八千圓	增一萬三千圓
同 十二年	十二萬五千圓	增二萬七千圓
同 十三年	十一萬圓	減一萬五千圓
同 十四年	九萬圓	減二萬圓
同 十五年	八萬七千圓	減三千圓
同 十六年	七萬圓	減一萬七千圓
同 十七年	四萬五千圓	減二萬五千圓
同 十八年一月ヨリ五月マデ	二萬圓	

從明治八年 五條清水燒陶磁器製産金額表
至同十八年

明治八年	五萬一千圓	
同 九年	四萬三千二百圓	減七千八百圓
同 十年	七萬二千圓	增二萬八千八百圓
同 十一年	十萬六千四百五十圓	增二百四千四百五十圓
同 十二年	十四萬六千四百圓	增三萬四千百九十圓
同 十三年	十一萬三千四百圓	減二萬七千二百四十圓
同 十四年	十萬五千六百圓	減七千八百圓
同 十五年	八萬百五十圓	減二萬五千四百五十圓
同 十六年	六萬四千七百五十圓	減一萬五千四百圓
同 十七年	四萬一千圓	減二萬三千七百五十圓
同 十八年一月ヨリ五月マデ	一萬二千二百圓	

從明治八年至同十七年陶器價格表

(但中等品)

品目	年次	八月	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年
桑付三合入白瓶	六月八日 七月五日	一八〇	一九五	二〇〇	二〇〇	二〇七	二四〇	二七〇	二八〇	二四〇	二〇〇
平形飯茶碗	六月八日 七月五日	一八〇	一九五	二〇〇	二〇七	二〇七	二四〇	二七〇	二八〇	二四〇	二〇〇
煖德利	六月八日 七月五日	五五	六〇	六五	六〇	六三	六三	六三	六〇	五五	四七
猪口	六月八日 七月五日	三〇	三二	三三	三三	三六	三八	三七	三六	三〇	三五
中急須	六月八日 七月五日	四四	五〇	五五	六〇	六五	六五	六七	六五	五五	四五
煎茶碗	六月八日 七月五日	八六	九一	九六	九九	一〇四	一〇五	一〇六	一〇六	一〇五	一〇〇

年次	洋銀一弗	六月	十月	十二月
明治八年	同	一四	〇〇五	〇〇三
同九年	同	一	〇〇〇	九九六
同十年	同	〇	九九三	九九八
同十一年	同	一	〇七〇	一一五
同十二年	同	一	一一〇	一四二
同十三年	同	一	三五〇	六三〇
同十四年	同	一	六二七	七〇二
同十五年	同	一	五四八	三九四
同十六年	同	一	三二九	一一二
同十七年	同	一	〇六六	一六七

十六年度	
風災費	神奈川縣廳燒失ニ付需用物品購買費 福井縣地租改正書類燒失ニ付新調費 陸軍省ニ於テ暴風雨ノ際死亡及負傷者へ下賜金 一、〇五五〇〇〇
水害費	熊本縣水害ノ爲メ官吏派出等ノ諸費 六、七七八六一九
火災費	福井縣廳大災ニ罹リ烏有ニ屬シタル地券臺帳再調費 愛知縣官林出火ニ付消防夫雇入等ノ諸費 六六八〇
風災費	千住製絨所器械新調費 神奈川縣廳燒失セシニヨリ備付品再調費 三、三七〇〇〇〇
風災費	八、〇〇〇〇〇〇

十七年度	
水害費	函館縣廳其他風損ニ付修繕費 五二五、七一〇〇〇
水害費	岡山縣外六縣水害土木費補助 四八九、四六一〇〇〇
火災費	熊本縣水害ノ爲メ官吏出張等ノ諸費 一、四五〇〇〇〇
火災費	東京師範學校々舎火災ニ罹リ再築費 三六、二五〇〇〇〇
水害費	四六五、二六六一八五
水害費	四三八、〇七八一八五
水害費	四三三、六六六〇〇〇
水害費	京都府外十二縣下水害土木費補助 四、四二二一八五
火災費	神奈川外十六縣水害等ノ爲メ官吏出張諸費 二七、一八八〇〇〇
火災費	東京師範學校々舎火災ニ罹リ再築費 二七、一八八〇〇〇

十九年度	水害費	火災費	風災費
二九九、五七六二〇〇	各府縣暴風雨水害ノ爲メ堤防修築補助費	東京師範學校々舎火災ニ罹リ再築費	沖繩縣各社寺暴風ノ爲メ破損修繕費
二八九、五一四二〇〇	德島縣廳ニ於テ燒失器具再調費	德島縣廳ニ於テ燒失器具再調費	千住製絨所火災ニ罹リ修築及器械購入費
一〇、〇六二〇〇〇	栃木縣和歌山兩縣廳火災ニ罹リ器具器械等新調費	栃木縣和歌山兩縣廳火災ニ罹リ器具器械等新調費	岐阜縣水害ノ爲メ堤防再築修補費
九、〇六二〇〇〇	青森縣水害ノ爲メ家屋流失田圃損害等ノ爲メ補助費	青森縣水害ノ爲メ家屋流失田圃損害等ノ爲メ補助費	岐阜縣水害ノ爲メ官吏出張先キ臨時事務所ニ充タル家屋借料
五、一八七五九〇	岐阜縣下各川漲溢堤防破損等ノ爲メ官吏出張ノ諸費	岐阜縣下各川漲溢堤防破損等ノ爲メ官吏出張ノ諸費	德島縣洪水及海嘯ノ爲メ堤防消除ヲ破壞セシ等ニテ官吏出張諸費
五、一八七五九〇	和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購入費	和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購入費	大野治安裁判所燒失新營費
四二四、一一七五七〇	大野治安裁判所燒失新營費	大野治安裁判所燒失新營費	橫須賀造船所旋盤工場及模型所火災燒失ノ爲メ新築及諸器械等購買費
	東京岡山兩遞信管理局及東京郵便局燒失ニ付新築費	東京岡山兩遞信管理局及東京郵便局燒失ニ付新築費	
	震災費	震災費	
	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	

二十一年度	水害費	火災費	震災費
一七四、二二四〇〇〇	岐阜縣水害ノ爲メ破壞セシ堤防道路橋梁等ノ修築費	岐阜縣水害ノ爲メ堤防再築修補費	青森縣水害ノ爲メ家屋流失田圃損害等ノ爲メ補助費
九八、九九〇〇〇〇	岐阜縣水害ノ爲メ官吏出張先キ臨時事務所ニ充タル家屋借料	岐阜縣水害ノ爲メ官吏出張先キ臨時事務所ニ充タル家屋借料	岐阜縣下各川漲溢堤防破損等ノ爲メ官吏出張ノ諸費
七〇、〇〇〇〇〇〇	德島縣洪水及海嘯ノ爲メ堤防消除ヲ破壞セシ等ニテ官吏出張諸費	德島縣洪水及海嘯ノ爲メ堤防消除ヲ破壞セシ等ニテ官吏出張諸費	和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購入費
二、五二八〇〇〇〇	和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購入費	和歌山縣廳火災ニ罹リ器具器械等購入費	大野治安裁判所燒失新營費
二、二〇〇〇〇〇〇	大野治安裁判所燒失新營費	大野治安裁判所燒失新營費	橫須賀造船所旋盤工場及模型所火災燒失ノ爲メ新築及諸器械等購買費
九〇、〇〇〇〇〇〇	東京岡山兩遞信管理局及東京郵便局燒失ニ付新築費	東京岡山兩遞信管理局及東京郵便局燒失ニ付新築費	
四一六〇〇〇〇	震災費	震災費	
二四三、五〇〇〇三〇	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	
六、七六五二〇〇	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	
六、七三四八三〇	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	
一〇〇、〇〇〇〇〇〇	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	
一三〇、〇〇〇〇〇〇	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	
六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	六、三九三五四〇	

二十二年 度	水害費	福島縣下那麻郡磐梯山ノ潰裂ニ依 リ水路修繕費 同上ニヨリ救助治水等ノ爲メ出張 旅費等ノ臨時費	三、八七一〇〇〇 二、五二二五四〇
	水害費	各府縣水害土木費補助	一、六二〇、一三六二七〇
	水害費	各府縣水害ノ爲メ出張諸費	一、五六八、〇七四八六五
	水害費	愛知縣下大演習ノ際暴風雨ノ爲メ 破損セシ土木費補助	二八、七〇三二九四
	水害費	木曾大井兩川出水ニ付水制費	一〇、〇〇〇〇〇〇
	火災費	伊豆國大島ニ設置ノ犯罪人留置場 燒失ニ付新築費	一三、三五八一一一
	火災費	同國新島村火災ニ罹リタル窮民救 助費	一〇三、六一五六七八
	火災費	帝國大學寄宿舎燒失ニ付新營及物 品新調費	七七〇〇〇
	火災費	國府臺教導團兵營燒失ニ付新築費 等	一、七一二七九七 二三、四一二一三〇 七八、四一二七五一

二十三 年度	風災費	長崎及新潟消毒所暴風雨ノ爲メ修 繕費	九、三八五四〇一
	風災費	東京府外一縣同上ノ爲メ知事官舎 修繕費	一、一九二五〇八
	風災費	神戸税關暴風雨破損ノ爲メニ要ス ル修繕費	一六三七二四
	風災費	各裁判所暴風ノ爲メ同上	四八〇〇〇〇
	風災費	熊本縣震災ノ爲メ罹災實況取調費	七、五四九一六九
	風災費	同縣熊本城石垣及兵舎建物修繕費	三六、九〇五九一〇
	風災費	熊本始審裁判所修繕費	八〇四六六〇
	風災費	梁川治安裁判所修繕費	三四、〇三二八五〇
	風災費	熊本始審裁判所修繕費	一、九七五九五〇
	風災費	和歌山縣水害ノ爲メ土功監督費	九二四五〇
	水害費	和歌山縣水害ノ爲メ土功監督費	七九九、〇四四一〇一
	水害費	和歌山縣水害ノ爲メ土功監督費	七四八、〇〇〇五〇一
	水害費	和歌山縣水害ノ爲メ土功監督費	一五、〇〇〇〇〇〇

	司法省所管同上	二二、〇八三五六二
	遞信省所管同上	一六、二九七六三三
	震災地方救済及堤防費	二、二五〇、〇〇〇〇〇〇

明治十六年度俸給調

各 廳 金六百二十萬四千九百十四圓三十一錢一厘
 陸海軍兩省 金三百七十三萬九千三百二十八圓四十八錢一厘
 各 府 縣 金二百五十二萬六千二百二十八圓四十七錢六厘
 合 計 金千二百四十七萬三百七十一圓二十六錢八厘

明治十七年度俸給調

各 廳 金六百四十二萬三千五百三十一圓
 陸海軍兩省 金四百二十二萬三千五百八十二圓
 各 府 縣 金二百七萬五千五十三圓

明治十六年度俸給調

合計 金千二百七十二萬二千六百六十六圓

十六年度十七年度俸給調

十六年度俸給ハ十八年度豫算帳ニ掲クル實費額ニ據ル。

但十八年度豫算帳ニ就テ實費分リ難キ分ハ十六年度ノ豫算ニ據ル其件左ノ如シ。

宮内省 外國公館

大藏省ノ内 租稅局、關稅局、各稅關

農商務省ノ内 驛遞局中上海郵便局

府縣費

屬官俸給ハ府縣費据置臺帳ニ據ル

徵稅費俸給ハ十六年度豫算ニ據ル

史誌編輯費俸給ハ据置ナルニヨリ十四年度ノ決算額ニ據ル

十七年度ハ先般取調ノ豫算額ナリ。

自十六年度至廿二年度軍備皇張費

十六年度

一、金七百六十五萬圓

增稅其他ノ收入額

内

高金七百八十二萬三千六百六十圓

十五年度ニ比シ增稅豫算額

金六百二十六萬四千六百九十九圓

造石稅

内 金六十二萬五千五百二十五圓

烟草稅

金九十三萬二千九百五十六圓

仲買人稅

金七百五十萬圓

增稅額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

外金三十二萬三千六百六十圓

增稅徵收ノ費用ニ充ツベキ分

金十五萬圓

印刷局積金ノ内納付額

軍備皇張費

一、金六百八萬二千五百八十一圓四十一錢五厘

皇張費總額

內

金百五十萬圓

陸軍省費 兵員增加費

金十九萬三千三百五十圓十六錢一厘

東京灣砲臺建築費

外金四萬六千六百四十九圓八十三錢九厘

決算殘金

金三百六十二萬五千四百四十三圓七十八錢

軍艦製造費

外金七十五萬八千九百三十六圓十七錢六厘

決算殘金

金二十五萬圓

軍艦維修費

金四萬三千四百九十七圓七十五錢

(海軍) 火藥製造興業費

外金四萬三千五百四十三圓二十五錢

決算殘金

金二十六萬九千六百六十圓六錢四厘

軍人恩給、武官年金

外金七千六百六十五圓九十三錢六厘

決算殘金

金十五萬五千五百六十六圓

(陸軍) 村田銃及彈藥製造費

金四萬四千五百五十一圓五十四錢

(消軍) 扶桑天城兩艦航海費

金九百十二圓十二錢

(海軍) 兵器費 (十五年度へ納付セシ不
用銃器拂下代ニ對シ)

差引殘

金百五十六萬七千四百八十八圓五十八錢五厘

軍備部へ繰入

但繰入豫算額百八十一萬六千三百三十三圓内ニ比シ二十四萬八千七百十四圓四十一錢五厘減少ス。

十七年度

一、金七百六十八萬二千三百七十八圓九十六錢九厘

増稅其他收入額

內

高金七百八十七萬八千三百六十三圓

金六百三十六萬六千六百五十六圓

酒造稅

內 金百二十三萬九千五百二十六圓

烟草稅

金二十七萬二千八百八十一圓

仲買人稅

金七百五十萬圓

増稅額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

軍備皇張費

外金三十七萬八千三百六十三圓
金十八萬二千三百七十八圓九十六錢九厘

増税徴收ノ費用ニ充ツベキ分
軍備部ヨリ繰入

但十六年度砲臺建築費水雷局廳舎建築費仕拂殘返納ノ分及ビ砲臺建築費ノ内海岸砲代價
十九年度ヨリ繰上ヲ要スル分本年度軍當部繰入豫算ヨリ支出スベキ處不足ニ付軍當部ヨ
リ繰入ノ分

一、金七百六十八萬二千三百七十八圓九十六錢九厘

皇張費總額

内

金二百萬圓

陸軍省費 兵員增加費

金三十二萬千六百五十九圓七十一錢九厘

(東京灣) 砲臺建築費

金四百三十九萬七千八百六十八圓

軍艦製造費

金四十萬三千八百五十圓

軍艦維持費

金二十萬圓

(海軍) 水雷局廳舎建設費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金。軍人恩給。

金五萬千七百九十六圓

(海軍) 軍艦航海費

金四萬三千五百四十三圓二十五錢

(海軍) 火藥製造所建築費

差引殘金ナシ

十八年度

一、金二百五十九萬四千八百六十七圓

増税其他ノ收入額

内

金百三十三萬千九百八十三圓

増税額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

金ナシ

酒造税

金百二萬二千二百四十七圓五十錢

煙草税

但十五年度豫算月割額(九ヶ月分)ト十八年度豫算トノ差額増額

金三十萬九千七百三十五圓

仲買人税

金五十錢

切上増

金百二十六萬二千八百八十四圓

軍支部ヨリ繰入

但十八年度増税額不足ニ付軍支部儲蓄ノ内ヨリ繰入スベキ高

軍備皇張費

一、金六百三十九萬八百十三圓

皇張費總額

內

金三百萬圓

陸軍省經費(兵員增加及隊數增加費)

金二百十三萬三千三十四圓

軍艦製造費

金五十九萬九千二百六十四圓

軍艦維持費

金四十八萬九千四百六十三圓

東京灣(砲臺建築費)

金十六萬九千五十二圓

武官年金、軍人恩給

差引不足

金三百七十九萬五千九百四十六圓

十九年度

一、金七百六十二萬二千五百五十五圓六十一錢六厘

増税其他ノ收入高

內

金七百八十七萬八千三百六十三圓

金六百三十六萬六千六百五十六圓

酒造税(十七年度ト十五年度トノ比較ニヨル以下皆同シ)

內 金百二十三萬九千五百二十六圓

煙草税

金二十七萬二千八百八十一圓

仲買人税

金七百五十萬

増税額ノ内皇張費ニ充ツベキ額

外金三十七萬八千三百六十三圓

増税ニ係ル徵稅費ニ充ツベキ分

金十二萬二千五百五十五圓六十一錢六厘

軍當部ヨリ繰入

但十六年度ニテ軍備部へ繰入タル金額百五十六萬七千四百十八圓五十八錢五厘ノ内十七年度へ繰入タルモノ十八萬二千三百七十八圓九十六錢厘十八年度へ繰入タルモノ百二十六萬二千八百八十四圓共計百四十四萬五千二百六十二圓九十六錢九厘ヲ差引殘金本年度ニテ繰入ベキ分

一、金八百四十六萬千三百二十圓

皇張費總額

內

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金二百四十一萬四千七百十八圓

軍艦製造費

軍備皇張費

金七十九萬九千十四圓
 金九十七萬三千九百二十六圓
 金二十七萬三千六百六十二圓
 差引不足

軍艦維持費
 (東京灣)砲臺建築費
 武官年金、軍人恩給

金八十三萬九千六百六十四圓三十八錢四厘

十二年度

一、金七百五十萬圓

増稅收入額

内

高金七百八十七萬八千三百六十三圓
 金七百五十萬圓
 外金三十七萬八千三百六十三圓

(内譯其他十九年度ニ同シ)

増稅收入額

増稅ニ係ル徵稅費ニ充ツベキ分

一、金九百五十六萬七千五百五十三圓

皇張費總額

内

金四百萬圓
 金九十六萬五千二百二十六圓
 金三百三十三萬圓
 金九十九萬八千七百六十四圓
 金二十七萬三千六百六十二圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

(東京灣)砲臺建築費

軍艦製造費

軍艦維持費

武官年金、軍人恩給

差引不足

金二百六萬七千五百五十二圓

二十一年度

一、金七百五十萬圓

増稅收入額

(内譯二十年度ニ同シ)

軍備皇張費

一、金九百七十七萬二千九百二圓

皇張費總額

內

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金九十七萬七百二十六圓

(東京灣)砲臺建築費

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

金百十九萬八千五百十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金、軍人恩給

差引不足

金二百二十七萬二千九百二圓

二十二年度

一、金七百五十萬圓

增稅收入額

(內譯二十年度ニ同ジ)

一、金九百八十四萬八千七百七十一圓

皇張費總額

內

金四百萬圓

陸軍省費(兵員增加及隊數增加費)

金八十四萬六千八百四十五圓

(東京灣)砲臺建築費

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

金百三十九萬八千二百六十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金、軍人恩給

差引不足

金二百三十四萬八千七百七十一圓

二十三年度

一、金七百五十萬圓

增稅收入額

(內譯二十年度ニ同ジ)

一、金九百六十萬二千九十二圓

皇張費總額

内

金四百萬圓

陸軍省費(兵員増加及隊數増加費)

金四十萬四百十六圓

(東京灣)砲臺建築費外

外金十七萬四千八百二十四圓四十錢

廿四年度ニテ支出スベキ分

但十八年度ニテ月割(三ヶ月分)減額ノ分

金三百三十三萬圓

軍艦製造費

但十六年度決算殘金七十五萬八千餘圓ノ内銀貨交換差減ニ依ル員數五十二萬七千餘

圓ヲ除キタル殘額二十三萬二千餘圓ハ二十四年度ニ於テ交付スベキ計算ナリ。

金百五十九萬八千十四圓

軍艦維持費

金二十七萬三千六百六十二圓

武官年金、軍人恩給

差引不足

金二百十萬二千九十二圓

收入

合計金五千三百九十八萬千九百八十三圓

外金百五十六萬七千四百十八圓五十八錢五厘 各年度殘金ノ收入重複ノ計算ナレバ之ヲ除算ス。

支出

合計金六千七百四十萬八千四百十圓三十八錢四厘

比較不足

金千三百四十二萬六千四百二十七圓三十八錢四厘

十九年度郵便收入及支出總額比較

十九年度

郵便收入及支出總額比較

- 一、金二百二十六萬四千三百九十二圓五錢一厘
- 一、金二百二十九萬三千七百六十七圓九十四錢

比較

收入總額
支出總額

金二萬九千三百七十五圓八十八錢九厘

收入超過額

新聞紙雜誌ニ係ル收支比較

- 一、金十九萬七千七百六十九圓四十四錢
- 一、金四十八萬八千九百七十六錢九厘

比較

從前收入額但一個十六匁迄一錢
同 支出額

金二十九萬千二百七圓三十二錢九厘

支出超過額

- 一、金四十四萬五千二百六十七錢五厘
- 一、金五十萬九百二十八圓五十二錢五厘

比較

改正收入額但一個十六匁迄一錢
同 支出額

金五萬五千八百二十五圓八十五錢

支出超過額

一、金二十二萬二千五百五十一圓三十三錢七厘

改正收入額但一個十六匁迄五厘

一、金五十萬九百二十八圓五十二錢五厘

同 支出額

比較

金二十七萬八千三百七十七圓十八錢八厘

支出超過額

書籍見本收支比較 從前ノ分

一、金十萬三千四十九圓五十四錢六厘

從前收入但一個八匁迄二錢

一、金六萬二千三百八十八圓五十八錢四厘

從前 支出

比較

金四萬六百六十圓九十六錢二厘

收入超過額

一、金六萬三千七百四十三圓五十七錢七厘

改正收入額但壹個八匁迄一錢

一、金六萬二千六百七十三圓七十九錢

同 支出額

郵便收入及支出總額比較

金千六十九圓七十八錢七厘

收入超過額

郵便物平均一個當收入及支出額

種別	收		支		比較損益
	入	出	入	出	
書狀	二 <small>錢</small> 七 <small>厘</small> 一 <small>毛</small> 五 <small>糸</small> 六 <small>分</small>	一 <small>錢</small> 七 <small>厘</small> 八 <small>分</small> 四 <small>厘</small> 八 <small>毫</small>	一 <small>錢</small> 四 <small>分</small> 四 <small>厘</small> 三 <small>毫</small> 四 <small>絲</small>	九 <small>分</small> 三 <small>厘</small> 〇 <small>毫</small> 八 <small>絲</small>	九三〇八
葉書	一〇二 <small>九</small> 一 <small>分</small>	四 <small>分</small> 四 <small>厘</small> 三 <small>毫</small> 四 <small>絲</small>	四 <small>分</small> 四 <small>厘</small> 三 <small>毫</small> 四 <small>絲</small>	四 <small>分</small> 一 <small>厘</small> 四 <small>毫</small> 三 <small>絲</small>	四一四三
新聞紙雜誌	一	二	二	一	七六四二
書籍見本	四	六 <small>五</small> 四 <small>一</small>	二	八 <small>一</small> 七 <small>七</small>	八三六四

從來新聞雜誌ヲ郵送スル爲メ郵便經濟上損失ヲ受クルモノ別殘計算書ノ通り實ニ一ヶ年二十九萬餘圓ニシテ、殆ンド郵便經費總額ノ十分ノ一ヲ占ム。加之一般ノ新聞雜誌發行數逐次増加

シ、彼ノ運送至便運賃低廉ナル場所ニ達スベキモノハ發行人概ネ之ヲ自送シ、其郵送ニ付スルモノハ悉ク運送至難運賃不廉ナル場所ニ達スベキモノノミシテ、此等増加ノ割合ハ最近三ヶ年ノ平均ニ依レバ實ニ五分餘ナリトス。是レ皆郵便經濟ノ損失ヲ増嵩スル所ナリ。故ニ今新聞雜誌ノ運送ヲ郵便ノ專有ニ屬シ、彼ノ有餘ヲ以テ此不足ヲ補ヒ、即チ運送ノ便否經費ノ多寡ヲ平均シテ郵便ノ經濟ヲ維持セントス。是レ新聞雜誌ノ運送ヲ郵便ノ專有ニ屬スル事由ノ一ナリ。

從來ノ郵便稅新聞雜誌一個十六匁迄ニ付一錢ノ割合ヲ以テ今新タニ新聞雜誌ノ郵便專有ニ屬スル郵便増加ノ物數ニ對スル稅金ヲ推算スルニ金二十四萬七千三百三十三圓二十三錢五厘ヲ收入シ得ベシ。其内之レニ要スル郵便經費金一萬九千九百五十一圓七十五錢六厘ヲ扣除スルトキハ實ニ金二十三萬五千三百八十一圓四十七錢九厘ノ利益ヲ得ベク、乃チ此利益ハ從來損失スル所ノ彼ノ二十九萬餘圓ノ幾分ヲ填補スベキモノタル算當タリ。然レドモ猶且ツ其損失ノ全額ヲ償却スル能ハザルヲ以テ、一個稅金一錢ハ不當ノ算當ニアラザルナリ。

從來ノ稅金一錢ハ現今ノ新聞雜誌ノ原價低廉ナルヲ以テ其原價ノ割合ニ對シ甚ダ輕カラズ。且從來郵便經濟ニ於テ已ニ二十九萬圓ヲ損失スルモ、其損失將來増嵩スルノ患ナシトセバ、郵

便物體ノ經濟ニ於テハ稍收支相償ヒ以テ事業ヲ維持シ來リタルニ依リ之ヲ郵便ノ專有ニ屬シ、上來陳述シタル運送ノ便否運賃ノ多寡ヲ平均シ、彼此過不足相補フノ算則ヲ以テ彼ノ經費最モ多キ場所ニ送達スベキモノノ増加ヨリ生ズル損失ヲ多カラザラシメバ、一個ノ税金ヲ半減シ五厘トナスモ亦以テ郵便經濟ノ物體ニ於テ其收入從前ト稍相同ジキモノトス。要スルニ一個税金半減即チ五厘トスルトキハ從來收入シタル新聞雜誌税金總額金十九萬七千七百六十九圓四十四錢ノ半額即チ金九萬八千八百八十四圓七十二錢ヲ減ズベク、其減額ハ郵便專有ニ依リ新タニ郵便ニ増加スベキ收入金十一萬千七百十四圓八十六錢一厘（經費差引殘高）ヲ以テ之ヲ補シ、尙ホ金一萬二千八百三十圓十四錢一厘ノ殘餘ヲ見ル、其殘餘ハ從來損失スル所ノ二十九萬千二百七圓三十二錢九厘ノ一部ヲ償却スルモノタルノ計算ナリ。

稅額ヲ一個一錢トシテ取調タル分

新聞紙雜誌收入額及支出額

一、金四十四萬五千二百六十七錢五厘

收入額

內

金十九萬七千七百六十九圓四十四錢

從前收入額

但平均壹個收入額一錢一厘九毛八糸二忽餘

金二十四萬七千三百三十三圓二十三錢五厘

郵便專有ニ付増加スルモノニ對シ收入額

但同上

一、金五十萬九百二十八圓五十二錢五厘

支出額

內

金四十八萬八千九百七十六圓七十六錢九厘

從前支出額

但平均一個支出額二錢九厘六毛二糸餘

金一萬千九百五十一圓七十五錢六厘

郵便專有ニ付増加支出額

但平均一個支出額五毛七糸九忽餘

收支比較

一、金五萬五千八百二十五圓八十五錢

支出超過額

外

金二十九萬千二百七圓三十二錢九厘

從前支出超過額

郵便收入及支出總額比較

金二十三萬五千三百八十一圓四十七錢九厘

郵便專有ニ付增加收入超過額

稅額ヲ一個五厘トシテ取調タル分

新聞紙雜誌收入額及支出額

一、金二十二萬二千五百五十一圓三十三錢七厘

收 入 額

內譯

金九萬八千八百八十四圓七十二錢

從前郵便ニ出シタルモノニ對シ收入額

但平均一個收入額五厘九毛九糸九忽餘

金十二萬三千六百六十六圓六十一錢七厘

郵便專有ニ付增加ス
ルモノニ對シ收入額

但同上

一、金五十萬九百二十八萬五十二錢五厘

支 出 額

內譯

金四十八萬八千九百七十六圓七十六錢九厘

從前支出額

但平均一個支出額二錢九厘六毛二糸餘

金一萬千九百五十一圓七十五錢六厘

郵便專有ニ付增加支出額

但平均一個支出額五毛七糸九忽餘

收支比較

一、金二十七萬八千三百七十七圓十八錢八厘

支 出 超 過 額

外

金三十九萬九十二圓四錢九厘

從前支出超過額

金十一萬千七百十四圓八十六錢一厘

郵便專有ニ付增加收入超過額

新聞紙雜誌ニ係ル

郵便收入及支出計算ノ說明

新聞紙雜誌ニ係ル郵便稅ノ收入并ニ之ガ支出ノ金額ハ明治十九年度ノ郵便物個數量目ニ依リ取調タリ其十九年度ニ依リタルハ現今調査シ得ベキ最近ノ年度ナルガ故ナリ。即チ其調査シタル數量金額等ハ左ノ如シ。

郵便物個數量目

郵便收入及支出總額比較

一、個數一億二千五百六十二萬七千九百六十九個
此量目三十七萬三千六百四十七貫四百二匁

内

個數一千六百五十萬五千五百四十五個

新聞紙雜誌

此量目十八萬五千六百四十四貫百五十五匁

個數一億九百二十二萬二千四百二十四個

書狀其他ノモノ

此量目十八萬八千四百八十三貫二百四十七匁

郵便收入

一、金二百二十六萬四千三百九十二圓五錢一厘

内

金十九萬七千七百六十九圓四十四錢

新聞紙雜誌

金二百六萬六千六百二十二圓六十一錢一厘

書狀其他ノ分

郵便經費

一、金二百二十九萬三千七百六十七圓九十四錢

内

金四十八萬八千九百七十六圓七十六錢九厘

新聞紙雜誌

金百八十萬四千七百九十一圓十七錢一厘

書狀其他ノ分

右經費ノ内譯ハ左ノ如シ。

一、金二百二十九萬三千七百六十七圓九十四錢

總額

内

金五十一萬五千四百六十一圓四十九錢七厘

遞送費

金五十七萬四千三百五十九圓五十六錢九厘

集配費

金百二十萬三千九百四十六圓八十七錢四厘

諸費

右經費ヲ郵便物ニ割當タル事由

一、遞送費ノ事

郵便物ノ遞送ハ重量ニ依リテ經費ノ支出ニ多寡ヲ生ズルモノナレバ遞送費ノ總額ヲ郵便物ノ總量目ニ割當ルニ一匁ニ付金一厘三毛七糸九忽強ヅツヲ要ス依テ此等率ヲ新聞紙雜誌ノ總量目(從前郵便ニ依リタルモノ)ニ乘ジ該遞送費ヲ計算シタリ。

一、集配費其他取扱費ノ事

郵便物集配其他取扱方ニ屬スル費用ハ量目ノ多寡ニ依リテ手數ニ増減ヲ來スモノニアラ

郵便收入及支出總額比較

ズ、其手數ヲ要スルハ概ネ個數ノ多キト寡キトニ依ルモノナレバ、集配其他ノ費用ハ總テ郵便物ノ個數ニ割當ルヲ以テ至當ナルベシ。依テ郵便物ノ總個數ニ割當ルニ一個ニ付一錢四厘一毛五糸五忽弱ツツナルヲ以テ、此算率ヲ新聞紙雜誌ノ總個數(從前郵便ニ依リタルモノ)ニ乘ジ該費額ヲ計算シタリ。

新聞紙雜誌ノ運送ヲ郵便專有ニ屬スルニ於テ新タニ郵便物増加スベキ個數ヲ推算スルニ

二千六十四萬二千六十六個(郵便專有ノ爲メニ新タニ増加スベキ分)

此譯ハ明治十九年度中新聞紙雜誌ノ發刊數ヲ統計スルニ總數八千五百四十三萬二百二十八個ナリ。此内從來郵便ニ依リタルモノ一千六百五十萬五千五百四十五個ヲ引去ルトキハ六千八百九十二萬四千六百八十三個トナル此内郵便專有外即チ發行地并ニ其境界外三里内ニ配付スルモノハ

四千八百二十八萬二千六百十七個

郵便專有外

郵便專有ニ入ラザルモノヲ算出シタルハ去ル明治十八年中東京報知新聞社始二十社ノ發行地ニ於テ配達スル個數ヲ取調タルトキノ比例(東京ハ郵便以外ノ個數ニ對シ八割二分

九厘四毛四糸)(各地方ハ東京ノ三分ノ二)ニ依リ取調タリ。

從前郵便ニ依リタルモノヲ合算スレバ

總個數三千七百十四萬七千六百一十一個

總個數三千七百十四萬七千六百一十一個

内

千六百五十萬五千五百四十五個

從前郵便ニ依リタルモノ

二千六十四萬二千六十六個

郵便專有ノ爲メ増加スベキモノ

六百二十七萬四千六十七個

東京發行ノ分

内 千四百三十六萬七千九百九十九個

地方發行ノ分

右ノ個數ニ依リ其專有ノ爲メニ要スル經費ヲ取調ルニ

遞送費ノ事

郵便專有ノ爲メニ増加スル新聞紙雜誌ハ總テ遞送ノ費用ヲ多分ニ要セザル個所ノミナリ依テ其費用ヲ算出セントスルニ臨ミ從來郵便ノ遞送費増加ノ割合ヲ見ルニ一分二厘六毛弱ナリ。然ルニ此割合ノ内ニハ遞送方法改正ノ爲メ經費ヲ節減シタルモノアルニ依リ、右増費ノ歩合ヲ減縮シタルモノ多キヲ以テ彼此斟酌シ乃チ專有ノ爲メニ増加スル費額

郵便收入及支出總額比較

(此費額ハ從前郵便經費算出例ニ依リ算出シタルモノ)ハ二分五厘二毛ノ割合ノ金額ヲ右増加ノ爲メニ要スル遞送費トナシタリ。

集配費ノ事

個數増殖スレバ隨テ集配ニ要スル手數ヲ増加スベキ理ナリシヲ以テ從來集配費ニ増加ヲ來シタル割合ヲ見ルニ二分二厘三毛弱ナリ依テ專有ノ爲メニ増加スル費額(此費額ハ從前郵便經費算出ノ例ニ依リ算出シタルモノ)ノ二分二厘三毛ノ金額ヲ以テ右増加ノ爲メニ要スル集配費トナシタリ。

取扱費ノ事

郵便物増殖ニ付テハ直接其事務ニ從事スルモノノ費用ハ多少増加セザルヲ得ザルベシト雖トモ、營理費ノ如キハ敢テ増加ヲ要セズ故ニ郵便取扱費ノ從來増加ヲ來シタル割合ヲ見ルニ凡ソ年々二分五厘程ナリ。依テ專有ノ爲メニ増加スル費額(此費額ハ從前郵便經費算出ノ例ニ依リ算出シタルモノ)ノ二分五厘ノ金額ヲ以テ右増加ノ爲メニ要スル取扱費トナシタリ。

稅額ヲ一個一錢トシテ取調タル分
書籍見本收入額及支出額

一、金六萬三千七百四十三圓五十七錢七厘

收入額

內譯

金五萬千五百二十四圓七十七錢三厘

從前郵便ニ出シタルモノニ對シ收入額

但平均一個收入額二錢三厘二毛七糸餘

金一萬二千二百十八圓八十錢四厘

減稅ニ付増加スルモノニ對シ收入額

但同上

一、金六萬二千六百七十三圓七十九錢

支出額

內譯

金六萬二千三百八十八圓五十八錢四厘

從前支出額

但平均一個支出額二錢八厘一毛七糸餘

金二百八十五圓二十錢六厘

減稅ニ付増加支出額

但平均一個支出額五毛四糸三忽餘

郵便收入及支出總額比較

收支比較

一、金千〇六十九圓七十八錢七厘

收入超過額

外

金一萬八百六十三圓八十一錢一厘

從前支出超過額

金一萬千九百三十三圓五十九錢八厘

減稅ニ付增加收入超過額

土木費準備法考案

土木費準備法

『』ハ原本ノ朱書ニヨルモノ。以下之レニ倣フ

『世運ノ進歩ニ從ヒ各地方モ交通運輸ノ便ヲ開カントスルノ氣勢年一年ヨリ盛ンニ至ルト雖モ、如何セン我國ノ道路タル積年封建ノ餘弊ヲ受ケ、到ル處險惡ヲ極メ、巨額ノ原資ヲ要スルニアラザレバ、容易ニ之ヲ改良ス可カラズ。又河川ノ如キモ昔日治水ノ術未ダ開ケズ、洪水毎ニ汎濫暴溢ノ酸害ヲ免レザルモノ皆是レナリ。而シテ從來官民其土木費ノ原資ヲ定メズ、地方官ノ請求ニ遭ヒ補助セラレザルニ非レドモ、畢竟スルニ臨期ノ處分ニ出デ別途ノ支辨ニ屬スルモノナレバ、財政ノ泰否ニ因リ或ハ其補助ヲ許シ、或ハ其補助ヲ許サレザル等ノ事ナシトセズ。亦事業ノ輕重、緩急ヲ顧ルニ違アラズ、許否ノ間不權衡ノ嫌ナキ能ハズ。然レバ則修路治水費原資ノ方法ヲ定ムルコト實ニ今日ノ最大急務ト謂ハザルヲ得ズ。依テ國費ト地方費トヲ以テ土木費準備法ヲ設定セラレンコトヲ欲スルナリ』

第一條 土木費準備金ハ左ノ原資ニ充ルモノトス。

土木費準備法考案

第一 國道修築

第二 河川改修

但航路十里以内ニ亘ルモノトス。尤堤防修繕等從來沿岸或ハ水利關係町村ノ負擔ニ屬スルモノハ其慣行ニ依ル。

『一、國道ハ全國ノ氣脈ヲ伸暢スル要具ナルニモ拘ハラズ到ル處其險夷廣狹ナラズ、國道ノ國道タル體裁ヲ備ヘタルモノ幾ント希ナリ。今原資ニ依リ本年第一章公布ノ制ニ基キ凡テ之ヲ改良スルノ目的ナリ。

一、一府縣内利害ヲ公共スル河川ハ大抵航路十里以上ノ巨流ニ依ルモノナレバ今是等ノ河川ニ就キ其流線ヲ矯正シ、水源ノ砂害ヲ扞止シ洪水ノ害ヲ防ギ舟楫ノ便ヲ起サントスルノ目的ナリ』

第二條 土木準備金ヲ人民ニ賦課スルハ地租割戸數割ノ二トス。其割合ハ府縣會ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ、其總額ハ政府ヨリ配付スル金額ノ二倍ヨリ少カラザルヲ要ス。

但市街ハ府縣會ノ議決ヲ以テ政府ノ許可ヲ得郡村ト其賦課法ヲ異ニスルヲ得。

『從來府縣工事ノ經費ニ於ケル之ヲ三分シ其二分ハ〇〇ニテ負擔シ、殘ル一分ハ政府ノ補助ヲ請フコト大抵慣例ノ如クニ成リタリ。然レドモ國庫ノ都合ニ依リ其補助ヲ許否セラル

ルヲ以テ、府知事縣令ハ府縣會ニ付スル議案中土木費ノ事項ニ於テ殊ニ一難事トスル所ナリ。何ントナレバ先ヅ其補助ヲ政府ニ請ハン乎、縣會ノ議決ヲ經タル上ナラデハ之ヲ採用セラレズ。先府縣會ノ議ニ付セン乎、政府補助有無ノ質問ヲ受クルニ方リ、其答辯ニ苦ム所ナリ。若シ政府ヨリ幾分ヲ補助セラルルモノト前定スレバ、之ヲ府縣會ニ付スルモ自然勢力ヲ有スルモノト雖モ之ナキトキハ或ハ之ヲ不決シ或ハ減額スル等、當局者ノ施行ニ困難ヲ與フルコト往々之レナシトセズ。今此準備法ヲ設定セラレバ府縣ニ於テ右等ノ困難ヲ免ルルハ勿論、政府ニ於テモ臨時ノ處分別途支辨等ニ係ル詮議ヲ煩サレズ、彼此兩便ト云フベキナリ。而今政府ヨリ配付セラルル金額ノ二倍以上ヲ人民ニ負擔セシメントスルハ前顯ノ慣例ヲ用ヒタルナリ。

市街ノ如キハ其工事モ自ラ郡村ト同ズカラザルヲ以テ、必シモ地租割ト戸數割トノミニ據ルヲ須ヒズ。府縣會ノ決議ニ依リテハ他ノ徵收法ヲ用ユルモ可ナラントノ見ナリ』

第三條 政府ハ每歲二百萬圓ノ金額ヲ土木準備金ノ内へ支出スベシ。

第四條 政府ヨリ支出スル金額ノ内五十萬圓ハ中央準備金トシテ内務卿之ヲ管掌シ、百五十萬圓ハ各府縣ノ國道河川ノ里數ニ應ジ之ヲ配付スベシ。

『右準備金額ハ都テ内務卿ノ管掌トシ、中央準備金ハ非常水害等ノ爲メ地方準備金支辨

ニ不足ヲ生ズルトキハ此内ヨリ特別ニ之ヲ支出シ、又ハ第八條ノ場合ニ於テ之ヲ支出スルモノトス』

第五條 府縣ニ於テ其年度内ニ起工ヲ要セズ、又ハ起工スルモ其經費寡額ニシテ凡テ準備金ニ餘裕アルトキハ或ハ之ヲ貸付シ或ハ公債證書ニ交換シ儲蓄スルノ方法、又ハ管守スルノ方法ハ府知事縣令ヨリ之ヲ府縣會ニ付シ、其議決ヲ取り内務卿ニ呈狀シ其許可ヲ得テ之ヲ施行スベシ。

『府縣ノ内ニハ該法施行以前既ニ修繕治水ノ略行届キ、目下起工ヲ要セザルモノモ可有之或ハ起工スルモ其地勢ニ依リ經費ニ餘裕ヲ生ズルモノモ可有之ニ付、之レガ儲蓄法ヲ議決セシメ他日ノ需用ニ供セシメントス』

第六條 府縣ニ於テ工事ヲ起サントスルトキハ其計畫豫算ヲ府縣會ニテ議決セシメ、内務卿ノ許可ヲ得テ之ヲ施行スベシ。

第七條 府縣ニ於テ施行スル工事ノ外内務卿ニ於テ某ノ國道ヲ改築シ、其河川ヲ修治スルヲ要用トスルトキハ或ハ之ヲ府知事縣令ニ指揮シ或ハ内務卿ニ於テ直轄施工スルコトアルベシ。

第八條 前條内務卿ニ於テ直轄施工スルモノハ其經費ハ中央準備金ノ内ヨリ之ヲ支辨スベシ。

第九條 府縣ニ於テ新道ヲ開鑿シ又ハ河川ヲ改修スル爲メニ要スル技術者又ハ從事員ノ給料旅費日當及内務省土木局員ノ派出ヲ要シタルトキ該局員ノ旅費日當ハ政府ヨリ配付スル金額ノ内ヨリ之レヲ支辨スベシ。

但本文給料旅費日當ハ配付金ノ十分ノ一ヲ以テ程度トス。

『工事ヲ起スニ當リ殊ニ必要ナルハ技術者其他工事委員ノ給料旅費日當等ニ在リ是等ハ準備金ノ内ヨリ支辨スルニ非ザレバ各廳費ニ限りアリ行届キ難キヲ以テ故ラニ此條ヲ設ケントスルナリ』

第十條 府知事縣令ハ毎年八月中前年度ニ係ル其準備金ノ出納ヲ内務卿ニ報告シ、内務卿ハ毎年中央準備金及府縣準備金ノ出納ヲ全國ニ公布スベシ。

第十一條 此方法ハ十ヶ年間施行スルモノトス滿期ノ後ニ至リ各府縣ニ存在セル準備金ハ府縣會ノ議決ヲ以テ其處分方ヲ定ムベシ。

『此方法ヲ十ヶ年ノ施行ト見込タルモノハ先準備金十ヶ年ノ總額ヲ四千五百萬圓トシ此内全國々道ノ惣里數（北海道ヲ除キ）千八百六十里ノ修繕費千四百九十二萬八千圓（一里ノ工費凡ソ八千圓ト見込右ハ清水越新道開鑿費ノ比例ヲ取ル）トスルトキハ其殘額三千七萬二千圓ニシテ右ヲ以テ六十五河川ヲ悉ク改良スルノ見込ナリ其治水費見込ハ追テ別ニ之ヲ

算出スベシ

記

一、金二百萬圓

内

金五十萬圓引

殘金百五十萬圓

内

金百十二萬五千圓

地租割七分五厘

但地租金一圓ニ付金二錢七厘二毛六七一

此地租金四千二百二十五萬八千四百四十圓

金三十七萬五千圓

戶數割二分五厘

但一戶當金四錢九厘六毛九五

此戶數七百五十四萬六千二十五戶

(參考)

總額金四千五百萬圓

内

千四百六十四萬八千圓

國道費

但國道里程千八百三十一里ニ付、改修費八千圓ト見積如此

三千三十五萬二千圓

河川改修費

但河川航路十里以上ノ者六十五川此惣里數千八百七十一里此半里數即九百三十五里半ノ改修ヲ要スル者ト見積リ航路一里ニ付三萬二千四百四十四圓六十八錢餘トナル。

土木費配當表

縣名	種別	地租配當額	戶數配當額	合計額
東京		一四、八六三 ^円	一四、九四一 ^円	二九、八〇四 ^円
		〇七 ^円	八九五	九七三

土木費準備法考案

愛知	三重	栃木	茨城	千葉	群馬	埼玉	新潟	長崎	兵庫	神奈川	大阪	京都
四八、五八二	三八、九五七	二〇、九九〇	三〇、四七二	三五、〇三六	二一、三八〇	三九、一九九	四四、三一九	一一、九一一	五五、〇四四	二〇、六二五	五六、九一〇	二〇、九二九
一七七	五四三	九七七	〇七五	九九六	五二五	一二八	〇九二	八九九	九九五	九九八	六九二	九八一
一五、三七六	八、六八四	五、〇二〇	八、四五四	一〇、三〇七	六、三三二	八、六三九	一五、一九一	七、三四六	一五、七九九	八、〇五七	一八、六九三	九、九〇四
二七九	四〇〇	七三六	九五八	九三六	一八六	八三三	七二二	五六二	七三〇	二九九	四七〇	八六〇
六三、九五八	四七、六四二	二六、〇一一	三八、九二七	四五、三四四	二七、七二二	四七、八三八	五九、五二〇	二〇、二五八	七〇、八四四	二八、六七二	七五、六〇四	三〇、八三四
四五六	九四三	七二三	〇三三	九三二	七〇二	九五二	八〇三	四六〇	七二五	二九七	一六一	八四二

石川	福井	秋田	山形	青森	岩手	福島	宮城	長野	岐阜	滋賀	山梨	静岡
二、一八九	一七、四九〇	一八、六二二	二二、八五五	一一、四〇八	一三、八二三	二八、〇六七	一六、二〇六	二六、四三八	二八、八八八	三三、八四三	一一、二三二	三三、三三八
六七二	六九九	〇〇四	六二七	三三〇	三三七	八八〇	五二八	八〇二	〇二五	三五八	四八六	七七四
七、二二一	五、九〇五	五、七九九	五、七二五	四、〇五二	五、二八〇	七、〇八三	四、九八四	一〇、七九三	一〇八、七六四	七、〇三一	三、九六八	九、五五四
五八九	七五四	八〇四	九〇八	八七六	〇四四	一七七	九〇五	一五八	九六五	八九二	一四六	〇五八
二八、四〇二	二三、三九六	二四、四一一	二八、五五一	一六、四六一	一九、〇九三	三五、一五一	二二、一九二	三七、三二二	三七、五八二	三九、八七五	一五、二〇〇	四一、八四二
二六一	四五三	八〇八	五二五	二〇六	四二二	〇五七	四三三	九五九	九八一	二五〇	六三二	八三二

富山	三三、一五〇	八四〇	七、〇五一	四二二	三〇、二〇二	二二六
鳥取	一五、六七四	五四七	四、〇八六	八六七	一九、七六一	四一四
島根	一九、二九四	六三六	七、五〇八	五六七	二六、八〇三	二〇三
岡山	四〇、〇九七	三〇七	一一、〇五五	二四九	五一、一五二	五五六
廣島	三四、六八二	五四四	一三、三三三	六六五	四八、〇一六	一八九
山口	一五、八二一	二三七	九、四五八	九九六	二五、二七〇	二三三
和歌山	二〇、七三三	四五六	六、四八四	〇〇五	二七、二二六	四六三
徳島	一六、八二〇	二一〇	六、五二五	九五九	二三、三三六	〇七九
愛媛	四〇、四一九	二七七	一六、二〇二	二二〇	五六、六二二	四八七
高知	一六、一七四	五四四	六、二五二	二七七	二二、四二六	八二二
福岡	三八、五四八	九一七	一一、〇三三	七五四	四九、五六二	六七一
大分	一九、六〇三	二六四	七、五八五	〇四七	二七、一八七	三二一
佐賀	一九、七九七	三〇五	五、四三六	三三五	二五、三三三	六四〇

熊本	二七、九三二	五六一	一〇、二八一	二九九	三八、三三三	八六〇
宮崎	二二、六一五	九九六	四、〇二五	一五七	一六、六三二	一五三
鹿児島	二二、一五二	五九八	九、八五〇	七九二	三一、〇〇三	三八九
合計	一、二五〇、〇〇〇	〇〇〇	三七五、〇〇〇	〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	〇〇〇

(別案)

甲

府縣名	人員	高	配付金額	但一人ニ付金十五錢ノ積リ
東京	二九七、七五九		四四、六六三	八五〇
京都	二二四、六四五		三三、六九六	七五〇
大阪	四二五、九六三		六三、八九四	四五〇
神奈川	二一八、〇二六		三二、七〇三	九〇〇
兵庫	四〇一、二九九		六〇、一九四	八五〇

土木費準備法考案

岐 阜	滋 賀	山 梨	靜 岡	愛 知	三 重	枋 木	群 馬	茨 城	千 葉	埼 玉	新 潟	長 崎
二二二、〇七〇	一六五、〇八六	一〇六、九三四	二七二、九三九	三五六、八〇七	二二二、四六九	一五八、二一五	一五九、五八〇	二五七、〇五二	三一六、一六九	二五二、一五二	四二五、七一八	一九八、二五七
三四、八一〇	二四、七六二	一六、〇四〇	四〇、九四〇	五三、五二一	三四、八七〇	二三、七三二	二三、九三七	三八、五五七	四七、四二五	三七、八二二	六三、八五七	二九、七三八
五〇〇	九〇〇	一〇〇	八五〇	〇五〇	三五〇	二五〇	〇〇〇	八〇〇	三五〇	八〇〇	七〇〇	五五〇

岡 山	島 根	鳥 取	富 山	石 川	福 井	秋 田	山 形	青 森	岩 手	福 島	宮 城	長 野
二九五、一四四	一九〇、七三一	一〇九、七二九	一八五、一二四	一九三、一〇九	一五四、一二四	一八二、八二六	一九〇、四三七	一三一、〇三〇	一七五、三二七	二二八、七五四	一八〇、五九二	二八二、三五三
四四、二七一	二八、六〇九	一六、四五九	二七、七六八	二八、九六六	二三、一一八	二七、四二三	二八、五六五	一九、六五四	二六、二九九	三四、三二三	二七、〇八八	四二、三五二
六〇〇	六五〇	三五〇	六〇〇	三五〇	六〇〇	九〇〇	五五〇	五〇〇	〇五〇	一〇〇	八〇〇	九五〇

廣島	三四四、〇四二	五一、六〇六	三〇〇
山口	二四八、五四四	三七、二八一	六〇〇
和歌山	一六五、八八二	二四、八八二	三〇〇
徳島	一八一、二六〇	二七、一八九	〇〇〇
愛媛	四一〇、〇四八	六一、五〇七	二〇〇
高知	一六二、五九〇	二四、三八八	五〇〇
福岡	三〇五、四七〇	四五、八二〇	五〇〇
大分	二〇〇、八四三	三〇、一二六	四五〇
佐賀	一四四、一一三	二一、六一六	九五〇
熊本	二八二、九九七	四二、四四九	五五〇
宮崎	一〇七、八三二	一六、一七四	八〇〇
鹿児島	二四五、九七一	三六、八九五	六五〇
合計	一〇、〇〇〇、〇一二	一、五〇〇、〇〇一	八〇〇

乙

府縣名	一回人員高	四回人員高	總計
東京	二九七、七五九	一、一九一、〇三六	一四八八、七九五
京都	二二四、六四五	八九八、五八〇	一一二三、二二五
大阪	四二五、九六三	一、七〇三、八五二	二二二九、八一五
神奈川	二一八、〇二六	八七二、一〇四	一〇九〇、一三〇
兵庫	四〇一、二九九	一、六〇五、一九六	二〇〇六、四九五
長崎	一九八、二五七	七九三、〇二八	九九一、二八五
新潟	四二五、七一八	一、七〇二、八七二	二二二八、五九〇
埼玉	二五二、一五二	一、〇〇八、六〇八	一二六〇、七六〇
群馬	一五九、五八〇	六三八、三二〇	七九七、九〇〇
千葉	三一六、一六九	一、二六四、六七六	一五八〇、八四五
茨城	二五七、〇五二	一、〇二八、二〇八	一二八五、二六〇
栃木	一五八、二二五	六三二、八六〇	七九一、〇七五

秋田	山形	青森	岩手	福島	宮城	長野	岐阜	滋賀	山梨	静岡	愛知	三重
一八二、八二六	一九〇、四三七	一三一、〇三〇	一七五、三二七	二二八、七五〇	一八〇、五九二	二八二、三五三	二三二、〇七〇	一六五、〇八六	一〇六、九三四	二七二、九三九	三五六、八〇七	二二二、四六九
七三一、三〇四	七六一、七四八	五二四、一二〇	七〇一、三〇八	九一五、〇一六	七二二、三六八	一一二九、四一二	九二八、二八〇	六六〇、三四四	四二七、七三六	一〇九一、七五六	一四二七、二二八	九二九、八七六
九一四、一三〇	九五二、一八五	六五五、一五〇	八七六、六三五	一一四三、七七〇	九〇二、九六〇	一四一一、七六五	一一六〇、三五〇	八二五、四三〇	五三四、六七〇	一三六四、六九五	一七八四、〇三五	一一六二、三四五

福岡	高知	愛媛	徳島	和歌山	山口	廣島	岡山	島根	馬取	富山	石川	福井
三〇五、四七〇	一六二、五九〇	四一〇、〇四八	一八一、二六〇	一六五、八八二	二四八、五四四	三四四、〇四二	二九五、一四四	一九〇、七三一	一〇九、七二九	一八五、一二四	一九三、一〇九	一五四、一二四
一二二一、八八〇	六五〇、三六〇	一六四〇、一九二	七二五、〇四〇	六六三、五二八	九九四、一七六	一三七六、一六八	一一八〇、五七六	七六二、九二四	四三八、九一六	七四〇、四九六	七七二、四三六	六一六、四九六
一五二七、三五〇	八一二、九五〇	二〇五〇、二四〇	九〇六、三〇〇	八二九、四一〇	一二四二、七二〇	一七二〇、二一〇	一四七五、七二〇	九五三、六五五	五四八、六四五	九二五、六二〇	九六五、五四五	七七〇、六二〇

大分	二〇〇、八四三	八〇三、三七二	一〇〇四、二一五
佐賀	一四四、一一三	五七六、四五二	七二〇、五六五
熊本	二八二、九九七	一一三一、九八八	一四一四、九八五
宮崎	一〇七、八三二	四三一、三二八	五三九、一六〇
鹿児島	二四五、九七一	九八三、八八四	一二二九、八五五
合計	一〇〇〇〇、〇一二	四〇、〇〇〇、〇四八	五〇、〇〇〇、〇六〇

總人員四千萬四十八人

是ヲ代夫金ニ引直ストキハ

金四百萬四圓八十錢

但一人ニ付十錢ノ積リ

(參考)

一、金千五百萬圓(百五十萬圓ノ十ヶ年分)

一、金四千萬四十八圓(四百萬四圓八十錢ヅツ十ヶ年分)

總計金五千五百萬四十八圓

内

金千四百六十四萬八千圓

但國道里程千八百三十一里(三十五町)一里ニ付改修費八千圓ト見積如此。

金四千三十五萬二千四十八圓

但河川航路十里以上ノ者六十五川此總里程千八百七十一里(九丁)此半里數即チ千九百三十五里半、一里ニ付四萬三千二百二十四圓二十錢餘トナル。

明治七年河港道路修繕費

一、金百七十二萬六千二百五十六圓六十五錢九厘

金百二十一萬四千四百七十圓二十八錢四厘

内 金四十八萬五百七十二圓二十七錢六厘

土木費準備法考案

府縣經費金仕拂高

臨時費

（金三萬千二百十四圓九錢九厘

直轄ノ分

三六八

同八年度同上

一月ヨリ
六月マデ

一、金九十九萬五千二十六圓四十二錢九厘

金八十萬圓

内 金八萬八千四百五十七圓五十三錢八厘
金十萬六千五百六十八圓八十九錢一厘

府縣經費金仕拂高
臨時費
直轄ノ分

明治八年度河港道路修繕費

一、金百四十七萬九千二百三十七圓七十五錢六厘

金七十八萬八千八百三十六圓

内 金六十萬四千八十四圓九十六錢五厘
金八萬六千三百十七圓七十九錢一厘

府縣經費金仕拂高
臨時費
直轄ノ分

九年度同上

一、金百四十萬二千八百八十五圓五十三錢六厘

金七十八萬八千八百三十六圓

内 金五十萬八千七百七十九圓七十三錢
金十一萬三千六百六十九圓八十錢六厘

府縣經費金仕拂高
臨時費
直轄ノ分

同十年度同上

一、金百三十三萬二千六百九十五圓二十九錢五厘

金七十八萬九百九十九圓

内 金四十二萬三千六百七十六圓三十五錢六厘
金十二萬八千九百九十三錢九厘

府縣經費金仕拂高
臨時費
直轄ノ分

同上十一年度同上

一、金百四十六萬二千四百一十一圓七十二錢一厘

內 金七十八萬九百九十九圓

內 金十一萬六千四百一十圓八十一錢五厘

金十六萬五千一圓九十錢六厘

府縣經費金仕拂ノ高

臨 時 費

直 轄 ノ 分

同十二年度同上

一、金百四十七萬千二百一十二錢三厘

內 金七十四萬五千三百三圓九十八錢五厘

內 金五十一萬七千八百三十九圓九十四錢八厘

金二十萬八千五百五十八圓十九錢

府縣經費金仕拂高

臨 時 費

直 轄 ノ 分

同十三年度同上

一、金二百二十七萬七千五百九十四圓七十三錢六厘

金七十二萬二千九十圓

內 金百四十二萬二千二百二十二圓二十六錢八厘

金十三萬三千三百八十二圓四十六錢八厘

府縣經費金仕拂高

臨 時 費

直 轄 ノ 分

明治十七年土木費

一、金四十五萬五千八百六十三圓

一、金五萬千二百七十九圓

一、金六十三萬二千六百五圓九十九錢三厘

一、金一萬二百七十六圓

一、金五萬四千九百七十八圓二十錢

一、金五萬五千五十圓

一、金八千六百七十圓

合計金百二十六萬六千三百八十二圓十九錢三厘

直轄河川改修工費

清水越新道工費

十七年度各府縣國庫補助額

府下郭内外修道工費

同新大橋改架工費

開港場及外國人居留地内修築工費

沖繩縣土木費

十八年度土木費豫算調表

科	目	豫算請求額 ^円	豫算内定額 ^円	減額 ^円
澗川筋	改築工費	五二、五〇〇	三七、五〇〇	一五、〇〇〇
利根川	同	五二、五〇〇	三七、五〇〇	一五、〇〇〇
信濃川	同	五二、五〇〇	三七、四五八	一五、〇四二
木曾川	同	五二、五〇〇	三七、五〇〇	一五、〇〇〇
富士川	同	五二、五〇〇	三七、五〇〇	一五、〇〇〇
庄川	同	三七、五〇〇	二二、五〇〇	一五、〇〇〇
阿武隈川	同	三七、五〇〇	二二、五〇〇	一五、〇〇〇
大井川	同	二二、五〇〇	七、五〇〇	一五、〇〇〇
阿賀野川	同	二六、二五〇	一二、一五〇	一五、〇〇〇
吉野川	同	三三、七五〇	一八、七五〇	一五、〇〇〇

筑後川	同	三七、五〇〇	二二、五〇〇	一五、〇〇〇
最上川	同	三七、五〇〇	二二、五〇〇	一五、〇〇〇
天龍川	同	四五、〇〇〇	二二、五〇〇	二二、五〇〇
澗川流域	砂防費	一二、八一九	一二、八二〇	〇一圓増
河港	量水標費	一二、七五〇	一〇、二八九	二、四六一
東京府郭内外	修道費	七、七〇七	七、七〇七	
開港場并外國人居留地	修繕費	五六、二五八	五六、二五九	一圓増
長崎港	外國人居留地橋梁架換費	八八八	八八八	
長崎港	浚疏費	三〇、〇〇〇	二二、五〇〇	七、五〇〇
清水越新道	開鑿費	三、六四一	三、六四一	
沖繩縣	諸工費	二一、七六四	六、五〇三	一五、二六一
東京府川浚費	補助	三二、五八九	三二、五八九	
熊本縣三角海灣	築港補助費	三三、三三二	二四、五九九	八、七三三

山口縣	榎野川改修補助	六、六〇〇	四、九五〇	一、六五〇
宮城縣	<small>道路運河</small> 開鑿費補助	二八、七〇〇	二一、五二五	七、一七五
東京府	壕浚費	七、七〇二	七、七〇二	
大阪府	河港浚疏費補助	一三、七五四		一三、七五四
橫濱	水道改築工費	二五〇、〇〇〇	一八七、五〇〇	六二、五〇〇
琵琶湖	疏水工費補助	五〇、〇〇〇	三七、五〇〇	一三、五〇〇
京都府	車道開鑿費補助	六、〇〇〇	四、五〇〇	一、五〇〇
長野縣	道路開鑿費補助	三〇、〇〇〇	二二、五〇〇	七、五〇〇
栃木縣	同	一一、〇〇〇	八、二五〇	二、七五〇
兵庫縣	同	六、〇八〇	四、五六〇	一、五二〇
新潟縣	同	七、八二一	五、八六七	一、九五四
山形縣	同	一〇、〇〇〇	七、五〇〇	二、五〇〇
神奈川縣	同	三〇、〇〇〇	二二、五〇〇	七、五〇〇

島根縣	同	五二、九九三	三九、七四五	一三、二四八
廣島縣	同	三三、七一八	二五、二八九	八、四二九
岐阜縣	同	一〇、〇〇〇	七、五〇〇	二、五〇〇
山形縣	同	一七、七〇〇	一三、二七五	四、四二五
青森縣	同	一三、八九八	一〇、四二四	三、四七四
富山縣	同	一八、〇〇〇	一三、五〇〇	四、五〇〇
大分縣	同	二〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	五、〇〇〇
青森縣	同	八、二〇三	六、一五三	二、〇五〇
山形縣	同	一四、五〇〇	一〇、八七五	三、六二五
埼玉縣	同	五、六九三	四、二七〇	一、四二三
東京府	小笠原島諸工費	一三、六三三	一〇、二二五	三、四〇八
那須原	疏水工費	一一八、七二九	一〇〇、〇〇〇	一八、七二九
計		一、五七三、九七二	一、一二九、一六一	四四四、七一一

外金

八十四萬七千二百二十一圓

臨時水害補助費

內

五十萬八千四百五十八圓

支給濟之分

三十三萬八千七百六十三圓

將來支給見込之分

總計金二百四十二萬千九百九十三圓

二十年度造船費内外國支出額概算

第一	海防艦	金八十七萬五千九百九十一圓	佛國	製造地未定
第二	同	金九十九萬二千四百二十五圓	外國	製造地未定
第三	同	金六十萬四千五百二十二圓	外國	製造地未定
	內	金二十六萬三千五百二十二圓	外國	製造地未定
	內	三十四萬千圓	內國	橫須賀
第一	報知艦	金二十八萬五千八百九十九圓	外國	未定
	內	金六萬千八百九十九圓	外國	未定
	內	金二十二萬四千圓	內國	橫須賀
第二	報知艦	金二十五萬八千二百三十一圓	外國	未定
水雷艇		金三十九萬五千八百三十六圓	外國	未定
		金二十九萬圓	外國	未定

造船費内外國支出額概算

風帆練習艦	金七萬三千五百十七圓	內國	製造所未定
內	金六萬六千六百六圓	小野濱	
內	金四千四百一十一圓	東京	
高雄艦	金三十萬七千六百六圓	內國	
內	金二十八萬八千六百八十圓	橫須賀	
內	金一萬八千四百二十六圓	東京	
愛宕艦	金七萬二千二百二十一圓	內國	
內	金六萬七千七百九十四圓	東京	
內	金四千三百二十七圓	橫須賀	
鳥海艦	金二萬五百二十六圓	內國東京	
赤城艦	金九萬四千二百二十一圓	內國	
內	金八萬八千四百七十四圓	小野濱	
內	金五千六百四十七圓	東京	
監督諸費	金八萬五千三百八圓	外國	佛國其他未定

保險料	金一萬八千八百六十圓	外國	未定
通信及運搬費	金五萬八千三百圓	外國	未定
內	金三萬八千八百圓	外國	未定
內	金一萬九千五百圓	內國	

内閣機密金勘定書

一金十一萬二千四百四十四圓十二錢八厘

明治十八年七月廿九日現在高
土方書記官長ヨリ田中書記官長へ引繼

内

七月廿九日

金四千圓

獨逸協會學校補助金一ヶ月金二千圓ツツ七八兩月分平田東助へ渡
ス受取書アリ

八月一日

金一萬五千圓

忠愛社補助金トシテ一時限下付ス
青木貞三受取書アリ

八月三日

金六百圓

大東社補助金八月分青木貞三へ渡ス
受取書アリ

同日

金一圓八十錢

右大阪送り爲換手数料受取書アリ

八月五日

金百三十六圓九十三錢九厘

朝日新聞補助金十五年五月ヨリ十八年四月迄毎月金五百圓ツツ相
渡猶不足ノ分本行ノ通渡濟明細勘定書並受取書アリ

八月二十五日

金九百七十五圓

日報社補助金八月分條野傳平へ渡受取書アリ

八月十七日

金二十圓

城多重渡八月分受取書アリ

同日

金五十圓

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費八月分山本復一へ渡ス受取書アリ

八月十七日

金九十圓

條公御密用費八月分

八月十八日

金八十九圓四十三錢四厘

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費十六年十一月ヨリ十八年七月迄香川
敬三立替ノ分山本復へ渡ス受取書アリ

九月九日

金六百圓

大東社補助金九月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

同日

金一圓八十錢

右大阪送り爲替手数料受取書アリ

内閣機密金勘定書

九月二十四日

金八百二十五圓

九月十六日

金九十圓

九月十七日

金二十圓

九月十七日

金五十圓

十月七日

金六百圓

同日

金一圓八十錢

十月二十四日

金四千圓

十月二十六日

日報社補助金九百七十五圓ノ處八月ヨリ七十五圓減額ニ相成リハ
月分渡置ノ分差引本行ノ通條野傳平ヘ渡ス受取書アリ

條公御密用費九月分

城多董渡シ九月分受取書アリ

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費九月分山本復一ヘ渡ス受取書アリ

大東社補助金十月分青木貞三ヘ渡ス受取書アリ

右大阪送り爲替手数料受取書アリ

獨逸協會學校補助金九、十兩月分青木貞三ヘ渡ス受取書アリ

金九百圓

十月七日

金四十圓

十月十六日

金二十圓

同日

金四十三圓二十四錢五厘

十月二十三日

金四十圓

十月二十七日

金九十圓

同日

金百圓

十一月二十四日

金六百圓

日報社補助金十月分條野傳平ヘ渡ス受取書アリ

一時限リ密用費青木貞三ニ渡ス受取書アリ

城多董渡十月分受取書アリ

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費十月分山本復一ヘ渡ス受取書アリ

一時限リ密用費青木貞三ニ渡ス受取書アリ

條公御密用費十月分

條公別途御密用費御書付アリ

大東社補助金十一月分社員青山大太郎出京中ニ付同人ヘ渡ス受取
書アリ

十一月二十五日

金九百五十圓

日報社補助金十一月分ヨリ金五十圓増條野傳平へ渡ス受取書アリ

十一月十七日

金二十圓

城多董渡シ十一月分受取書アリ

同日

金五十圓

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費十一月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

臨時機密費トシテ青木貞三渡シ受取書アリ

同日

金七十五圓

青山太郎大阪迄ノ旅費トシテ青木貞三へ渡ス受取書アリ

十一月二十一日

金三千圓

條公御密用費トシテ田中榮秀へ渡ス受取書アリ

十二月七日

金七百五十圓

紫溪社補助金一ヶ月百五十圓ツツ八月ヨリ十二月迄五ヶ月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

十二月七日

金四千圓

獨逸協會學校補助金十一月、十二月兩月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

同日

金六百圓

大東社補助金十二月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

同日

金一圓八十錢

右大阪迄爲替手数料受取書アリ

十二月十日

金五十圓

三井銀行へ一萬圓預ケ金手数料トシテ相渡ス受取書アリ

十二月十一日

金四千二百圓

大東社本年十一月ヨリ向一ケ年間毎月金三百五十圓ツツノ割ニテ別補助トシテ十二月分取東ネ一時ニ下附ス青木貞三へ渡ス受取書アリ

十二月十四日

金九十四圓九十錢

文書局判任官一名大阪迄ノ旅費トシテ青木貞三へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

臨時機密費トシテ青木貞三へ渡ス受取書アリ

十二月十五日

金一萬圓

紫溪社獨立資本トシテ別途下附金青木貞三へ渡ス受取書アリ

十二月二十五日

金二千八百五十圓

日報社補助金一ヶ月九百五十圓ツツニテ本年十二月分ヨリ十九年
二月分迄三ヶ月分取纏メ條野傳平へ渡ス受取書アリ

十二月七日

金九十圓

條公御密用費十一月分

十二月十七日

金四十八圓九十七錢五厘

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費十二月分山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡シ十二月分受取書アリ

十二月十八日

金九十圓

條公御密用費十二月分

同日

金二百圓

條公別途御密用費

十二月二十一日

金二百圓

條公御密用費毎月金九十圓ツツノ處廢止ニ付一時被下金

十九年一月八日

金六百圓

大東社補助金一月分青木貞三へ渡ス受取書アリ

十九年一月八日

金一圓三十一錢一厘

右六百圓ノ内四百三十七圓大阪迄爲換手数料受取書アリ

一月二十二日

金六百圓

大東社補助金二月分繰上ケ渡シ青木貞三へ受取書アリ

同日

金一圓八十錢

右大阪迄爲換手数料受取書アリ

一月十八日

金二十一圓八十八錢五厘

岩倉贈太政大臣行狀取調諸費十八年十二月中不足ノ分山本復一へ
渡ス受取書アリ

同日

金五十圓

同上十九年一月山本復一へ渡ス受取書アリ

同日

金二十圓

城多董渡シ一月分受取書アリ

同日

金二十圓

馬場文英渡シ一月分田中榮秀受取書アリ